
宴の夜に舞い降りる。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宴の夜に舞い降りる。

【Nコード】

N22360

【作者名】

津森太壱。

【あらすじ】

狩人で在り続けるその人は、とても強くて、そして弱い人だった。怖いくせに、悲しくせに、寂しくせに、つらくせに、狩人なのだ。その身体をいつも傷だらけにしながら、彼はヒョウジュのところに帰ってくる。ただいま、と言ってもらえることが、ヒョウジュにはなによりも幸せなことだった。

00 : ただいま、おかえり。(前書き)

はじめまして、こんにちは。

ようこそおいでくださりました。

楽しんでいただければ幸いです。

〇〇： ただいま、おかえり。

ひよ、と呼んでくれる人がいる。

今まで誰も、そんなふうに呼んでくれる人はいなくて。

今まで誰も、そんなふうに笑顔を見せてくれる人はいなくて。

いつも、いつも、この髪の毛のせいで不気味がられてばかりだった。

「ただいま、ひよ」

怖がりもせず、恐れもせず、彼はいつも朗らかな笑みを見せてくれる。その笑みで話しかけてきてくれる。

「おかえりなさい、イザヤ」

手を差し伸べれば、にこにこしながら手を差し伸べてくれる、とても温かい人。その傍らにはいつも、黒い犬を連れていた。

二十年ほど前だったろうか。

英雄になることを拒み、若くして死した騎士がいた。

今日の前にいる彼は、その騎士の魂を持っているという。

その騎士が連れていたという黒犬と、片刃の双剣を操り、彼はその騎士と同じように害獣を駆除する狩人だ。

「ひよ？ どうした？」

「……無事に帰ってきてくれて、よかった」

「あー……うん。今回も、無事だった」

言い方に疑問を感じた。だから、もしかして、と思う。

慌てて着ていた服に手を伸ばして、捲ろうとしたら、真っ赤な顔をして逃げられた。

やはりそうだ。

この人はまた、痛いくせに瘦せ我慢して、怪我を放置したまま帰ってきたらしい。

「どうして手当てをしないの」

「や、や、や、帰りがけだったから!」

「逃げないで」

「女の子に襲われるなんて嬉し過ぎて恥ずかしい!」

「ばかなこと言っでないで、傷を診せて」

走って逃げる彼を追いかけ回して、けっきょく捕まえられないから黒犬にお願いする。

「ギル、捕まえて。手当てしたいの」

「いいけど……ひよ、汚れるぞ」

「イザヤの怪我が心配なの」

「……わかった」

黒犬は賢い。天恵という、天から恵まれた力を持つ魔の生きものだから、言葉も感情も理解できる。

その身体は大きく、また俊敏で、彼を捕まえるのはあつというまだった。

「ギルの裏切り者ーっ」

「イーサがひよを心配させるからだろ」

彼を下敷きにした黒犬の言葉から、彼が怪我を隠そうと思ってい
たらしいことに気づいて、ため息がこぼれた。

「どうしていつも隠そうとするの。無駄なことでしょう」
「だって……」

ぶつくりと頬を膨らませ、不服そうな顔をした彼は、治療される
ことを諦めてくれたようで、黒犬を背中から退けると起き上がり、
自分からその上着を脱いだ。

「触るなよ、ひよ。ひよが、穢れる」

脱いだ上着を受け取ろうとしたら、彼はそれを黒犬に放り投げた。
それは彼の気遣いで、優しさだった。

害獣から受けた傷や、傷からの血は、それが僅かなものでも、穢
れになる。害獣というものが、世界の澱みや塵であるから、生きて
いるものを穢れさせるのだ。

「わたしは穢れにあてられない。そういう天恵を持っていると、教
えたでしょう？」
「それでも」

彼は頑固に、穢れから護ろうとしてくれる。

こんなふうに護られるのは、とてもこそばゆいことで、とても嬉
しいことだった。

なぜなら、穢れにあてられない天恵を持っていることで、誰より
も身近に穢れを見てきていたから。その天恵が、異質な髪色をもた
らしていたから。

誰もが不気味がるこの髪の色は、白。

穢れを拒絶し、穢れを浄化させる、白。

天恵によるものだとは知らない者たちは、この白を、色を失くしたものだと捉えて不気味がる。恐れる。怖がる。

だから、穢れを弾くのに、それを心配してくれる彼の気持ちが、とても嬉しい。

「ギル、それ……燃やしてきて」

「わかった」

穢れてしまったものは、火をくべて燃やしてしまうのが一番いい。だから彼は、黒犬にそれを頼んだ。

「ひよは、触っちゃだめ、だぞ」

彼は肩に、怪我をしていた。出血はひどく見えるが、それももう止まって、再生が始まっている。

「……だいじょうぶそうね」

再生が始まっているなら、穢れに蝕まれる心配はない。自然の治癒力が穢れを上回れば、穢れは消えていくものなのだ。

それでも、彼の細い肩に、その傷は痛々しい。

怪我なんてしないで、と本当は言いたい。言えないのは、以前そう言ったときに、彼が微笑んだからだ。おれは狩人だから、と。その微笑みには、勝てなかった。

「傷は深くなさそうね」

「掠った程度だから」

「そうみたい。穢れも消えているわ」

「そ？　ならよかった」

にか、と笑う彼が、可愛い。

この笑みが向けられていることを、たまらなく幸せに思う。

「ひよ」

「なあに？」

「うん……ただいま、ひよ」

彼に、ただいま、と言わせてやれる自分が、嬉しかった。

「おかえりなさい」

00：ただいま、おかえり。（後書き）

誤字脱字、怪文書がありましたら、こっそりひっそり優しく、ご指摘くださりますようお願い申し上げます。

*『黒犬と宴の夜。』がイザヤの話となっておりますので、よろしければお立ち寄りくださいませ。

01 : 火が灯る。

ヒヨウジユは昔から、白い髪を持ち主だった。それはふたりの兄とも、両親とも、祖父母とも違う色で、国の中でも異質な色だった。空色の瞳はふたりの兄と父と同じなのに、髪だけが白いから、なにも知らない人たちからは色を失くした者として見られていた。

髪が白いのは、天恵という、天から恵まれた恩寵の力ゆえのことであるだけなのに。

だからヒヨウジユは、産まれたときから、不気味そうな目で見られることに慣れている。恐れられ、怖がられる目で見られることに、慣れている。

「また部屋に籠もって……ヒヨウジユ、だめだろう？　こんなに天気がいいんだから、たまには外に出ないと」

「おれらとお茶でもしよう」

長兄のアオツキと、次兄のナガクモの声に、ヒヨウジユはふっと顔を上げる。優しい兄ふたりは、いつも部屋に籠もりがちなヒヨウジユを心配して、こうしてよく部屋を訪れてくれていた。

そのとき兄たちを見たのは久しぶりだった。少し前に、遠くに行っていた祖父母が無事に帰国し、その宴やら祝いで数日ほど忙しかったこともあり、ヒヨウジユよりもやる事がたくさんある兄たちは振り回されていたのだ。やる事が多いほうが多いヒヨウジユも気疲れしたほどで、しかし無事帰国した祖父母との宴は楽しかったと憶えている。

「ほら、外に行こう?」

「天気がいいから、空気がおいしいぞ」

兄たちはそう誘ってくれるが、ヒョウジュは首を左右に振る。

祖父母の帰国という喜ばしいことがあったために、まるでついでとばかりに、降りかかってきたものがあるのだ。

「耳が痛いの」

そう言うと、兄たちの顔が曇る。先にため息をついたのは、次兄のナガクモだった。

「また父上か……」

その呟きは当たり前だった。

「ヒョウジュを可愛がるのはいいけど、どうしてこう、もっと気持ちを汲んでやれないかなあ……なあアオ、父上のこと殴っていい?」

「ナガ、物騒なことを言うな」

「でも、ヒョウジュが外に出たなくなるほどだぞ?」

「仕方ないだろう。ヒョウジュも来年には成人だ。婚約を固めてしまいたい父上の気持ちは、わからなくもない」

「ロク家のシズトだろ? いい男ではあるけど……」

ヒョウジュの耳を痛める目下の問題は、来年には成人するというのに決まらない婚約だ。ただでさえ外見のせいで疎まれがちであるのに、父の過保護の結果だ。

しかしヒョウジュは、誰とも結婚するつもりがなかった。この外

見だ。どうしたって、人はヒョウジュを不気味に思う。

だからこのまま、死ぬまで、ひっそりと生きていたかった。

「兄さま方、わたしのことはどうか、捨て置いてくださいます」

「……ヒョウジュ、そんな寂しいこと言なよ」

眉をひそめたナガクモが、ヒョウジュに視線を合わせて屈む。その両手を取られて、ぎゅっと握られた。

「おまえのことを捨て置くなんて、できるわけないだろ」

ナガクモの目は、長兄のアオツキと同じように、優しい。

「わたしはこのままでよいのです」

「ヒョウジュ……」

「この離宮で生きること、お許しくださいませ」

ヒョウジュは、結婚しないなら、しなくてもいい立場にある。兄ふたりとは違う。

長兄はこの国、リョクリョウ国の王太子、次兄は第二王子だ。いずれは長兄が国王である父の跡を継ぎ、次兄がそれを支える。それならヒョウジュも兄たちを支えられるように、とは思っただが、この外見は兄たちのためには使えないのだ。

それに、このところの害獣被害が増加傾向にあるせいか、ヒョウジュの外見を不気味に思う者たちの目は、日に日にひどくなっている。こんな自分が、兄と父に護られてばかりの自分が、国のためになるわけもない。

ヒョウジュが兄や父のためにできることは、二十年ほど前に起きた害獣襲撃のときのように城まで燃やさないよう、天恵を駆使する

ことだけだ。

「お許しください、兄さま方」

ヒョウジュは兄たちから逃げるように、握られていた手を離すと身を翻した。ヒョウジュ、と兄たちが呼んでいたけれども、ひとりでいたい気持ちが強かった。

「姫さま……」

「お願い、ひとりにして」

兄たちから逃げたヒョウジュは、追いかけてくる侍女や近衛兵を振り切り、離宮の片隅にある温室へと足を向ける。

温室とはいっても、厚い硝子に囲われているだけの狭いところであるから、栽培されている花の数は少なく、暖かいわけでもない。外に比べれば暖かいというだけで、寒い季節が長いリョクリョウ国を皮肉っている庭の休憩室だ。

ひとりになつて、ヒョウジュは詰まりそうになる息を長く吐き出した。

「このままでは……いられないのね」

いくら穢れを弾く天恵を持っても、それで城を護っていても、ヒョウジュは城に、王宮に留まり続けることなどできない。降嫁しなくとも、いずれは街に降りて暮らすことになる。

「……受け入れて、もらえるかしら」

長椅子に腰かけて俯くと、結えてもいない白い髪が、さらりと落

ちてくる。この白い髪を疎ましいと思ったことは、あまりない。ないけれども、好きにもなれない。みんな恐れるから、怖がるから、不気味がるから、悲しくなるのだ。

兄たちや父のように、暖かい夕陽の色であれば。

母のように、優しい大地の色であれば。

こんなに悲しく、寂しい思いをせずに済んだらどうか。

ぼんやりと、ヒョウジユは考える。

これからのことを、どうやって父を説得するかを、どうやって街で暮らしていくかを。

「ひとりで、生きていけるかしら……」

そう呟きがこぼれたとき、ヒョウジユは全身に、ぴりぴりといやなものを感じた。

ハッと、顔を上げる。

見上げる空は晴れて、綺麗だ。雲一つない、清々しい空。

それなのに、いやな感じがする。

こんなに、はつきりとわかるいやなものは、初めてだ。こんなに大きく、深いものを感じたことなど今までにない。

「どうして……穢れ、なの？」

ヒョウジユはふらりと立ちあがると、温室を出た。

穢れは、肌で感じるものではない。心で感じるものではない。むしろ、感じられるものではない。穢れに蝕まれている当人でもない限り、他者は感じられないものだ。

もしかしたら害獣に侵入されたのかもしれない。

次第にヒヨウジュの足は早まり、きよろきよろと周りを見ながらそれを捜す。

「姫さま、姫さま、いかがなされたのです」

「わからない……わからないの。いやなものを感じるのに、わからないのよ」

途中で自分の侍女や、つけられている近衛兵を見つけたが、今感じているものを説明するのももどかしく、とにかくいやなものを捜し続けた。

離宮を抜け、後宮を抜け、表の王宮まで出てきたところで、出仕している貴族のさまざまな視線が一気にヒヨウジュを射る。いつもならいやな気分になるが、今はそれどころではない。

「姫さま、それ以上は……っ」

正面の出入り口付近まで来たとき、侍女にそう止められたが、ヒヨウジュの焦燥も募っていくばかりで、足を止められなかった。

しかし。

ふと目が、駆け込むようにして王宮に入ってきた一段に、吸い込まれる。

「シスイ！」

先頭を切っている青年に見覚えがあったヒヨウジュは、咄嗟にその青年を、シスイを呼び止めた。ヒヨウジュに気づいたシスイは、立ち止まって振り返ってくれる。

とたん、ヒョウジュは瞠目した。

「姫さん、なんだ、どうした、こんなところまで。悪いが今は」

「シスイ、その人」

「あ？ ああ、怪我人だ。害獣に襲われたんだよ」

だから悪いが、と立ち去ろうとしたシスイの腕には、小柄な少年が、いや、青年が横抱きされていた。

彼だ。

彼からいやなものを感じる。

「だめ……だめよ」

声が震えた。

なんで、どうして、こんなことに。

「こんな……だめよ」

穢れだ。

穢れが、ひどく彼を、蝕んでいる。この青年の命を。

一刻も早く、この穢れを彼から取り除かなければ。

「姫さん、すまねえが行くぞ」

蒼褪めるヒョウジュに、シスイはそう声をかけ、足早に立ち去る。それを目で追いかけて、続くようにヒョウジュは再び駆け出していた。

「姫さま、お待ちください！」

なにかを捜して歩き回るのではなく、シスイを追いかけたヒョウジュを、侍女が追いかける。

ぞろぞろと続いたその集団に、出仕していた貴族たちが目を丸くして見ていたことを、ヒョウジュは知らない。

害獣に襲われ、穢れに蝕まれた青年を、その素性もわからないまま、ヒョウジュは治療にあたった医師と共に診た。

ヒョウジュ自らの行動に戸惑う者もいたが、それを気にしてはいられない。穢れは青年の命を蝕む一方であり、またその穢れはヒョウジュの天恵を刺激し、城内の空気を狂わせているのだ。

ヒョウジュはとにかく、青年の治療に専念した。浄化の天恵を駆使した。

青年、名をイザヤというらしい彼の事情を聞いたのは、彼の意識がぼんやりと戻る少し前のことになる。

イザヤは、害獣を駆除した際に、或いは駆除する際に開かれる宴に呼び寄せられ、だが帰られなかった迷子で、そして二十年ほど前に死した騎士の魂を持つという。

それらのことには、帰国したばかりの祖父母が関係していた。父が迷子を捜しているというのは、祖父母が帰国した際に開かれた宴で聞いている。ゆえに、イザヤの情報を求めて祖父母の許を訪れた

ヒヨウジュは、イザヤが城に運び込まれたそれまでのことを、祖母から直接聞くことができた。

「ねえ、ヒヨウジュ……わたくしは間違っていたかしら？」

傷を負い、穢れに蝕まれたイザヤのことについて、祖母はそう訊いてきた。肖像画でしか祖母のことを憶えていないヒヨウジュだったが、両親から話はよく聞いていたので、祖母の、先王夫妻のその落ち込んだ姿には、驚かせられた。

「なにをお間違いになれたと、思うのですか？」

「この国に、この世界に、連れて来たことよ」

「なぜ？」

「また……あの子を傷つけたわ」

後悔しているのだろうか。いや、迷っているのかもしれない。祖母は、英雄になることを拒んで死んだ騎士を、義弟と呼んでいたのだ。優しく穏やかな人だったと聞く。国を護るために、祖母を護るために、狩人であった騎士は死ぬときまで狩人で在り続け、死してのちに騎士となった人だ。英雄と呼ばれることはおろか、騎士となることも、その騎士は生前受け入れなかったのだ。

祖母が、自分たちがやったことを迷うのも、わからなくはなかった。

だが、決めつけてはいけなことがある。

「彼はそのときのことを……騎士であったことを、憶えているのですか？」

「……憶えていないと思うわ」

「でしたらおばあさま、勘違いなさらないほうがよろしいかと思い

ます」

「勘違い？」

「彼はイザヤです。イザヨイさまではありません」

彼は、イザヤは、かの騎士の魂を確かに持っているのかもしれない。けれども、今の彼は、イザヤだ。かの騎士ではない。

だから、決めつけてはいけない。

イザヤはかの騎士、イザヨイではないのだから。

「彼を幸せにしたいと思うのなら、それだけで、よろしいではありませんか」

後悔などしている場合ではない。なんのために連れ戻したのかを、忘れてはならない。

「想いを大切にしてくださいませ、おばあさま、おじいさま」

悔いる気持ちがあるなら、二度と悔いることがないように、努力するしかないのだ。

ヒヨウジュは祖父母にそれを伝えたと、席を離れた。

部屋を辞す際に、「ヒヨウジュ」と呼ばれて振り返る。

「イザヨイ……いえ、イザヤを、頼めるかしら」

穢れのことだろうかと思いながら、ヒヨウジュは頷く。ほっとしたような顔を見せた祖母と、そしてにこりと微笑んだ祖父に、ヒヨウジュは最後に礼をして、その場を辞した。

その足で、イザヤがいる部屋に向かう。初めは王宮の客室に運ばれたイザヤだが、翌日には祖父母が住まう離宮に移された。ヒヨウ

ジユが住まう離宮は、その隣にある。

本来なら、穢れの浄化が済めばイザヤのところへ行く必要はない。だが、穢れが入り込んだ傷の場所は胸だった。心の蔵に近い。様態が急変しないとも限らないので、ヒヨウジユはほとんどの時間をイザヤの部屋で過ごしていた。

ちなみにこのことは祖父母しか知らず、両親や兄たちには知られていない。イザヤのことでヒヨウジユが動いたのは知っているが、初日だけのことだと思っている。いつもついて歩く侍女や近衛兵があまりいい顔をしない行為ではあるが、気になるのだから仕方ないと、諦めてもらっていた。

イザヤがいる部屋の前に来ると、シスイがちょうど出てきたところだった。

「おう、姫さん。また来たか」

「ええ。わたしにできることを、やりたいと思うから」

「ん、お人形さんも卒業だな」

シスイは兄たちに剣を教えた師で、ヒヨウジユも少しだけこのシスイに剣を教わったので顔馴染みだ。宰相ロク・シエンの弟なので、貴族ではあるのだが、彼は害獣を駆除する狩人で、貴族らしいところが一つもない変わった人だった。

「イザヤの熱な、もう少し続けらしい。目え覚めたら、もうだいじようぶだと判断すればいいとさ」

「魔されていても？」

「起きる気があるんだ。起こすべきだろ」

「……そうね」

「じゃ、おれはカジユ村に戻る。なにかあったら知らせてくれ」

「わかった。気をつけて」

大規模な害獣駆除が行われようとしているという村に戻るシスイを見送ると、ヒョウジユは扉を軽く叩いて、部屋に入る。

とたんに目に入る、イザヤの姿に、目を細めた。

そばに歩み寄り、寝台の端に腰かけると、宙を掻くイザヤの手を握る。

熱に魘され、痛みに苦しみ、それらから逃れようとするイザヤの姿は、とても痛々しい。

「だめよ。動かしてはだめ。今はおとなしくして」

穢れが入り込んだ胸の傷は、骨のおかげで深くはない。けれども場所が場所だけに、確実にイザヤを蝕んだ。痛みは長引くだろう。

薬があつても、ヒョウジユの天恵があつても、イザヤの苦しみは終わらない。

「はな、せ……っ」

初めて聞いたイザヤの声は、苦しそうというよりも、寂しそうで。

「落ち着きのない人……だめと言っているでしょう」

「いやだ……はなせ、よ」

悶える腕に力はなく、必死になにかを求めているように、ヒョウジユには感じられた。

熱い息を吐くイザヤに水を飲ませ、もっと、とせがまれて微笑みながら水をさらに飲ませる。すると、薄く目が開かれて、焦げ茶色の瞳が彷徨った。

「……だ、れ？」

ヒョウジュは身を屈める。

「ヒョウジュ」

「？ ひよ、じゅ？」

「ヒョウジュ。ここにいるのは内緒」

「ひよ、ないしょ？」

「あら、いいわね。そう、わたしは、ひよ」

聞き取れなかったのか、イザヤに「ひよ」と呼ばれて、そのくすぐったさに微笑んだ。

そんなふうに呼ばれたことも、呼んでくれた人も、今までいなかったから。

「ひよ……みえ、な……い」

「だいじょうぶ。今は熱があるだけ。熱が引いたら、見えるようになる」

頬を撫でると、イザヤの苦しい顔がいくらか和らぐ。男らしいというよりも中性的な容姿をした人だと、思った。

「ひよ……ひよ、くるしい」

「だいじょうぶ。少しの辛抱よ」

侍女を呼んで濡れた布を用意してもらい、額の汗を拭ってやる。すると眉間の皺が伸ばされ、ふっと、微笑えまれた。

「ひよ……」

どきつとした。

なんて顔をする人だろうと思った。

そんな顔で、そんなふうに呼ばれたら、胸が苦しくなる。

「……なあに？」

「ありがとう……ひよ」

やんわりと、柔らかに微笑んだイザヤは、そのまま瞼を閉じて眠った。

ヒヨウジユの胸に、くすぐったくも暖かい、焦がれるような熱が生れた、あのとき。

イザヤへ想いが傾き始めた、その出逢い。

この人のそばにいたいと、泣きたくなるような苦しさを持つようになるまで、そう時間はかからなかった。

02 : 行こうか。

イザヤは穏やかな人だ。いつも仄かに笑って、どこかふわふわとしている。だから狩人だということが信じられないくらい、剣も似合わない。

けれども、イザヤは狩人で、片刃の双剣を自分の身体のごとく自由に操り、害獣を駆除する。

そんなイザヤが剣を握っていないときは、ふだん以上にほんわかと微笑んでいることが多かった。

「ひいよ？」

珍しく暖かい日、どこにも行かず住んでいる邸の庭で、相棒の黒犬ギルと一緒に転寝しているイザヤを見つけたヒョウジュは、そつと歩み寄ってそばに座り、文字の読み書きを練習しているイザヤのための教材を作ろうと紙を広げた。

「起きていたの……？」

「んー……まだ、眠い」

「なら、眠って。このままそばにいてもいい？」

「うん。いて」

ころん、とヒョウジュのほうに転がってきたイザヤは、どこか寝ぼけているようで、ヒョウジュの膝を枕にしてきた。

「眠いのね、イザヤ」

「ひよ、ふわふわ……あったかい」

ふにやつと微笑むイザヤのほうが、ふわふわしている。まるでどこかに、ふつと消えてしまいそうだ。

イザヤは、たまにこうしてヒョウジュに甘えてくることがある。けれども、それは眠そうにしているときだけで、それ以外はこんなふうに擦り寄ってくることはない。顔を真っ赤にして、ヒョウジュから逃げ回っていることのほうが多い。どうやら免疫が皆無らしいというのはシスイから聞いたが、なんの免疫かは教えられていないので、ヒョウジュはイザヤのその正反対な行動の意味がよくわからなかった。

ただ、嫌われているわけではないということだけは、はつきりとしている。ヒョウジュの外見を不気味がることも、恐れることもないイザヤは、ヒョウジュにやんわりと微笑むのだ。嘘に塗り固められた者たちの態度を見慣れているせいかな、それがイザヤの心からの笑みであると、ヒョウジュは感じている。

「……触ってもいい？」

「うん……ひよは、あったかいから」

瞼を閉じたイザヤの、黒というより鈍い灰色の髪をさらりと梳き、ゆつくりと頭を撫でる。見た感じは硬質そうなのに柔らかくて、すぐに寝癖がつく髪は、ヒョウジュの手を楽しませてくれる。

しばらくそうしてイザヤの頭を撫でていると、寝そべっていた黒犬ギルが、唐突に身体を起こした。

「ギル？」
「おれも」

のそりと立って、ゆったりとヒョウジユに歩み寄って背中に回ってきたギルは、イザヤに熱を奪われている分を与えてくれるかのように、寄り添ってくれる。出かけてから帰ってくるとすぐにギルは洗われるので、ふよふよとなびく黒毛は柔らかく、暖かだ。

「ありがとう、ギル」
「ん」

イザヤもそうだが、ギルも、害獣を駆除して帰ってきて、また害獣を駆除するために出かけるまで、ほとんどこうして転寝している。たまに起きているかと思えばイザヤはヒョウジユから逃げ回り、しかしヒョウジユに頼まれたギルが捕まえてくる。剣の稽古をしているときは逃げない。眠気が勝っているときは今のよう甘えてきてヒョウジユのそばから離れない。ヒョウジユを枕にする。

気が向けば、文字が書けないイザヤは、読み書きの勉強をした。気が向いたときにしか勉強しないせいで、イザヤは未だ自分の名前すらきちんと書けない。短時間なら人型にもなれる賢いギルのほうが、読み書きができた。

「……ひよ」

陽光に暖められた風を頬に感じたとき、ふっとイザヤの両目が開かれた。

「眠らないの？」
「誰か……来た」

来訪者を感じたらしい。ヒョウジュの背にいるギルも、僅かに身じろぎする。

「リツエツが帰ってきたのかしら……」

カク・リツエツは、イザヤの養父となった人で、このリョクリヨウ国の王、つまりヒョウジュの父を補佐する王佐だ。だからイザヤが帰ってくるこの邸はリツエツの家で、ヒョウジュがイザヤに逢うために訪れる場所だった。

しかしながら、もつとも王のそばにいるリツエツが邸に帰ってくことは少なく、またこんな昼間に帰ってくることもない。

なにかあったのだろうか、振り向いたとき。

「ヒョウジュ！」

大きな呼び声に、身が竦む。びくりと震えた身体は、素早く起きたイザヤに抱きしめられ、ギルに護られた。

「おま……ヒョウジュから離れる！」

イザヤにしがみつきながら見た、大きな声を上げた人物は、イザヤと出逢ってから久しく逢っていなかった兄たちだった。その後ろでは、呆れた顔をしている王佐リツエツもいる。

「知り合い？」

「兄のアオツキとナガクモよ」

「へえ……いたんだ」

そういえば逢ったことはなかっただろうか。まだどこか眠そうな顔をしたイザヤの体温が離れていくのを寂しく思いながら、しかし

握った腕は離さず、ヒョウジュは怒りの形相で歩んでくる次兄ナガクモと、困惑気味な顔をした長兄アオツキを見やった。

だが、ナガクモの視線も、アオツキの視線も、ヒョウジュにはない。

「おまえ、なに者だ！ おれたちのヒョウジュになんてこととしていやがる！」

「……眠い」

「ああつ？」

「ひよ、おれ、眠ってるから」

怒鳴られていたのはヒョウジュではなく、イザヤのほうだったのだが、イザヤはそれらをばつさりと切り捨てると、再びヒョウジュの膝を枕に寝転がる。

とんだ自由気儘なイザヤの態度を、もちろんナガクモが許すはずもない。

「人の話を聞け！」

「まあ落ち着け、ナガ」

「ふざける！ なんだ、この男はっ！」

イザヤを蹴ろうとしたナガクモを、アオツキがため息をつきながら押さえる。

ナガクモが激昂し、アオツキが表現し難い顔つきをしている理由がなんとなくわかっていているヒョウジュは、さてどうしたものかと考えながらも、周りを無視したイザヤの頭を撫でた。

「おいヒョウジュ！ おまえ当事者だぞ！」

そんなことを言われても、と思う。

「……考えている最中です」

どうすればいいだろう。

「ヒョウジユ、落ち着き過ぎだよ」

そう言われても、と思う。

落ち着いているわけではない。かといって焦っているわけでもないのだが、状況に困っていることは確かだ。

「……どうしてここが、おわかりになりましたの？」

「リツエツに聞いた！」

それならヒョウジユが改めて説明する必要はないだろう。

怒っているナガクモ、小難しい顔をしたアオヅキ、そっぽを向いて呆れているリツエツを流し見て、ヒョウジユは目を硬く瞑ったイザヤに視線を落とすことさらゆっくり頭を撫でた。

ヒョウジユがイザヤのところに通っていることを、兄たちには知らせていない。とくに知らせる必要があるものでもない。祖父母からも、両親からも、好きにしていと言われていることだ。ヒョウジユが思うように行動していいと、その自由を得たものだ。だからヒョウジユは、イザヤがいるときはずっとそのそばにしようと、心が感じるがままここを訪れている。

「リツエツに聞いたのなら、もうよろしいでしょう？」

「よくない！ なにを考えてこの男の許に通っている！」

怒鳴るナガクモの声に、イザヤの眉がぴくりと動いた。ギルの耳

もピンと弾かれた。

ああ、邪魔になってしまっている。

申し訳なく思いながら、ヒョウジュはイザヤの耳に手のひらを当てることで、それを護った。

「どうしてそんなに、怒るのですか……以前はよく外に出ると、おっしゃっておられたではありませんか」

「それとこれとは別だ！」

「……ナガクモ兄さま、声をお控えください。イザヤが眠れません」
「起こせ！　そもそもおれは、その男に話があるんだ！」

「イザヤのことはもうご存知でしょうに……」

祖父母が頼み、父が捜していた迷子。それがイザヤだ。城にいて、父や祖父母と直接関わりがある者なら、誰でもそれを知っている。イザヤがイザヨイという騎士の魂を宿していると、それを知っている者たちは少ないだろうが、イザヤの存在はべつに隠されているわけではないのだ。

「ヒョウジュ、彼がなに者か、おまえはちゃんと分かっているのかい？」

アオツキにそう問われ、もちろんだと、ヒョウジュは頷く。

「本当に？　本当に彼で、いいのかい？」

「なにをおっしゃりたいのですか、アオツキ兄さま」

「おれはヒョウジュに幸せになってもらいたいだけだよ。ナガと同じようにね。だが彼は、狩人だ。かりびとおれは心配だよ」

アオツキが言いたいのは、イザヤが迷子だということのほうではなく、ヒョウジュがこうしてそばにいることの真意らしい。祖父母

から、その話を聞いたのだろう。

「……わたしはイザヤと一緒にいます」

「その決意は固い？」

「はい」

まっすぐにアオヅキを見つめれば、アオヅキもまっすぐにヒョウジユを見つめ返してくる。

ふっと息をついたアオヅキは、押さえていたナガクモを引っ張りながら踵を返した。

「ちょ、アオ！ おれはまだ奴に……っ」

「ナガ、あとにしよう。父上から話を聞いてからだ」

「けど、ヒョウジユが……っ」

「だいじょうぶ。おれも認めたわけじゃない」

立ち止まり、ちらりと振り返ったアオヅキが、ヒョウジユの膝で眠るイザヤを睨む。

「おれは狩人が嫌いだ。認めることなんか、できないからね」

「アオ……っ？」

「そういうことだからヒョウジユ、忘れないようにね」

意地悪気に笑ったアオヅキは、ナガクモをずるずると引っ張りながら、来た道を戻っていく。

その後ろ姿をぼんやりと見送りながら、ヒョウジユは、厄介な人を敵に回してしまったかもしれないと、思った。後悔はしないけれども。

「お邪魔して申し訳ありません、殿下」

「……いいのよ、リツエツ。それより、兄たちにつき合って帰ってきたわけではないのでしょうか？ 用件はなにかしら」

残ったリツエツは、律義に礼をするとそばに歩み寄ってきて、背中を向けているイザヤの肩をぽんと撫でた。

「仕事ですよ、イザヤ。詳細は紙に。書斎にあります。目を通して明日、向かってください」

やはりそうか、とヒョウジュは肩を落とす。リツエツがこうして家に帰ってくるとき、その大抵はイザヤの仕事を携えているのだ。

イザヤは返事をせず、またリツエツも返事を聞くことなくヒョウジュに頭を下げると立ち去った。イザヤが身動きしたのは、リツエツの気配が完全に消えてからだ。

「行くの……？」

「まだ。もう少し眠る」

ぼそぼそと小さな声で、イザヤは擦り寄ってきたながら答えてくれた。

「ひよ、眠れる薬ちようだい」

「……また？」

「怖くて眠れない」

ヒョウジュの腹部にぴったりと額をくっつけたイザヤが、身体を丸める。

やめればいいのに、と思った。

そんなに怖いなら、狩人なんてやめてしまえばいいのに。

「……用意しておくわ」

「うん……ありがとう、ひよ」

ヒョウジュの膝で眠るイザヤは、けっして寝台の上では眠らない。狩人として片刃の双剣を握るようになってから、イザヤが寝台で眠っている姿を見なくなった。ヒョウジュが出逢ったあのとき以来、長椅子の上や庭先、屋根の上、木の上、ヒョウジュの膝で、イザヤは眠っている。

どうして、と訊いたことがある。

眠れない、とイザヤは言った。だから眠れる薬をちょうだい、と。イザヤは寝台では眠らない。それ以外の場所でも、転寝はしているけれどもなにかの気配を感じればすぐに目を覚ますし、ヒョウジュの膝でも深く眠ることはない。

安眠を得られないほど怖いなら、狩人なんてやめてしまえばいい。そう、幾度思ったことが。

けっきょく、「狩人だから」と微笑まれることだから、思うだけで言ったことはなく、頼まれた薬を用意してしまう。

「ねえ、イザヤ」

「んん？」

わたしを連れて行って。

とは、言えなくて。

けれども。

「帰ってきて」

イザヤの頭を抱いて、ヒョウジュはお願いする。

「帰ってきて、イザヤ」

「ひよ……」

「お願い」

ヒヨウジユは知ってしまった。

ひよ、と呼ばれることの嬉しさを。

ひよ、と呼ばれないことの悲しさを。

ひよ、と呼ぶ声のある喜びを。

ひよ、と呼ぶ声のない寂しさを。

だから。

わたしをひとりにしないで、と。

思うようになってしまった。

「ひよ。ひよ、顔上げて」

「……イザヤ」

「ひよ、来る？」

「え……？」

「おれと来る？」

ゆっくりヒヨウジユから離れたイザヤが、淡く微笑みながら小首を傾げる。

「おれと行こうか、ひよ」

その言葉は、信じられないもので。

「いいの……？」

「うん。ぼやぼやしていると、邪魔されそうだし」

「邪魔？」

「あ、や、それはこっちの話。とにかく、今回はおれと行こうか、

ひよ

行こう、とイザヤの手のひらが、ヒョウジユの頬をくすぐる。
行こう、と言ってもらえたことが思いのほか嬉しくて、ヒョウジユは目を瞬かせた。

「いいの？ 本当に？」

「いいよ。ただ、おれ馬には乗れねえから、歩くことになるけど」

そんなことはどうでもいい。イザヤが、連れて行く、と言ってくれたことが、重要なのだ。

「行こうか、ひよ」

うん、とヒョウジユは微笑みながら頷いた。

03 : 握った手のひらは震えて。 1

頬を朱に染めたイザヤが、ヒョウジュの手を引いて、白み始めたばかりの空の下を歩く。吐く息は白く、握った手のひらは暖かい。

「疲れたら、言えよ、ひよ」

「ええ」

「寒くても、言うんだぞ」

「だいじょうぶ」

「つらくなったら、そう言わないとだめだからな」

「平気」

「帰りたくなったら、ちゃんと行って」

「イザヤが一緒なら、帰るわ」

ぴたりと歩が止まり、イザヤが振り向く。

「ほんと？」

「ほんと」

ぎゅっと手のひらを握ると、イザヤは微笑んだ。

「行こうか、ひよ」

くん、と引つ張られて、また歩き始める。

イザヤがヒヨウジュを迎えに来たのは、早朝も早朝だった。夜も明けきらないうちに、とんとんと露台の窓を叩いてヒヨウジュを起こしたのだ。出かける準備をしていたヒヨウジュは、そんなところから現われたイザヤに驚きはしたものの、本当に連れて行ってくれるらしいということに舞い上がり、あつというまに支度を整えた。街に降りて暮らす日々が来るだろうというのは幼い頃からわかってきたことだったので、支度には手間取らなかったのが幸いだ。

あつというまに支度を終わらせたヒヨウジュに、イザヤが「急がなくていいのに」と苦笑し、手のひらを差し出した。迷わず手を述べて握った。そうしたら引き寄せられて、「ちよつと待ってな」と言ったイザヤが自分の荷物を漁り、真つ白な耳当てを取り出すと、それをヒヨウジュの頭にかぶせてきた。ふわつと感じたぬくもりに驚いたら、「贈りもの」と言つてイザヤは照れくさそうに笑った。嬉しくて、ヒヨウジュも笑った。ありがとうと、お礼を言った。

だから、握っている手のひらも、耳も、夜明けの寒さを感じない。城を抜け出して、こうして寒い中をふたりきりで歩いている。

「どこまで行くの？」

「キルナイっていう村。馬で半日、だったかな？ 歩くと丸一日」

近いところだ。だから一緒に連れて行ってくれるのだろう。

「これ、読んでくんね？ リツのやつ、おれ読めねえよって言うのに、毎回こうやって指示書寄こすんだよ」

そう言つて渡されたのは、リツエツの字で書かれたイザヤへの害獣駆除依頼の紙だった。簡単な文字ならかるうじて読めるイザヤのために、大雑把な単語がいくつか並んでいる。

「これくらいなら読めるでしょう？」

「読めねえな」

「もう……教え甲斐のない人」

気が向いたときにしか勉強してくれないせいもあるが、こんなに簡略的に書かれた文字すら読めないなんて、教えているヒヨウジュの技量が疑われる。

「キルナイ村って、書いてあるんだろ？」

「ギルに読んでもらったのね」

「うん。だってギルのほうが読めるし」

教えても覚える気がないなら、いくら教えても無駄かもしれない。改めてそう思ったけれども、覚えて損はない。むしろ必要だ。

「お。ギル、上手いことやってくれたな」

「なあに？」

あれ、とイザヤが前方を指差す。受け取った紙を荷物にしまってから、ヒヨウジュはそちらを見た。

「行商？」

「そう。キルナイ村を通る商隊がねえか、ギルに捜してもらってた。あつたらおれたちを乗せてってくれるように頼むことも」

目の前には、荷車を引く二頭の馬がいた。人型になっているギルと、荷車の持ち主らしい行商人夫妻もいる。

疲れたら言えとか、つらくなったら言えとか、そう言っていたくせに、イザヤはヒヨウジュの足を考えてくれていたようだ。イザヤのそばにギルがいないのを不思議に思っていたが、こういうことだったわけだ。

「……足手まといね、わたし」

「え？　なんで？」

「だって……」

ヒョウジュの足では、丸一日歩き続けることなどできない。それを申し訳なく思ったら、イザヤの手のひらがふっと、ヒョウジュの頬を撫でた。

「おれ、いつつもああやって、移動するぞ？」

「……そうなの？」

「だって馬に乗れねえもの」

「それは……」

イザヤは馬との相性が悪い。イザヤを見た馬は、それがどんな暴れ馬でも、じっと見つめて動かなくなってしまうのだ。どうやら馬にはイザヤに対する興味が強過ぎるらしいと、長年世話をしている厩舎長が言っていた。

だからイザヤは、馬に乗れない。その細い身体では操れないだろうということもあるが、イザヤを見た馬が動かないのでは乗っても移動ができないのだ。

「面倒なときは、ギルが背中に乗せてくれるし……まあそういうことだから、気にしないでいいんだぞ？」

ぺちぺち、と頬を軽く叩かれる。だいじょうぶだ、ヒョウジュは足手まといではない、と、イザヤは言ってくれている。

「わたし、頑張る」

「はは。そんな気張るなよ。ほら、行こう？」

手を引かれて、待っているギルと行商人夫妻の許へと急ぐ。
夫妻は気のいい人たちで、イザヤが挨拶をすると笑顔で返事をしてくれる。道中の護衛と交換に、乗せもらえることになった。
交渉が済んで、ギルが人型から黒犬の姿に戻ったときは夫妻も驚いていたが、魔だと説明すると珍しげにギルを撫でていた。

「人里で魔を見たのは初めてだなあ」

「え、ほかで見たことあんの？」

「一度だけ、ちらつとな。ああでも、灰色だったな。瞳が黒かった。魔じゃないかもしれないなあ」

「毛が灰色で目が黒……まるでおまえの逆だな、ギル」

ギルは黒毛で、灰色の瞳の魔だ。

大抵は温厚な性格の魔は、ときには人助けもしてくれて、リヨウ国では貴重種として珍しい生きものだ。ただ、この大陸の半分以上の領土を持つ三大国の一つ、聖国とも呼ばれるヴァリアス帝国では魔の印象が悪い。リヨウ国は聖国の属国であるが、魔よりも害獣のほうに意識が向けられるため、貴重種として見られているのだ。

「黒いところがあれば、それは魔だ。ほとんどは毛の色で判断されるけど……でも灰色の獣で魔はいない」

「あれ、そうなの？」

「そいつはたぶん、記録者だ」

「記録者……なんだそれ」

「おれもよく知らない」

「知らねえのにわかんのかよ」

「そういう生きものがいるって、聞いたことあるだけ」

「適当だなあ」

イザヤと黒犬のそんな話を聞きながら、行商人夫妻に促されて荷車に乗せてもらうと、奥さんのほうに柔らかい大きな枕を渡された。ぐらぐらと揺れる荷車に長く乗っていると、けっこう身体が疲れるらしいのだ。それを軽減させるためだという。

「ありがとう」

「いいのよ。こんなに可愛いお嬢さんと一緒なんだもの」

にこにこ微笑む奥さんは旦那さんと同じように御者台に乗り、荷馬車は動きだした。

がたがたと揺れる荷車を身体に感じながら、ふと横を見ればイザヤの横顔がある。ああ、本当に連れて行ってくれるのだと、今さらながら実感した。

「ひいよ？」

じつと見つめていたら、視線に気づいたイザヤが「ん？」と目を丸くして振り向いた。

「……ありがとう、イザヤ」

「え、なにが？」

「連れて来てくれて」

「あー……うん、まあ、半分は自分の都合なんだけど」

「都合？」

首を傾げると、イザヤが視線を彷徨わせて、赤くした頬を指先で搔く。

「ばあちゃんの教えで、これだって思ったものには素直になれって、

言われてんだよね」

「…………おばあさま？」

「あ、ひよにとつては本当のばあちゃんだな。ええと、ユキちゃんだ」

「イザヤにとつてもおばあさまはおばあさまよ」

「うん。でも、血い繋がってねえし」

イザヤはこことは違う世界から、ヒョウジユの祖母ユキイエと祖父ツクモに、世界を渡る方法はそれぞれ違っていたが、連れて来られたようなものだ。そちらの世界で、イザヤはヒョウジユの祖母を「ばあちゃん、じいちゃん」と呼び、祖父母として慕って育っていた。だが、ヒョウジユのように血縁にあるわけではないと聞いている。

「おれは、さ…………ユキちゃんとツクモさまに、助けられたんだ。そのときまでおれが生きてたところは、生きてるって言えるところじゃないかったから」

ふとイザヤが、過去を話してくれる。それは初めてのことだ。

「おれもよくわかんねえんだけど…………ユキちゃんとツクモさまに拾われたときは、ガリガリのボロボロで、自分の状態すら理解できねえようなガキで、言葉もろくに喋れなくて…………今思えば、ユキちゃんもツクモさまもかなり大変だっただろうなあって感じるよ」

平和に生きていたわけではないだろう、というのは、イザヤの様子を終始見ていれば感じるものがある。いつも仄かに笑んでいるから、どうすればこんなふうになれるのだろうと、不思議に思っていた。

「……どうして、そんなふうに、言えるの」

「わかんねえから」

「なにが、わからないの？」

「なにが苦しくて、なにが悲しくて、なにが伝わったのか……今でもおれ、わかんねえもの」

困ったように苦笑したイザヤに、嘘は見えなかった。それは、本当にそれらがわからないと、そういうことだ。

「ユキちゃんとツクモさまに出逢うまで、それが当たり前だったから……それがおれっていうガキだったから、本当のところはよくわかんねえの」

おれ、ばかだから。

そう言ったイザヤは、笑っている。

ああだから彼は、笑うのか。

わからないことを、わかって思うっても、どうしてもわからないから、笑って誤魔化そうとしているのか。

「こんなおれだから、ユキちゃんは言ったと思うんだよね。これだっと思ってものには、素直になれって。じゃないと後悔するからって」

イザヤには常に素直であって欲しい。祖父母はそう思ったのだろう。自分のことすらよくわからないような言動に出るイザヤだから、本能とも呼べるその直感を大事にして欲しいと、思ったに違いない。ヒョウジュだって、今の話を聞けばそう思う。

「そうしたほうがいい。後悔のないように」

「……うん」

にこ、と笑んだイザヤに、ギュッと手のひらを強く握られた。

「だからおれ、ひよを攫ってきた」

「……え？」

「昨日はやっぱり、怖くて眠れなかった。あんな思いをするくらいなら、いっそ……」

とん、とヒョウジュの肩に頭を乗せたイザヤが、両瞼を閉じる。

「イザヤ……？」

「ひよは……あつたかい」

急に肩のその重みが増した。ずるずると、イザヤがヒョウジュのほうに倒れ込んでくる。

「イザヤ」

「ねむ……い……ひ、よ」

慌ててイザヤを支えて、両腕になんとか抱えて、いつものように膝を枕にしてやると、すぐにイザヤの寝息が聞こえてきた。

話の途中だったのに、と思ったが、寝台では眠らないイザヤのことを考えると、こぼれるのは苦笑だった。

「ギル、おいで」

少し離れたところで寝そべっているギルも近くに寄せて、ヒョウジュはイザヤの寝顔を眺める。

真っ赤になって逃げ回っている顔か、ただただ微笑んでいる顔か、

転寝している顔しか見たことがない。

いつになったらほかの顔を見せてくれるだろう。
いつになったらヒヨウジユを、婚約者として見てくれるだろう。

「あらあら、狩人さんは眠ってしまったのかい？」

「……ええ」

振り向いた行商人夫妻に、ヒヨウジユは肩を竦めて笑った。

「ふふ、お嬢さんは狩人さんに愛されてるねえ」

「え……？」

「だってそうだろう？ そんな穏やかな顔で、狩人さんを眠らせてやれるんだから」

羨ましいねえ、と言った奥さんに、ヒヨウジユは幾度か瞬きをして、目線をイザヤに戻した。

寝台で眠らないイザヤ。

眠れる薬を欲しがるイザヤ。

ヒヨウジユの膝で、寝息を立てるイザヤ。

嫌われているわけではないとわかつてはいるが、それなら、少しでも好かれていると、期待してもいいのだろうか。その愛を、与えてくれようとしていると、思ってもいいのだろうか。

「イザヤ……わたし」

出逢った頃よりも伸びたイザヤの髪を梳きながら、ヒヨウジユは胸を高鳴らせた。

04 : 握った手のひらは震えて。 2

キルナイ村に着いたのは、夕刻に差しかかる時間だった。

寂しさを感じるその時間にキルナイ村に入り、すぐ隣の街に行くという行商人夫妻にお礼を述べる。別れ際、無事に夫妻が隣街へ行けるよう、イザヤは途中までギルに護衛を頼んだ。

「夜は危ねえから、頼む」

「そんなことしてもらわなくていいよ、狩人さん」

「隣街は近いっていつても、それでも怖いから」

「……心配してくれるのかい」

「おれは狩人だから」

「そうかい……ありがとう、狩人さん」

ギルに護衛されることを了承した行商人夫妻を見送り、その姿が見えなくなってから、イザヤはヒョウジユの手を握った。

「宿に行こうか」

「もう？」

「だってヒョウジユ、疲れただろ？ おれはその……たっぷり眠らせてもらったし」

「だいじょうぶよ」

「ん、でもな」

「だいじょうぶ」

足手まといにはなりたくない。その一心で握った手のひらを強く握り返したら、ふふ、とイザヤは笑った。

「強情なお姫さまだ」

「今のわたしは、ただのひよ。姫じゃない」

「でもなあ……ここまで連れて来ておいてなんだけど、ひよに怖い思いはさせたくねえから」

「だいじょうぶ」

「まいったな……シスイを連れてくればよかった」

どうしよう、と言いながら歩き始めたイザヤに、その方向が宿屋でないことを祈りながら、ヒョウジュは引つ張られつつ歩く。

ここまで来て宿屋に置き去りにされるのは、いやだった。足手まといにはなりたくないけれども、だからといってひとりで待たされるのも、いやなのだ。

俯いて抗議しながら、ヒョウジュはイザヤに引つ張られて歩く。

村はまだ農耕に賑わっていて、防寒対策が行われていた。これからの季節は、寒い土地だからこそ実を生す果物や野菜の栽培が始まる。王都が近いクルナイ村は、需要が多い野菜を主に生産しているが、狩人の情報交換の詰所としても機能しているので、宿屋や酒場は充実していた。

「おう、イーサじゃねえか」

と、イザヤを見かけて声をかけてくる狩人は、多くなかった。その狩人は大柄で、シスイのような体躯でこちらを圧迫する。華奢なイザヤがさらに華奢に見えた。

「相変わらず小せえなあ、イーサは」

「うるせえな。そっちは相変わらず無駄にでけくせに」

「はん。ガキのてめえには羨ましいだろ。って、お？ 生意気に女連れかよ」

イザヤに声をかけた狩人が、ヒョウジュに気づいてずい顔を近づけてくる。すぐにイザヤが壁となってくれたが、驚いた。

「おいおい、おめえ、こりや……姫さんじゃねえか？」

どきつとした。真つ白な耳当ては、ヒョウジュの珍しい白い髪を隠してくれているが、それでも足りなくて外套をすっぽりと頭から被っている。白く見えるものが耳当てであると、そう誤魔化されてくれなかった狩人に、自分の正体が知られたことに、ヒョウジュは少し焦った。

今さらだが、ヒョウジュは王女だ。城を抜け出して、イザヤと一緒にいる。そのことをどう説明すればいいのだろうと、頭がぐるぐるとした。

しかし、イザヤの態度は変わらない。

「それがどうした」

「どうやって攫ってきたんだよ？」

「あんたには関係ねえだろ。それより、今ここにあんた以外の狩人はいんのか？」

「つれねえなあ」

「いんのか、いねえのか、どっちだよ」

引かないイザヤに、折れたのは狩人だった。

「……ふたり、いるぜ。詰所で目撃された害獣の検討会だ」

「あんたを合わせると三、か……多いな」

「目撃されたのは一体じゃねえからな」

「てえと？」

「二体だ。あとから四体。小せえのはそのさらに倍だ」

「ふうん……やけに集中してんな」

「二十年くれえ前にも、集中した時期がある。今じゃ珍しくもねえけどな」

ふむ、とイザヤが考え素ぶりを見せたのは、一瞬だけだった。

「……わかった。目撃された場所は？」

「北の外れだが……おい、おめえまさか、またひとりでやる気がよ？」

「ひとりじゃねえよ。ギルがいる」

「魔犬ギルギディッツがおめえに懐いてるからって……つつか、姫さん攫つてきといて駆除なんかしてられんのかよ」

「あんたには関係ねえことだ。行こう、ひよ」

「あ、おい、イーサ……っ」

行こう、とイザヤは、狩人が呼び止めるのも無視して、ヒョウジユを引つ張って再び歩き始める。方向から、それが北であり、害獣が目撃された場所に向かおうとしているのがわかる。

ヒョウジユは、握られている手のひらに、視線を落とした。
震えている。

「……ひとりで行かなければいいのに」

「……うん」

「ほかの狩人と協力してもいいのに」

「……うん」

「ギルを待ってもいいのに」

「……うん」

イザヤは前を向いたまま、ヒョウジユを見ない。けれども鮮明に伝わってくる、手の震え。

怖がりなくせに、どうしてこの人は、狩人なのだろう。

「……ひよ」

「なあに？」

「怖い」

立ち止まったイザヤはヒョウジユを振り向き、空いているもう片方の手も握ると、こつん、と額を合わせてきた。

「怖いけど……ひよを、護る」

「……逃げてもいいのよ」

「おれは狩人だ。逃げない。だから……」

ふと合わせた額を離れたイザヤは、とんとヒョウジユの肩に、そのまま落ちてくる。

「そばにいて」

小さく呟かれた言葉に、ヒョウジユは微笑む。首を傾かせて、寄り添った。

「いるわ。わたしをおいていかないで」

「うん……うん、ひよ」

珍しいこともある。眠くなさそうなのに、甘えてくるイザヤが、子どもみたいに見えた。けれども、逃げないでこうして甘えられて、ヒョウジユは嬉しかった。

「いつもひとりなの？」

「うん。ギルがいるから」

「ギルだけ？」

「うん。ギルだけ」

「どうして？」

「ギルは仕方ないんだ。おれから離れようとしねえし、置いて行くにもついて来る。隠れても見つかるから。だからギルだけ」

イザヤは、ひとりで害獣を駆除する。片刃の双剣と、黒犬ギルだけを相棒に、ひとりで害獣に立ち向かう。

ふつうなら、狩人はあまり単独で動かない。移動中であつた場合は仕方ないとしても、そうでもないかぎり、狩人はそのとき集まつた人数で組分けし、単独ではなく複数で害獣駆除に当たるものだ。だから狩人の詰所が、各地に点在している。その地に永住している狩人もいるので、彼らは情報を交換しながら、状況に応じた戦法と戦略で、害獣を駆除していた。

そんな中で、イザヤはいつもひとりだ。

「どうして、ひとり？」

「誰かが一緒っていうのは……怖いから」

「……なら、わたしはどうなるの？」

「ひよは剣を握らねえし、握らせる気もねえから、いいの」

「わたしも戦える」

「ん。でも、握らせねえよ？」

にか、と微笑むイザヤから、本気が伝わってくる。ヒョウジュはシスイから剣を習っていたので握れるし扱えるのだが、どうやら荷物に隠れている小剣を使う機会是与えられそうにない。

「戦えるのに……」

「だめ」

「でも」

「だめ。はい、この話は終わり！ ひよ、ちょっとここで待ってな。この辺り見てくるから」

話から逃げるように、イザヤは先を走っていく。役に立たないだろうというのは百も承知でついてきてはいたが、真っ向から禁止されるとは思っていなかっただけに、重いため息がこぼれた。

近くに大きな岩を見つけてそれに腰かけ、丘の上にひとり立って周りを見渡すイザヤを眺めた。

「イーサの間合いに入ると、斬られるぞ」

「えっ？」

急な声に吃驚した。振り返るといつのまにかギルが、戻って来ていた。

「行商のおふたりはどうしたの？」

「街の入口近くまでちゃんと送ってきたよ」

「そう……お疲れさま、ギル」

しっかりとその役目を果たしてきてくれたギルを労って、柔らかい頭を撫でた。くすぐったそうにしたギルは、けれどもすぐにその灰色の双眸を、イザヤの後ろ姿に移した。

「イーサがひとりで戦うのは、害獣と一緒に人間まで斬りそうになるからだ」

どこから話を聞いていたのか、ギルはそう言った。

「イーサは強いけど弱い。だから、ひとりで戦うんだ」

「……ギルは？」

「おれは人間じゃない。だから一緒に戦える。イーサにおれは斬れない」

「人だけ、なの？」

「イーサは人間が嫌いだから」

「え……？」

あんなににこにこ微笑んでいるのに、と思う。だがしかし、そういうえば先ほどの狩人に対して、狩人は親しげであったのに、イザヤはそれを拒絶するような言い方をしていたし、一線を置いているような態度だった。

「どうして、人が……」

「前は違った」

「前？」

「眠る前。あの頃は逆に、人間が好きだった。どんな人間でも、イーサは好きだった。けど……起きてからのイーサは、人間が嫌いになってた」

ギルが言う眠る前というのは、きっと、イザヨイだった頃のイザヤのことだろう。確かに話に聞けば、イザヨイという騎士もイザヤがそうであるように穏やかで笑みを絶やさず、そして人間を好いていた。

やはりイザヤとイザヨイは、同じ魂でも、違う人間なのだ。

「なにが、あつたのかしら……」

「今のイーサには憎しみがある」

「……人に？」

「恨みもある。だから一緒に戦えないんだ。斬り殺しかねないから」

瞬間的に、ゾツとした。イザヤにそんなことができるわけもないと、そう思いたいののに、思えなかった。あの笑顔の下には、きつと隠されたものはあるのだと、気づいてしまった。

過去をちらりと話してくれたとき、イザヤがなんと言っていたか。苦しみも悲しみも、つらさも、イザヤはわからないと言っていたではないか。今でもわからないと、そう苦笑していたではないか。もし、わからないのではなく、わかりたくないのなら。

「ギル……イザヤは」

「そうだよ。イーサは無意識に、人間を殺そうとする」

「……そんな」

イザヤはわかりたくないのだ。苦しみも悲しみも、つらさも、わかりたくないのだ。わかってしまったらどうなるか、人間を無意識に殺そうとする自分を自覚しているから、抑えつけているのかもしれない。

「イーサは弱い……強いけど、弱いんだ。前のイーサもそうだったけど……誰もそれをわかってくれない」

しょぼんと耳を垂れさせたギルを、ヒョウジュは唇を噛みしめながら、そつと撫でた。

「なにがイザヤを、そうさせてしまったの……」

「わからない……起きたときのイーサは、もうそうだったから」

真っ直ぐと前を見据え、ヒョウジュに背を向けるイザヤを、ヒョウジュはギルと一緒に長いこと見つめた。

イザヤは強い。

それは狩人としての強さで、人間としての強さではないだろう。なにかが彼を、そう歪めたのだ。

「なにがあつたの……イザヤ」

その肩には、なにを、背負わされているのだろう。怖いと、そう言つたのは、害獣に対する怯えではなく、人間に対する怯えだというなら。

その笑顔の下で、どれだけ、泣いているのだろう。わたしのところで、泣いてくれたらいいのに。

「ひよ、宿に行こう。やっぱ移動してるわ、害獣」

丘を走り下りてきながら、イザヤはヒョウジュのところに戻ってくる。

「ここから少し先にいるっぽい。おれたちの移動はまた明日に……、どうした？」

ヒョウジュの顔色に気づいたイザヤだったが、ヒョウジュはなんでもない、首を左右に振った。

「わたしのことは、気にしないで。それより、移動を明日にしてしまつていいの？ 今からでも追いかけたほうが」

「ひよに野宿させたくねえもの」

「野宿、楽しそう。だって、イザヤと一緒にだもの」

「うー……でも、なあ」

「わたしはだいじょうぶ。イザヤと一緒になら」

うーん、と唸ったイザヤは、やはりすぐにでも害獣を追いかけた
いのだろう。街や村に近い場所で目撃されただけに、いつ襲撃があ
るのかと人々は怯えて過ごさなければならぬからだ。

「やっぱり、駄目だ。そろそろ陽も落ちるし」

「わたしのことは気に」

「気にしてるわけじゃねえよ。害獣がここを移動してるってことは、
村への危険度も下がってるってことだ。詰所にはおれ以外の狩人も
いるし、そんなに焦らなくてもだいじょうぶだから」
「でも……」

一緒にいたくて、ついて来てしまったけれども、やはり足手まとい
になるだけだ。それが悔しい。

「じゃあ、ひよ、ギルに乗って」

「ギルに？」

「陽が落ちるまでまだ少し時間がある。ギルがもう駄目だって言う
まで、行けるところまで行ってみよ」

イザヤのその妥協案は、ヒョウジュにはとても嬉しい提案だった。

「乗れるかしら」

「でかいから。おれでも乗れるし」

ギルは大きい。大型の犬の三倍はある。

「いいぞ。乗れ、ひよ」

少し不安だったが、ギルが乗れと背中を差し出してくるので、ヒョウジュは恐る恐る腰かけた。

「首に手え回して。ぎゅっとしがみついたら、あとは目え瞑ってな」

言われたとおりに、ギルのふわふわした首に腕を回して、しがみつく。顔を埋めて目を閉じた。

「行くぞ。ギル、ひよを落としたら、ただじゃおかないからな」

とたん、ぐんと後ろに引つ張られる感覚がし、慌ててヒョウジュはさらに強くギルにしがみついた。

「ひゃ、あ……っ」

「ひよ、喋るな。口を閉じろ」

「で、もっ」

「いいから口を閉じろ。歯を食いしばれ。風を身体に感じる」

ギルの助言に、できるだけ沿うように努力はしてみろが、なかなか難しい。そもそも、走るだなんて思ってもいなかったので、突然のことに心臓がばくばくし、手が震える。落ちないようにしがみつくのが精いっぱいだった。

05 : 握った手のひらは震えて。 3 (前書き)

*残酷描写がちらりとあります。ご注意ください。

05 : 握った手のひらは震えて。 3

ギルの背中に乗せられての移動は、思った以上に快適だった。ギルが揺れないように走ってくれたおかげもある。

だから。

それを見つけることができた。

「小物だ……六、七、八……九体だな」

茂みに身を潜めて、イザヤが、その数を確認する。両手はすでに、右側の腰に下げられた双剣にあった。

「あれが……」

害獣。

小物だ、とイザヤは言ったけれども、それでも体躯はギルほどある、焼け爛れた赤黒い獣だ。歩くそばから黒い霧のようなものが発生し、辺りを暗く、じめじめした空気になっている。黒い霧は、あれは穢れだろう。穢れが視認できるほど、そこは穢れに満ちている。

ヒョウジュは、害獣を見るのは、これが初めてだ。あんな生きものだったなんて、知らなかった。もっと、自分が知っている形から離れたものだと思っていた。

「だいじょうぶか、ひよ」

心配げな顔をしたイザヤに、ヒョウジュはギルにしがみつкинаがらこくこくと頷いた。

「すぐに駆除する。穢れはつらいだろうけど、少しの辛抱な」

ふっと笑んだイザヤに、頬を撫でられた。けれども、すぐにそのぬくもりは去ってしまう。

「ギル、ひよを頼む」

「数が多い。イーサひとり……」

「だいじょうぶだ。おまえは、ひよを」

「……わかった」

「行ってくるよ、ひよ」

にこ、と笑ったイザヤが、身を翻して茂みから飛び出す。

「イザヤ……っ」

思わず追いかけてそうになって、しかしすぐに、人型を取ったギルに捕まった。

「ひよは、見るな」

そう言って、ギルはヒョウジュに、イザヤと同じ顔を見せる。

「けど……っ」

「見るな。イーサならだいじょうぶだ」

そう言って、ギルはヒョウジュの視界を、胸に抱きしめて隠してしまう。

とたんに聞こえた害獣の唸るような叫び声に、身体がびくんと震えた。

「ギル、ギル、イザヤを助けて。イザヤを」

ぎゃああ、と聞こえる悲鳴が、イザヤのものになったら、どうしよう。

その不安に苛まれ、ヒョウジュは震えながらギルにしがみつき、自分の愚かさを恥じた。

イザヤの危険をこんな間近で感じたくない。走れば届くところにいるイザヤが、こんな世界にいるだなんて信じられない。

いつも仄かに笑っているイザヤから、笑みが消えてしまう。

いやだ。

イザヤがいなくなるのは、いやだ。

ひよ、と呼んでくれる人が、いなくなってしまう。

ひよ、と呼んで微笑んでくれる人が、いなくなってしまう。

いやだ。

「いや…っ…イザヤ、イザヤ」

聞こえ続ける害獣の呻き声、ザシュッと剣の斬れる音、ぼたぼたと滴るなにかの音、草花が踏み倒され荒らされる音、イザヤの僅かな息遣い。

怖いと思った。

イザヤの恐怖が、恐ろしかった。

「消え失せろ、害獣どもっ！」

怒鳴ったイザヤの声に、ヒョウジユはハッと顔を上げる。イザヤと同じ顔をしたギルも、イザヤのほうを見ていた。

「おれを引つ張り込むんじゃねえ！」

その、声が。

なぜだろう。

悲しく聞こえた。

寂しく聞こえた。

泣いているように、感じた。

「イザヤ……」

なんでそんな声を上げているの。

なにがそんなに、苦しいの。

ヒョウジユの目は、害獣に立ち向かうイザヤへと、流れる。

その瞬間に、最後の一体であつたらしい害獣が、イザヤの双剣で真つ二つにされた。噴き出すというよりも破裂したように、害獣の血らしき黒いものが飛び散る。

駆除はあつというまだった。

それが、イザヨイと同じように「イーサ」と渾名されるイザヤの、狩人としての実力なのだろう。

肩で息をしたイザヤは天を仰いでいた。

手の甲から、血を滴らせている。

ヒヨウジュは茫然と、それを見つめた。

「ああくそ、疲れた……まじ痛え……しくった、最悪」

ぼそぼそと天に向かって言いながら、幾度も深呼吸して、漸くイザヤはヒヨウジュを振り向く。

その一瞬だけ、ゾツとした。

瞳の、曇りに。

まるで穢れに侵されたかのように、虚ろな双眸に。

愕然として見つめていると、イザヤのほうで幾度か瞬きをする。

「ひいよ……？」

ぱちぱちと瞬かせているうちに、少しずつ、焦げ茶色の双眸に光りが戻ってくる。ヒヨウジュは急いで駆け寄り、その頬を撫でた。

「もう、だいじょうぶ。怖いものは消えたわ」

そう言ったのは、言わなければならないと思ったからだった。

言ったとたんにイザヤの雰囲気は和らぎ、いつものふわふわとした笑みを浮かべてくれる。

「ひよ、無事？」

「ええ」

「怪我、ない？」

「イザヤのほうで怪我をしているわ」

「ん？ ああ……そういえば痛えな」

まるで今気づいたかのように手の甲の傷を見たイザヤからは、先ほどまで感じた虚ろさが消えていた。

「あつちに小川があつたわ。傷を洗い流して、手当てしましょう」
「そうだな。ギル、ここは頼んだぞ」

ああ、というギルの適当な返事を聞いてから、ヒョウジュはイザヤを引つ張って小川があつたほうへと移動しつつ、双剣を鞘に戻してもらう。

あの虚ろな眼はなんだったのだろうと、疑問は残っているが、なにはともあれ怪我の治療が先だ。

しかし、小川を見つけて傷を洗い流したあと、イザヤの顔つきが徐々に強張っていく。布で傷口を拭いながら、手のひらに天恵の力を付加させて穢れも一緒に被っていたら、イザヤの手が震え始めた。

「ひよ……」

まるで信じられないものでも見たかのような声を出すイザヤに、ヒョウジュはそつと己れの手を重ね、傷口に薬を塗る。包帯を綺麗に巻いてから、震えるイザヤの手を両手で包んだ。

「怖かった……？」

ヒョウジュは怖かった。
イザヤが、傷つくことが。

「ごめん……おれ、なさけねえ」

かつこわるい、と声を絞り出し、包んでいた手を逆に取りられて、引つ張られた。ヒヨウジュの両手を胸に抱きながら、イザヤは身を丸める。

「ひよ、ごめん……ごめん、触らせて、ひよ」

俯いて、ヒヨウジュの両手を抱きしめるイザヤの表情は、ヒヨウジュからは見えない。もう触れているのに、そのことをなぜ謝るのかわからなくて、ヒヨウジュは自分から身を寄せた。

「ひよ……」

「だいじょうぶ」

だいじょうぶだから、と繰り返し囁くと、イザヤが顔を上げる。泣きそうな顔をしていた。

「……ひよ、抱きしめたい」

そんな確認なんか要らないのに。そう思いながら肩の力を抜けば、すぐに両手は解放され、代わりに強く暖かい抱擁を受けた。言葉もなく、ただただ抱きしめてくるイザヤに、ヒヨウジュは寄り添う。

いつからだろう、と思った。

いつからわたしは、この人を、好いているのだろう。

なんで好きになったかはわからない。ただ、気づくとそばにいたと思うようになっていた。心が感じるまますべてを受け入れたら、好きという感情が生まれていた。

だからヒヨウジュは、イザヤを婚約者に、と打診してきた祖父母

の言葉を素直に受け入れた。

結婚なんてするつもりは今でもないけれども、イザヤとなら、家族になりたいと思った。

イザヤの家族になりたいと思った。

イザヤがそれを、どう受け止めているかは、わからないけれども。

けれども、こうして抱きしめてくれる。

ヒヨウジュに怖いと言ってくれる。

ヒヨウジュのそばで眠ってくれる。

好かれていると、思ってもいいだろうか。
それならとても、嬉しいのだけれども。

「ごめん、ひよ。やっぱり、怖い思いさせるだけだった」

ごめん、と、もう幾度も謝られている。怖い思いをしているのはお互いさまなのに、それは申し訳なくて、ヒヨウジュは唇を噛んだ。

「足手まといになって、ごめんなさい」

「え？」

「でも、一緒にいたい。イザヤを傷つかせたくないの」

「……ひよ」

「ごめんなさい」

我儘だとわかっている。けれども、好きな人のそばにいたいと思う気持ちは、どうしようもできない。怖い思いをしても、それだけは変わらない。

まだ手を震わせているイザヤを、ヒヨウジュが、安心させてやりたかった。

「……なあ、ひよ、おれ」

と、イザヤがなにか言いかけたとき、どこからか馬の蹄の音が聞こえてきた。

言葉を途切れさせたイザヤはそちらのほうを見て、いやそうな顔をしたかと思つたら、ため息をついた。

「一日も一緒にいさせてくんねえのかよ……リツの嘘つき」

そうこぼれた言葉の意味がわからず、イザヤが見ているほうに視線を向ける。

竜旗だ。

「……国軍？」

そんな、とヒヨウジユは落胆する。

城を抜け出して、まだ一日も経っていないのに。

「見つかったやつた」

はは、とイザヤは苦笑し、ヒヨウジユを促して立ち上がる。その様子から、国軍が現われることは予測していたようだった。

「イザヤ……」

「行けたら、カジユ村のタカ爺って、おれが少し世話になった爺さんのところまで行こうと思つただけど、もう無理っぽいな」

「……わかつていたの？」

「リツに、言っておいたから」

やはりイザヤは、ヒョウジユが強制的に城へ連れ戻されることを、想定していたようだ。

「いやよ。わたし、いや。イザヤと一緒にいる」

「うん。害獣を駆除したら、帰るから」

「いや。一緒にいる」

連れて来てくれたのに、一緒にいさせてくれたのに、ここまでそばに*い*させてくれたのに、今さら帰るなんていやだ。

「なあ、ひよ。おれが帰ってくるの、待っててくんねえかな」

「いやよ……一緒にいたい」

「ひよ」

「いや……っ」

いやだ、と幾度も首を左右に振り、近づいてくる国軍の音を拒絶する。けれども、否定し続けてもいられない。

「ヒョウジユ！」

遠くから、兄ナガクモの声がする。ナガクモを大将に、国軍は明確な目的で城から来たのだ。

「兄さまが来るなんて……いやよ、イザヤっ」

「おれもやだなあ……でも、まあ仕方ねえや」

「仕方なくないっ」

「ひよ」

ふふ、とイザヤは笑んだ。その手は未だ震え、ヒョウジユが手の

ひらを握っても震え続けているのに、いつものように仄かに微笑む。

「帰ったら、また、な」

「え……？」

なにを、と思うまもなく、イザヤの顔が近づいて。

「ひよは、おれのだから」

近づいたと思ったイザヤの顔が、ゆっくり離れていく。

「幾度でも、攫うよ」

唇を掠め取られたと、そう気づいたときには、イザヤのぬくもりすら離れていつていた。

「……、イザヤ！」

呼んだときにはもう、その後ろ姿は手の届かないところにあって、茂みから現われたギルの背に乗ってしまうともう、あっという間にその姿は見えなくなってしまった。

「イザヤ……」

呆然と、ヒョウジュはイザヤの名を口ずさむ。

口づけされた。

してくれた。

行ってしまったイザヤの、直前までの仄かな微笑みを思い出して、触れられた唇を両手で覆い隠して蹲る。

嬉しかった。

泣きたいくらい、嬉しかった。

しかもイザヤは、ヒヨウジユを「おれのだから」と、「幾度でも、攫うよ」と言ってくれていた。

一緒にいたい、一緒に行きたい、そう思う心と、イザヤが残していった言動に葛藤を起こしながら、ヒヨウジユは到着したナガクモに心配されて肩を抱かれるまで、詰まる胸の想いに身を焦がした。

05 : 握った手のひらは震えて。 3 (後書き)

ほんの少しだけイザヤと一緒に連れて歩いてもらって、一日。翌日には夢だったかのように城へ戻ったヒヨウジュは、イザヤが言い残していったことを胸にその帰りをひたすら待っている。

あれから二日が過ぎた今でも、イザヤは帰らない。昨日から降り続いている雨が、イザヤを凍えさせていなければいいけれども、と少し不安になる。雪が降り出してもおかしくない季節だけに、この時期の雨は暖かいほうだが、それでも身体には悪い寒さを伴っているものだ。ちゃんとどこかで休んでいて欲しい。

不安を胸に、リツエツが「帰ってきましたよ」と伝えにきてくれるのを、今か今かと待っていたときだった。

「入るよ、ヒヨウジュ」

先触れもなく兄たちが部屋を訪れるのはいつものことだが、扉も叩かず入られたのは初めてだった。

「……アオツキ兄さま」

イザヤの帰宅かと浮足立っていたヒヨウジュは、アオツキの入室に肩を落とす。

「ちょっと話、いいかな」

「ええ……どうぞ、こちらに」

アオヅキはひとりではなく、アオヅキを補佐する文官と武官のふたり連れていた。ヒヨウジュは彼らにも適度に休むよう促し、侍女に頼んでアオヅキのお茶を用意してもらった。

用意されたお茶を一口、ゆっくりと飲んでから、アオヅキは口を開いた。

「聖国のことは聞いたかい」

「ヴァリアス帝国、ですか？」

「そう」

「……皇帝陛下が、病に倒れたとは、お聞きしましたが」

少し前、祖父母が帰国してまもなくだっただろうか。このリヨクリヨウ国の主上国、聖国とも呼ばれているヴァリアス帝国の皇帝が、病に倒れたという報が届いた。公にはされていないそれは、属国にはすぐ知らせられている。唯一の皇太子がその玉座を継ぐだろうと言われていた。

「昨日、崩御されたそうだ」

ああやはり。神の国、主上国の皇帝も、病には勝てない。

いや、勝って欲しくもないというのが、リヨクリヨウ国の心情だ。

「……害獣の被害は、減るでしょうか」

「それを期待している。ヴェナート陛下の治世が二十年弱も続いたことだしね。減ってくれないと困る」

アオヅキは忌々しげにため息をついた。

なぜ兄がこんな態度なのか、本来なら主上国に対し不敬であるこ

とだが、ヒヨウジュは注意しない。

理由は聖国の天恵、そしてその影響を受ける害獣の存在だ。

リヨクリヨウ国にヒヨウジュのような天恵者がいるように、聖国にはさらに多くの天恵者がいて、皇族には特有の天恵があった。聖国の皇族特有の天恵は、この大陸の均衡を保ち国土を安定させる力であり、また世界の調和を支えるものである。

その聖国の天恵が、ヴァリアス帝国皇帝ヴェナートの治世になったとたん、歪められた。狂いが生じ、大陸の均衡が乱れ始め、世界の調和が崩れ始めた。

害獣という世界の澱みや塵と戦い続けるリヨクリヨウ国は、聖国の影響と余波に直撃され、害獣被害が増えたのだ。

「彼がいつたいなにをしたのか、今もそれはわからないままだが……これでわが国も平穏を取り戻せるなら、彼の死を心から嬉しく思うよ」

「……そう、ですね」

なぜ聖国の天恵が歪められたのか、狂いが生じたのか、その原因はわかっていない。ヴェナートはそれらを否定していたし、歪みや狂いが生じているという証拠が聖国では明らかにされず、リヨクリヨウ国では害獣被害の増加、他の属国では自然災害の多発や賊の増加であったために、どの国も聖国だけを責めることが憚れたのだ。

ただ、リヨクリヨウ国は害獣という世界の澱みや塵と戦い続けているゆえに、ひび割れた調和の影響を受けるのは当然で、それらを司る聖国に責任があると追及することができる。できずにいるのは、リヨクリヨウ国という最北端の小国が、ヴァリアス帝国という世界三大国の一つに、戦を仕掛けるなど無謀の極みであるからだった。

「皇太子殿下が賢帝となってくれることを、祈るよ」

歪みや狂いを生じさせた皇帝ヴェナートが崩御した、変革期と呼ばれるだろう今、リヨクリヨウ国は慎重に次代皇帝を見定める必要がある。

「及ばずながらわたしも、祈らせていただきます」

「そうだね……ヒヨウジュも、王族のひとりだ」

「はい」

「だからね、ヒヨウジュ」

「……はい？」

ふとアオヅキは、ヒヨウジュをじつと見据えてくる。ヒヨウジュと同じ空色の双眸が、細められたとき。

「嫁いでもらうよ」

「……え？」

「ヴァリアス帝国次代皇帝となる、皇太子サライ・ヴァディーダ殿下に、嫁いでもらうよ、ヒヨウジュ」

瞬間的に、ヒヨウジュは耳を疑い、兄の言葉を疑う。

「……なにを、おっしゃって」

「おまえを嫁がせる、と言ったんだよ」

なぜ、とヒヨウジュは瞠目した。

「わ……わたしには、婚約者が」

「あの狩人との話なら、初めから存在しないよ。誓約書もなにもない、ただの口約束だ。そもそもおばあさまの……王太后さまの独断であって、陛下は認めてもいない」

「そんな……」

目の前が、真っ暗になった。真っ白になった。アオヅキの言っていることを、理解したくなかった。

「明日、陛下がヴァリアス皇帝の戴冠式に出席すべく、国を出る。ヒヨウジュは陛下と一緒に、ヴァリアス皇帝の妃候補として、聖国に行ってもらうよ」

「そ……そんな急にっ」

「急なことではないよ。おれとナガクモは、ずっとそれがいいと陛下に進言していたし、陛下も悪くない話だと理解を示してくれていた」

それにしても、とヒヨウジュは拳を握る。

「今までそのようなこと、一言もおっしゃらなかったではありませんかっ」

「まあね。だって可愛いヒヨウジュのことだ。政略結婚なんてさせたくないけど、幸いにもヴァリアス皇帝となるサライ殿下は賢帝を期待できる人柄だね。前に一度お逢いしたとき、彼ならヒヨウジュを幸せにしてくれるかもしれないと思ったんだ」

「ですが、わたしは……っ」

「ヒヨウジュ、おまえは、王族なんだよ」

グツと、言葉に詰まった。

確かにヒヨウジュは、王族の端くれだ。国のために在らねばならない。たとえ外見で不気味がられようとも、忌み嫌われようとも、そんなものは王族という言葉の前には無意味だ。国を一步出れば、ヒヨウジュの外見は目立ちもしないのである。世界を捜せばどこにでもあるのだ。

弊害は、どこにもない。

「いやです、わたし……いやっ」

「ヒョウジュ」

「いやよっ」

心の裡で、イザヤを呼ぶ。そばにいてと、わたしをここから連れ去つてと、呼ぶ。

「わたし、ひとりでいいもの……イザヤがいるからいいもの……嫁がない。どこにも行かない……イザヤと一緒にいるの。イザヤがいの」

心の叫びを吐露すれば、アオツキにはため息をつかれた。

「……いつからそんなに、我儘になったのかな」

イザヤと出逢ってからだ。イザヤと出逢って、ヒョウジュは我儘を覚えた。イザヤのそばにいたいから、イザヤの家族になりたいから、ヒョウジュは我儘になった。

「いや……いやよ、兄さま……どうして」

「おれは狩人が嫌いだからね」

「だからって」

「あの狩人におまえを嫁がせるくらいなら、おまえに恨まれたほうがマシだよ」

睨むように、冷えた空色の双眸に射られる。

「なんで……どうして、兄さま……っ」

「あの狩人はおまえに天恵を使わせる。おまえが背負った天恵を。」

おれは、それが許せない」

アオツキが授かったわけではないのに、なにが許せないのか、ヒョウジュにはわからない。

「わたしの、勝手よ……自己満足よ。なにがいけないの」

「おまえを否定させる天恵なんか、あの狩人に使う必要はない」

その瞬間、ヒョウジュは、兄の言葉に息を詰まらせた。

好きにはなれない、けれども嫌いにもなれない白い髪。この髪の色で、ヒョウジュは不気味がられ、怖がられ、嫌われた。色を失くした者だと、忌避されてきた。

アオツキは、ヒョウジュの心を、悲しんでくれていたのだ。

だから、害獣のいない国へと、天恵を使わずに済むところへと、逃がそうとしている。外見のこととやかく言われることのない世界へと、送り出そうとしている。

「兄さま……」

「いいかい、ヒョウジュ。もう二度と、その天恵は使うな」

強くそう言っていると、アオツキは座っていた椅子から立ち、離れていく。

「兄さま、わたし……っ」

「ヒョウジュ、おまえは王女だ。陛下に、国に、従う必要がある」

最後通告のように言い放つと、アオツキは振り返りも立ち止まりもせず、連れてきていた文官と武官を促し、部屋を出て行った。

ぱたん、と扉が閉められてまもなく、ヒョウジュは両手で顔を覆

い隠して身を丸める。

「イザヤ……イザヤ、イザヤ……っ」

嫁ぎたくない。イザヤ以外の人と、家族になりたいなんて思わない。イザヤがいい。イザヤのそばで、笑っていたい。

ああ、こんなにもわたしは、イザヤが好きだ。

こんなにもイザヤが恋しい。

「わ、わた、し……っ」

あなたと生きたい。

あなたと死にたい。

あなたと、生きていきたい。

それがわたしの願いで、わたしの素直な心。

ぼろぼろとこぼれ落ちる涙をヒョウジュは止めることもできず、
声を上げずに泣き続けた。

07 : 広がる空は嘘をつく。 2 (前書き)

ギル視点です。

ハッと、イザヤが顔を上げた。その急性さに、珍しくギルは驚いて、飛び跳ねる。

「な、なんだよ、どうした、イーサ」

あまりにも急だったせいだが、それでも獣としての誇りが少し傷つけられた気がして、ギルは思わず睨むようにイザヤを見つめてしまふ。ギルのその様子など気にもせず、というか見もせず、イザヤは一点を見据えて動かない。

「イ、イーサ？」

イザヤが俊敏さを見せるのは、害獣と対峙しているときだけだ。それ以外はぼんやりとしていたり、なにを考えているのかひたすら微笑んでいたりするため、反射神経を疑いたくなる。それだけに、急性に動いて、とたんに硬直したイザヤのそれは、ギルには意味不明だった。

「ひよ……が」

「ひよ？ ひよなら城だろ」

ヒョウジュはイザヤの好い人だ、という認識がギルにはある。それは間違いない。イザヤはヒョウジュに惚れていて、どうしようも

ないくらいだ。見ていればわかる。ヒヨウジュの前で、とたんに情けなるのだ。ヒヨウジュの前では情けなるイザヤの姿は、見ていて楽しいし、面白い。眠る前、イザヨイという名だった頃もそういう姿は見る事ができたが、報われることがなかった。

だからギルは、今がとても楽しくて面白い。イザヤとヒヨウジュが互いに想い合っているから、なおさらだ。

そのヒヨウジュを城から連れ出して、害獣駆除につき合わせたのは三日くらい前になる。遭遇した害獣に思った以上の時間がかかったせいで、イザヤは連れて行きたかった場所にヒヨウジュと行くことができず、ヒヨウジュは城に帰ってしまった。

残念だ、とイザヤは肩を落としていたが、漸く復活してきたところで、つい数刻前に害獣の一団を駆除した。さあヒヨウジュのところに帰るぞ、となって、足止めをくらっているところである。

イザヤがしくじった。

眠る前のときに比べるとやはり剣の腕が落ちているために、イザヤはよく傷を作る。あちこち傷だらけだ。とくに脇腹と腕の傷は多い。治りきらないうちから傷を作るせいで、いつでも身体は包帯に巻かれている。

数刻前に駆除した害獣から受けた傷は、やはり脇腹と腕だ。痛いせに痩せ我慢してくれて、少し前に気づいたばかりである。ふらついて倒れたから気づいた。血の匂いがあるとは思っていたが、黒い服で見た感じがわかり難かった。ここでも獣としての誇りを傷つけられたギルである。

なので、荷物から薬と包帯を取り出して治療している最中に、ギルは二度めの、獣としての誇りを傷つけられた。

「あ、わ、ちょ、イーサ、動くな。血が止まってないんだぞ」

硬直を解いたイザヤが唐突に立ち上がった。止血したばかりの傷

がそのせいで開き、血が滲んで包帯が汚れる。

「おい、イーサ」

「ひよ……」

「だから、ひよは城だ。どうしたんだ、イーサ」

「ひよが……ひよ、ひよ？」

ふらふらと歩き出したイザヤが、ヒョウジユを呼んで彷徨う。

そろそろ熱を出し始めて頭が危なくなってきたのかと、ギルはため息をつきながら治療の道具を片づけ、汚れた服に火をくべて燃やしてしまうと、新しい上着を持ってイザヤを追いかける。

「風邪引くぞ、イーサ。服くらい着ろ」

「ひいよ？ ひいよ……ひいよ？」

「ひよは城なのに……ああ、そっちは城じゃない。城はあっちだ、イーサ」

ヒョウジユを探し求めて歩くイザヤは、立ち止まってくれそうもない。仕方ないので、ギルは人型を維持したまま、歩きながらイザヤに服を着せ、先ほどまでいた場所に帰って荷物を持つと、火の後始末をしてからイザヤを追いかけた。

「ひいよー……？」

「そっちは城じゃないんだけど……どこに行くんだ、イーサ」

ヒョウジユなら城にいる、と言っているのに聞かず、イザヤはどんどん城とは反対方向へと進んでいく。

このまま歩き続けると、夜がくる。夜は害獣の動きが活発化し、危険も多い。どこか村か街に身を寄せなくてはならない。

だが、イザヤは村にも街にも向かわない。

「この道……道というか方向……聖国？」

極端だが、聖国がある方向へ、イザヤは歩いている。中継地点はいくつあったらうと考えるが、とりあえずギルはイザヤが進む方向へついて行く。

さすがに、一時間もイザヤがヒョウジュを呼びながら歩く姿を見続けると、ヒョウジュがそちらにいる気がしてきた。

「おれ、負けた……犬なのに」

イザヤの本能に負けた気がして、悲しくなった。いや、もともとイザヤの本能は卓越している。眠りから目覚めて剣を握るようになった今も、それは変わらない。ギルが害獣の気配に気づくと、イザヤも一緒に気づいているくらいだ。

「イーサ、わかったから。そっちにひよがいるんだな？　もうわかったから、少し休め。身体、つらいだろ」

前を歩くイザヤの肩を掴んで、漸く立ち止まる。いっそ気絶させて近くの街にでも行こうと、ギルは手刀をかまえた。

しかし。

「ギル」

「うおう……なんだ、正気だったのか」

てつきり熱にやられて本能が際立っているのかと思ったが、いきなり振り向いたイザヤの双眸は曇っていなかった。だが、様子がおかしかった。

「ひよが国にいねえ」

「……は？」

「いねえんだ……どこにも」

「……城じゃない、のか」

穢れをヒヨウジュに被ってもらっているせいか、ヒヨウジュがどこにいてもイザヤはなんとなくその居場所が感じられるらしい。

国にいない、ということは、城に帰っていないということなのか。いや、そんなはずはない。害獣の駆除を終えたとき、イザヤは「帰るか」と言っただけだ。イザヤが今帰る場所は、ヒヨウジュのいるところで、リヨクリヨウ国王都である。怪我の治療で立ち止まる前まで、確かに王都へ向かっていた。ヒヨウジュは城に帰っていたはずだ。

「国を出たのか、ひよは」

「ああ……なんでだ？」

「おれが知るか。けど、ひよは王女だから……そういう関係でなのか、あるんじゃないのか？」

「待つてろって言った」

「王女にそれがきくのか？」

「ひよなら待つてくれる」

「……それなら、なにか事情があつて、国を出たんだろうな」

「事情？」

「おれは知らないぞ」

人間のやっていることなど、ギルには到底理解できない。なにか困っていれば助けてはやるが、国政だの国土だの、獣で魔であるギルには関係のないものだ。

「……ばあちゃんに訊きに行く」

くるりと、イザヤは進行方向を変えた。

「行くつて、今からか？ もう夜だぞ」

「歩き通せば明日の夜には城に着く」

「そうだけど……その怪我じゃ無理だ。休まないと」

「時間がない」

唐突に、イザヤは走り出す。慌ててギルはそれを追いかけるが、イザヤは怪我人だ。走ってもギルは簡単に追いつく。

無茶だ、と思ったとおり、走り出してすぐにイザヤは肩で息をし、速度が落ちた。

「ほら、無理だろ？ 少し休むくらい、いいじゃないか」

「いやだ……っ」

「イーサ」

「いやだ！」

なぜこんなに焦っているのだろう。

ヒョウジュが国にいらなくても、彼女はもともと王女だ。ギルは知らないが、なにかいろいろなものヒョウジュは背負っている。他国に赴く用事があってもおかしくはない。そういう事情があつて国を出ただけのことだろうに、イザヤが焦る意味がわからなかった。

「もう無理だ、イーサ。また血が滲んできてる。手当てしないと」

ギルはイザヤの前に回り込んでその走りを止めようとするが、いやだとイザヤは突っ撥ねてがむしゃらに前へと進もうとする。

「ひよが……ひよがいない……いやだ……ひよが」

ああもう、なんて惚れ方だ。こんなに真っ直ぐ惚れていながら、どうしてそれを口にしてやらないのか不思議だ。照れて逃げ回っていないで、確実に捕まえておけばいいのに、なんだか情けない。

仕方ないなあと、ギルはため息をついた。

「イーサ、運んでやるから、ちょっと休め。おれが運んだほうが早い」

ギルは獣だ。魔という生きものだ。天恵を授かった魔の力は、人間の比ではない。イザヤひとりくらい、背負って夜の間に城へ行くことは簡単なことだ。

それに、滲んだ血の匂いが気になる。それまで確かに治癒力が上回っていて気にならなかったのに、やけに匂いが鼻を突く。いやな感じがしてたまらない。

だから、ギルは再びイザヤの前に回り込むと、今度こそ手刀をかまえてイザヤの後ろ首に衝撃を与えた。

「てめ、ギル……っ」

「ちゃんと連れてってやるから」

走っている勢いのままイザヤを背負い、それまでの速度以上に宙へと舞い上がる。背負ったイザヤは、その怪我もあって、もうぐったりとして気絶していた。

できるだけ揺らさないように、とは心がけるが、あれだけ焦っていたイザヤを考えれば、ここは急いだほうがいいだろう。

ギルはひたすら走る。体力的に疲れることはまず滅多にないので、

小休止すら挟まず城へと走り続けた。

息を切らせることなく、イザヤを背負って王都へと帰ったのは、空が白み始めた時刻だった。

アウレニア大陸最北端のリヨクリヨウ国から、中央の聖国まで、どんなに足の速い馬を使っても一旬はかかる。だが、四駆の車という機械を使えば、半旬で行くことが可能だ。

聖国の属国であるリヨクリヨウ国は、その技術を授かることもできるゆえに、旧型でも車という機械を手に入れている。ただ、聖国では貴族でも車は貴重で、そう頻繁に使われるものではない。最北端のリヨクリヨウ国では聖国以上に車は貴重であるし、年中雪に覆われているような国では車よりも馬が重宝される。王族でなければ車を使う機会などないようなものだ。

滅多に使用されない車が王族を乗せて国を出たのは、雪が降り始める少し前、聖国の領土に入り皇都ヴァンリに到着した頃には、リヨクリヨウ国の大地は白くなりつつあった。

「帰路では車を使えぬか」

「状況にもよります。どちらにせよ長居はできないでしょうが」

「そうだな。害獣被害のこともある。聖国に長居はできまい」

宰相ロク・シエンと、父である国王ツキヒトの言葉を横に聞きながら、ヒヨウジュはぼんやりと窓の向こうを見ていた。

華やかで美しく、活気ある城下町を見たのは昨夜のことだ、止まることなく聖国の皇城入りをしたのは夜更けのことだ。これがイザヤと一緒に旅であったなら、どれだけ楽しかったことだろう。今は見るものすべてが色褪せているように、心が躍らない。

眺めるなんて気持ちすら起きず、ただ見ているだけしかできない自分が、悲しかった。

「ヒヨウジュ？」

呼ぶ声が、イザヤではない。

「……はい、父上さま」

振り向いたヒヨウジュの前には、心配そうな顔をした父王がいる。そんな顔をするくらいなら、ヒヨウジュに強引なことをしなければよかったのだと、今さらだが思った。

「具合でも悪いのか」

「いいえ」

「では気分が？」

「いいえ」

父王の顔が歪み、いつそうひどくヒヨウジュを心配する。

「やはり気が乗らぬか……」

そうさせているのは父王だ。兄王子だ。

しかし言ったところで、ヒヨウジュに過保護な父王が、今回のことをなかったことにするはずもない。ヒヨウジュが聖国の皇帝に嫁ぐというのは、それほど大きな意味がある。ヒヨウジュひとりの判断で、父王が決めたことを覆すのは難しい。父王が決めたことは、国民の総意でもあるのだ。国を背負う王族の端くれでも、ヒヨウジュにそれを無視することはできない。

今日はこれから、皇帝となる聖国の皇太子との謁見がある。そこで初めてヒヨウジュは皇帝の妃候補として顔を合わせる事になり、また挨拶をすることになる。

気が乗らないどころか、重い。帰りたくて仕方ない。イザヤに逢いたくてたまらない。

イザヤはもう帰ってきていることだろう。もしかすると、また害獣駆除の依頼で出かけているかもしれない。ヒヨウジュが国に、イザヤが帰ってくる場所にいないことを、彼はどう受け止めるだろう。

イザヤに逢いたい。

イザヤを想うと、胸が痛い。

父王や兄王子を恨みそうになる心を抑えるのが、今はやっとだ。

はあ、とため息をつく、父王がびくりとする。ヒヨウジュの機嫌を損なわせたくないという気持ち、ありありと伝わってくる。もう無駄なことなのに、とヒヨウジュが緩く首を左右に振ったとき、その時間が来たことを宰相が告げた。

「では行くか……ヒヨウジュ」

こくりと頷いて、父王に差し出された手を取る。しずしずと歩いて、皇太子が待っているという部屋まで行った。

「静かだな」

「……そうですね」

戴冠式を目前に控えているというのに、皇城内はとても静かで、それなのに先帝が崩御したという悲しみが感じられない。喪に服しているふうでもない。むしろ静謐な空気によって新しい風が送り込まれ、その時代が動き出すべくして準備を整えているようだった。

「この先に、皇太子殿下がおられます」

案内をしてくれていた文官が足を止めた場所は、謁見が行われる場所とは思い難かったが、喪も明けきらないうちに戴冠式が開かれることを考えれば、華やかであるべき戴冠式が質素かつ簡素になっ
てしまうのもわかる。そんな、静かな場所だった。

「……人払いがされているのか？」

静かさに眉をひそめた父王の言葉に、文官が顔を上げる。若い文官は問いに応えず、どうぞ、と扉を開けてしまった。促されては、中に入らざるを得ない。

部屋に入ると、まず目についたのはその部屋の明るさ、そして清浄さだった。ヒョウジュが吃驚して息を詰めるというくらい、柔らかな空気が漂っている。

そして、謁見の場とは思えないその部屋には、先に来ていた人物が、窓辺に置いた長椅子に腰かけていた。

淡い金の髪、碧い瞳、均衡が取れているのはその容姿だけでなく、体軀もで、しかし随分と線が細い青年が、こちらに気づいてにこりと微笑んだ。

「よくおいでくださりました、リョクリョウ国王」

その声を聞いた瞬間、僅かだがヒョウジュは、イザヤが重なった。なぜ、と思うまもなく身体が反射的に礼儀を取る。

この人が皇太子、サライ・ヴァディード・ヴァリアス。

父王に、兄王子に、嫁ぐように言われた人。

父皇を失くし、若き皇帝となる人。

リョクリョウ国を含め多くの属国を従える、主上国の次代皇帝。

そんな人が、なぜイザヤと同じような声をしているのだろう。声の質が似ているのではない。声から知れる感情のようなものが、似ている。イザヤに逢いたいあまりに、耳が狂い始めたのだろうか。

父王が儀式的な挨拶を済ませる間も、当たり障りのない会話をしている間も、ヒョウジュは顔を上げることなく声の復習をして、ぐるぐると考えていた。

「ヒョウジュ、ヒョウジュ？」

「！ は、はい」

「そろそろ暇を願うが……いかがした？」

「いえ……なんでもありません」

いつのまに終わったのだろうか、というくらい、ヒョウジュにはあつというまだった。

「リョクリョウ王、もう少しだけ、よいだろうか」

「ああ、かまわぬが……姫は下がらせてもよいか？」

「ええ。ただ姫にも一言、お伝えしたいことが」

「姫に？」

わたしになんだろう、とヒョウジュが顔を上げたとき、それは二度めの拝顔だったわけだが、視線が合った青年はやはり微笑んでいた。

「案ずることはない」

「え……？」

「それだけだ」

なんのことか、さっぱりだ。だが、それ以上の言葉はないようで、

怪訝に思いながらもヒョウジュはその場を辞す許しを得て、父王を残して部屋を出た。廊下に控えて待っていてくれた侍女と、滞在している部屋まで戻る。

青年、皇帝となる皇太子の言葉は、その道中ずっと考えていたが、やはり答えは見つからなかった。

「姫さま？」

「……なんだったのかしら」

「はい？」

「不思議なお方だわ」

「……失礼ですが、皇太子のことですか？」

ええ、と頷いて、部屋に入るとすぐに長椅子に腰かけた。

「とても空気が澄んでいたの……驚いた。聖国は、やはり聖国と呼ばれるだけのことがあるのね」

あの皇太子が聖国の育んだ皇帝なら、心配されるリョクリョウ国の害獣被害は減るかもしれない。歪み狂った聖国の天恵も、修繕されるのではないだろうか。

父王や兄王子たちの気苦労も、きっと救われる。

「姫さまにそれだけのことを言わせるのなら……きっと賢帝になられますね」

「私の言葉はそれほど重くないわ」

「ですが、姫さまのお言葉ですもの」

にこりと微笑む侍女に、ヒョウジュは苦笑する。

自分はどこまでも王女なのかと思うと、それは悲しいことだったけれども、侍女を始めとした祖国の者たちの笑顔は、なによりも得

難い喜びだ。

祖国のためにも、ヒヨウジュは聖国に輿入れしなければならないだろう。民を護り、国を背負う立場にあるヒヨウジュにしか、それはできない。

それは、わかっているけれども。

「ねえ、アビ」

「はい？」

「わたしね……」

イザヤと一緒にになりたいのよ、と言いかけて、やめた。

いつもそばにいてくれる侍女も、護ってくれている近衛も、ヒヨウジュがイザヤのところへ行くことをあまりよく思っていない。たぶんそれは、兄王子の気持ちと同じように、イザヤが狩人だからだろう。狩人の寿命は長くない。いつも死と隣り合わせだ。そんな狩人と一緒にいるよりも、大国の妃に収まったほうがいくらか幸せだ。ヒヨウジュの場合はとくに、天恵を使わずに穏やかな生活を得られる可能性がある。

けれども、とヒヨウジュは思う。

どんなに平和でも、天恵を使わずに平穏にいられても、心が傷つかないということはない。

そこがたとえどんな場所でも、心に傷を負わないで済むなんてことはない。

それならヒヨウジュは、イザヤに、傷つけられたい。イザヤの傷を、受け入れたい。

「……ごめんなさい、なんでもないわ。お茶をいただける？」

「？ はい、少々お待ちください」

ねえ、イザヤ。とヒョウジュは心で呼びかける。

ねえイザヤ、わたし、あなたのところに行きたい。国とか、民とか、自分の責任を放棄しても、あなたのところに行きたいと思ってしまふ。今の立場から逃げてしまいたいと思ってしまう。きっとあなたは、許してはくれないことだろうけれど。

「ねえ、イザヤ……わたし、あなたが好きよ」

窓から見上げた青い空は、自分の瞳と同じ色。

空は素直な色を艶やかに広がらせているのに、自分は、嘘をついている。

イザヤを待っていると言ったのに、待っていらなかった。

イザヤと一緒にになりたいのに、ほかの人のところへ嫁ごうとしている。

イザヤに、嘘つき、と言われるのを怖がる自分は、なんて自分勝手な卑怯なのだろう。

「でも……でもね、わたし、あなたが好きなのよ」

誰かに恋をすることが、こんなにも胸を焦がすことだったなんて、知らなかった。

その苦しみを教えてくれたイザヤに、ヒョウジュは感謝する。

あなたを好きになって、よかった。

だからイザヤ、と心で呼びかけたとき、侍女がお茶を用意して運んできてくれた。

「ありがとう、アビ」

「いいえ。聖国でも美味しいと有名のお茶をご用意しました」

「そう。ありがとう」

「……、姫さま？」

にこりと侍女に笑いかけて、ヒョウジユは心を押し隠した。

08 : 広がる空は嘘をつく。 3 (後書き)

*一旬 …… 一ヶ月くらいだと思ってくださると嬉しいです。
本当は10日間のことですが)

09 : 広がる空は嘘をつく。 4 (前書き)

時間を少し遡り、ギル視点です。

空を仰いだイザヤが、叫ぶ。

嘘つき、と。

その叫び声は大きくはなく、むしろ小さな悲鳴だ。

嘘つき、嘘つき、嘘つき、嘘つき、と。

幾度も繰り返された言葉は、次第に風に流され消えていく。

誰かに向かつて叫んでいるというよりも、なにか別のものに向かって叫んでいたように、ギルには感じた。

「魔犬ギルギディッツを相手に、本気でやろうとは思わない。ギルギディッツには恩がある。手は出さない。その温情に報いる、狩人」

突きつけられた刃など、今のイザヤには無意味だ。話も聞いていない。

いや、聞いてもらえない。

ヒョウジュという、愛する娘を奪われたイザヤが、平静でいられるわけもないのだ。

「……おまえたちは、またイーサを、利用するだけ利用して、眠らせるんだな」

ギルは、イザヤからヒョウジュを奪った王子を見据え、小さく息をつく。

イザヤの心をわかってくれないのは、二十年前も今も、なに一つ変わらないことらしいとわかると、ただただ悲しい。

「ギル、違うのよ!」

その声を張り上げたのは、王太后ユキイエ。ヒョウジュと目の前の王子の祖母であり、イザヤを異世界で育て、連れてきた初老の婦人。

「なにが違うんだ、ユキ。二十年前も今も、人間はイーサをわかってくれないじゃないか」

あんなに言ったのに、と思う。

言わなければわからないこともあるんだよ、と教えられたから、だから言い続けてきたのに、やはり誰もわかるうとしてくれないではないか。

イザヤは、イザヨイと呼ばれていた時代も、強くて弱い人間だった。イザヨイのときにはユキイエがそれをわかってくれた。イザヤである今は、ヒョウジュがそれをわかってくれていた。

それなのに、と思う。

「……ひどいよ、ユキ」

なぜ裏切るのだ。

「イーサは、ユキが好きで……ひよを好きになつたのに」

イザヨイだった頃は、ユキイエに恋慕していた。今のイザヤがヒョウジュに向けているそれよりも淡いものではあったが、恋い慕っ

ていた。歳の差なんて関係ない。身分なんて関係ない。優しさと愛を与えてくれた人を、ただただ好いた。ただただ、愛した。だから国を護り、民を護り、その命を削って戦い続け、最期にはひとりで眠ったのだ。

神に願ひ祈り、その身に授かった天恵を差し出してまでも眠りから目覚めさせ、異世界でイザヤを育て、この世界に連れて戻したのは、なんの意味があつたのだろう。

「なあユキ、なにが望みだ？　なにがしたいんだ？　イーサをどうしたいんだ？」

「……わたくしはイザヤを幸せにしたいだけよ」

「じゃあなんで……イーサからひよを奪ったんだ」

知っていただろうに。

イザヤの反応は素直だ。隠しようもないくらい、素直だ。ヒヨウジユに一目惚れして、気づくとどうしようもないくらい惚れていて彼女のために国を護ると決意したイザヤのその姿は、誰が見てもわかるほど素直な反応だったはずだ。

「ヒヨウジユは王女だ。たとえその狩人が、イザヨイの魂を持っていようが、ヒヨウジユとは比べものにもならない」

「アオツキ！」

「王太后さま、今は、時代が違ふのですよ」

「今のわが国があるのは、イザヨイの功績があつてのことよ。イザヨイがいなければ、わが国は滅んでいたわ」

「イザヨイのその功績は認めます。ですが、その狩人は魂を持っているというだけのこと。今はイザヤという、ただの狩人に過ぎません。リツエツが後見人であろうと、狩人は狩人。貴族でもなんでもない」

王子の言葉は、イザヤを想うユキイエの心を両断し、自身も握った剣を光らせる。

ギルは再び、ため息をついた。

二十年前にも、こんな光景を見た気がする。また同じことが繰り返されるのかと思うと、もうこの国を見限ってもいいのではないかと自棄を起こしそうだ。

イザヤを見れば、空を仰いだまま動きもせず、腹部からの出血も放置されたままだ。来てくれたのがユキイエだけであれば、今頃は治療も終わっているはずだったのに、王子が来たせいでこれだ。立ったまま気絶しているのではないだろうか、そう勘違いを起こすくらい、イザヤは立ち尽くして空を仰いでいる。その横顔は伸びた髪に隠されて見えない。

「……イザサ」

もう、行こう。ここにいたって、ヒョウジュには逢えない。突きつけられた刃は王子のものだけでなく、城の兵士のものである。ギルがいることでその剣がイザヤを刺すことはないだろうが、それでも、その剣が為す意味は変わらない。

動かないイザヤの肩を、ぽんと叩いたときだ。

「……ははっ」

小さく、イザヤが笑い声を上げた。

「イザサ……？」

「ギル、戻れ」

「……なに？」

「黒犬に、戻れ」

人型を維持したままだったギルは、イザヤのその言葉に首を傾げつつ、とりあえず言われたとおり黒犬の姿に戻る。持っていた荷物はその反動で地に転がった。

ふらりと、イザヤが動く。

「おまえらの嘘に、おれがつき合う必要はねえんだよな」

そう言つて、にやりを笑った顔を、王子に向けた。その口調と態度に、兵士たちが警戒して剣を構え直したが、イザヤは動じない。王子は不機嫌そうに顔を歪めた。

「きさま……」

「おれ、バカだからさ。そういうの、けっこう簡単に信じるわけ。でもバカだからって、なにも考えてねえわけじゃねえの。面倒だから考えねえってことはあるけど」

「……なにが言いたい」

「ひよはおまえらの人形じゃねえ」

顔つきが変わった。ぎらりと、イザヤは王子を睨みつけた。

「ひよは、おれがもらっ」

そう言つと、地に転がっていた荷物を蹴り、王子の視界を塞ぐ。意図を感じ取ってギルは瞬間的にイザヤに駆け寄り、その重みを確認するとすぐ、空へと高く跳躍した。

「イザヤ！」

「っ追え！ 追って捕獲しろ！ 城から……国から出すな！」

ユキイエの呼ぶ声と、王子の命令している声が下から聞こえる。だがそれらはすぐに、聞こえなくなった。

「ギル、おれ少し休む。できるだけ遠くまで移動してくれ」

「……だいじょうぶか？」

「怪我は大したことねえよ。痛えけど。それより心のほうが、もっと痛えし」

「……そうだな」

城の屋根伝いに跳躍を繰り返し、城壁の上で一旦止まると、イザヤを背負い直すために再び人型を取る。獣の姿であればイザヤが望む以上の速度でここを離れることはできるが、怪我人のイザヤの痩せ我慢もそろそろ限界だ。眠るというよりも気絶に近い状態になるであろうから、支えなければならない。

「ひよからもらった薬、なくなっちまったな……」

「拾ってくるか？」

「いや、いい。あつてもたぶん眠れねえから」

「……ひよ、聖国にいるからな」

「今はとりあえず眠れそうだけだな」

くすくすと笑ったイザヤは、まるでどこかの螺子が緩んだか、外れてしまったかのような。タガが外れた、とも言つのかもしいれない。

「適当にだらだらしてるから、とにかくここを離れてくれ」
「わかった」

イザヤを背負い、ギルは再び跳躍する。ぐつたりと体重をかけてくるイザヤは、自分で自分を支える気すらない、というかできずに、

短い呼吸を繰り返す。

とにかくここを離れて、どこかで身体を休める必要があるだろう。荷物も手放してしまったことだし、それらも新しく調達しなければならぬ。

「ギル……」

「ん？」

「おれ……ひよが好きだ」

「そんなの知ってる」

にべもなく言うと、背中のイザヤは笑った。

「帰ってきたら、言うつもりだった。それで、つき合ってって、言おうと思ったんだ」

「つき合う？ 結婚じゃないのか？」

「結婚の前に、おつき合いってものがあるだろ」

「……おれ犬だし」

人間の事情は、獣のギルには理解できない。そもそも、子孫を残そうという気も起さないギルには、好きだなあと思うだけでそれ以上のことがないために、よくわからない。

「ギルにもいいやつが現われてくれたらいいなあ」

「おれにはイーサとひよがいる。それでいい」

「おれ、おまえの子ども、見てみたいんだけど」

「……おれ、魔だし」

「魔って、子孫残さねえの？」

「さあ？ おれは欲しいとは思わないだけ」

「ふうん……」

背中への重みが、少し増す。完全に力が抜けてきたのだろう。
だいじょうぶか、と訊くと、まだ平気だ、と返事がくる。

「聖国には、どれくらいで行ける？」

「人間の足だと、二旬はかかるな。馬を使えば一旬か……そのくらいだな」

「おまえの足だと？」

「たぶん、一旬はかからない。休みなく移動すれば半旬くらいで行けると思うけど」

「十日くらいか」

「もう少しかかる。イーサを乗せて移動したら、確実に半旬はかかる」

「……ひよに追いつけるかな」

「追いつかなくても、攫えばいいだろ。この前みたいに」

「はは……そうだな」

力なく笑ったイザヤの熱い吐息が、後ろ首を擦る。このままでは本当に危ういかもしれないと、ギルはイザヤを支える腕に力を入れ直し、跳躍する足にも踏ん張りを利かせた。

「ギル……」

「ん」

「ギル……っ」

「……ん」

「ひよに逢いたい……っ」

「わかってる。連れてってやるから、少し我慢しろ」

「ひよ……ひよ……ひいよ……っ」

恋しさあまりにくすぐずと泣き出したイザヤに苦笑しながら、ギルは速度を上げ、宥めながら聖国へと急いだ。

質素かつ荘厳な戴冠式が行われた。

玉座に鎮座するは若き皇帝、サライ・ヴァディード・ヴァリアス。その傍らには《天地の騎士》を従え、彼は堂々たる姿で戴冠した。祝いの席となった夜会では皇帝を賛辞する言葉が絶えず、また彼の玲瓏な容姿を絶賛し、歳頃の娘たちを浮足立たせていた。幾人かの少女は妃候補として後宮入りすることが決まり、またヒョウジュもそのひとりに数えられている。数日の滞在でそれぞれ皇帝と謁見し、その未来を決められるらしい。

そんな、華やかな式典が明けた翌日、リョクリョウ国王を含めた属国の国主たちは、名残惜しさをそれぞれ感じながら帰国の準備を始め、早いところでは昼にはもう出立していた。

リョクリョウ国王ツキヒトは、長居はしないとは言っていたが、もう数日留まるという。父王が滞在している間は後宮入りしなくともよいと許可され、ヒョウジュは気が重いながらも聖国に留まった。しかしながら、滞在している部屋で、ヒョウジュはほとんどひとりだ。言ってしまうと、やることのないためである。父王は皇帝に呼ばれたり、国と繋がりのある商人のところへ行ったり、或いは視察をしたりと、聖国にいられる間にできる政務に忙しい。ヒョウジュもたまに呼ばれるが、それでも部屋でおとなしくしている時間のほうが多かった。

祖国では部屋に幾日も籠もっていたところで苦にはならなかったヒョウジュであるが、異国でも同じというわけにもいかない。頼んで図書館の蔵書を読ませてもらうことができたら、蔵書を片手

に露台に出て読書に耽ることもあるが、頭を過ぎるのはいつもイヤのことばかりで、せっかくの珍しい書物を無駄にしてばかりだった。

そんな日を三つ過ごし、四日めを迎えた午後のこと。

妃候補となったヒヨウジュは、皇帝と謁見することになった。場所は皇帝が所有する宮廷内の一角、緑を強く感じる庭だ。

緑の強さと、その清浄さにやはり感激したヒヨウジュは、呼ばれた場所に早く来ていたこともあって、用意されたお茶の席を少し離れてゆったりと歩く。

「皇城内に、森……すごいわ」

「さすが聖国ですね」

共に来ていた侍女アビと、もの珍しく見てしまう。

リョクリヨウ国の城では、こんな空間を作ることはいできないし、またそんな贅沢を欲する王族もない。癒しといえればせいぜい、寒さを皮肉っている温室くらいだ。害獣駆除を深刻に考える国で、聖国のような華やかさを求めることはまずできない。

「綺麗だわ…… 同じ大陸の上にある国とは思えないわね」

「わが国にも綺麗な場所はたくさんありますよ」

「……、そうね」

これは聖国独特の美しさ。リョクリヨウ国にだって、綺麗な場所はたくさんある。それを言うアビに、やはりどんな国でも祖国を一番に想うものなのだと、ヒヨウジュはほっと息をつく。

「惑わされて戻れなくなるぞ」

ふとそんな声が、ヒョウジュの歩みを止める。
振り返るとそこには戴冠したばかりの若き皇帝がいて、慌てて礼を取った。

「申し訳ございません。美しさに見とれて、席を離れておりました」
「ああいや、それはかまわない。ただ座って茶を飲むよりも、こうして歩いていたほうが気も休まるだろう」

くすくすと笑った皇帝は、後ろにふたりの騎士と、侍従をひとり連れていた。

その笑い方もそうだが、なんだか全身から優しさやら穏やかさやら、まず皇帝とは思えないものが垂れ流されているように思う。まるでイザヤを落ち着かせたような人だな、と思つて、また自分がイザヤのことしか考えていないことに寂しさを感じた。

「姫は、緑が好きか？」

「え……？」

「おれは好きだ。おれはこの緑に育てられたからな」
「……そう、なのですか」

若き皇帝は、ふわんと笑んで、ヒョウジュがそれまで眺めていた緑を見つめる。森のようになっていて緑の奥は、その先がどうなっているのかが見えない。皇帝にはそれが見えているように感じた。

「緑は、好きか？」

「……はい。わが国は一年を通して寒く、作物はおろか草花も育たない時期もありますから、こうして溢れている姿を見ると安堵いたします」

「そうか……貴国ではもう雪が降っているとか」

「ええ。大地はすでに白くなっていることでしょう。聖国ではそれ

ほど降らないとお聞きしました」

「同じ大陸にあるのに、だいぶ違うな。世界は不思議だ」

ふっと、皇帝は歩き出す。

戴冠式のときもそうだったが、真っ白な衣装はリヨクリヨウ国を覆う雪のようで、柔らかく風に揺れる淡い金の髪はまるで雪に反射した太陽のようだ。綺麗だなと、素直に思う。

だからだろうか。

聖国に嫁ぐのはいやだと思うのに、この皇帝との会話はいやではない。皇帝が持つ雰囲気はヒョウジュにそう思わせているなら、兄王子の判断は間違いではないのかもしれない。

けれども、と思う。

彼はイザヤに似ているけれども、イザヤではない。家族になりた
いだなんて思わない。

やはりわたしはイザヤがいい。

そう思いながら、ゆったりと歩く皇帝の後ろに続いた。

歩いている間、とくに会話はなない。話しかけられることもなく、ただ緑の中を歩く。

そつえば戴冠した祝いの口上を述べ忘れていたことに気づいた
ときには、用意されていたお茶の席へと戻っていた。

どう述べればいいだろうか、迷ったその一瞬である。

「騒がしいな……」

と、皇帝が席に座ることなく周りを見渡した。同じようにふたりの騎士も、唐突になにかを警戒し始める。

「陛下、廷内へお戻りください」

「……いや、待て」
「ですが」
「待て」

騎士たちの警戒は、しかし皇帝を落ち着かせたまま、動かさない。ヒヨウジュには、皇帝や騎士たちがなにを警戒し始めたのか、わからなかった。

「あの……陛下？」
「……迎えかな」
「え……？」
「ラク、違うか？」

皇帝は、同じように落ち着いている侍従にそう問う。なんのことが、ヒヨウジュにはさっぱりだ。

「派手な登場ですねえ。まあ、気持ちはわからなくもないですが」
「すごいな」
「こついつのを、無謀と言っただけでしょうね」
「そうだな。そういうことだから……ユート、目を瞑ってくれ」

ヒヨウジュにはわからない会話が、皇帝と侍従、そして騎士たちの間で交わされる。

彼らを感じているものがわからなかったヒヨウジュは、だがアビと身を寄せ合って様子を窺っているうちに、その音に気づいた。僅かにだが、騒がしい気がする。

「なに……？」

この騒がしさはなんだろう。なにが起きているというのだろう。

彼らはなにを警戒し、そしてなにを寛大に見守っているのだろう。
怪訝に思いつつ、なにか情報はないのかと周りを見渡した、その
ときだ。

「ひよ！」

「……、え？」

幻聴が聞こえた。

自分と呼ぶ、イザヤの声を聞いた気がした。

「やはり、こちらの姫の迎えだな」

皇帝がヒヨウジュを振り返り、くすりと笑う。

「迎え、とは……？」

「おれは、案ずるな、と言ったはずだぞ」

それは確かに聞いている。けっきょく意味がわからないままだった
言葉だが、今も、その意味はよくわからない。

ただ、今この事態は、どうやらヒヨウジュが原因らしい。迎えと
いうのは、ヒヨウジュを迎えに来たということだ。

それなら、幻聴だと思ったあの声は、現実。

ハッとヒヨウジュは目を見開いた。

「イザヤ……っ？」

来て、くれた？

ここに？

本当に？

「案ずるな。おれは妃など欲していない。娶るつもりすらない。今も、これから。だから姫は、自由だ」

「……陛下」

そういう意味の、案ずるな、という言葉だったのか。

「宰相たちに気圧されて、やむなく後宮は開けているが……そもそも父上の側妃を捌くまで、後宮は開けているしかないんだ。それだけのことなのに、ほかの貴族たちは勘違いしたいらしくてな。おれが妃を求めていると、勝手に思い込み続けているわけだ」

「……それは、もしか、わが父も……？」

「いや、リヨクリヨウ王は真摯に、姫を妃にと進言してきた。おれのところなら姫は幸せになれる、と。だが、その日のうちに断らせてもらった。悪いがおれは、おれがここにいる限り、姫を幸せになどできないからな」

皇帝のその言葉に、すとん、となにかが落ちる。

それが自分の安堵だと気づいたのは、喧騒が近くまで迫ったときだった。

「ひいよー！」

今度は素直に受け入れることができた声を聞いて、ヒョウジュは込み上げてくるものに空色の双眸を潤ませた。

「イザヤ……っ」

その姿を捜して、視線を彷徨わせる。

どっ、どっ、どっ、と。

逸る心臓を持て余しながら、その姿を捜す。

そうして。

「ひいよ！」

庭へ下りられる廊下から、恋しくてならない人が、姿を現わした。

「イザヤ！」

呼ぶと、彼はヒヨウジュに気づく。

視線が絡んだ瞬間、ヒヨウジュの目許は涙で溢れた。

来てくれるとは思わなかった。

こうしてまた逢えるとは思っていなかった。

約束を破ったことを罵るのではなく、ひよと、そう呼んでくれるとは思わなかった。

「ひよ……」

やはりどうしても怪我をしてしまうイザヤは、最後に逢ったときよりも傷が増え、腕や腹部だけでなく、その頬にも血を滲ませていた。だがその血も、ヒヨウジュを捜し当てて睜目した瞳から流れた涙に、さらに滲んで流れ落ちる。

立ち止まったイザヤが、くしゃりと、顔を歪めた。

「ひよ…っ…ひいよ」

両腕を伸ばし、駆け寄ってくるイザヤに、ヒヨウジュも腕を伸ば

して駆け寄る。

ぶつかるとして、抱き合った。
とたんに包まれたイザヤの匂いと、血の匂い、そして恋しさに、
くらりと眩暈がする。

「イザヤ……っ」

「ひよ、ひよ、ひよ……ひいよ」

ぎゅうぎゅうと、力強く抱きしめられて、ヒョウジュはその安堵
に吐く息を震わせた。

11 : 偽りだらけの世界のなかで。 2

「再会に水を差すようで悪いんですけど……ちょっといいですかあ？」

そんな声にハツとしたとき、ヒヨウジュはこの場がどこであったかを思い出し、慌ててイザヤの胸から顔を上げた。

「あの、すみませ」

「誰だ、てめえ」

「イザヤっ」

声をかけてきたのは、皇帝の隣に冷静な顔で控えていた侍従だ。イザヤが牙を向けようとしたのを、ヒヨウジュは慌てて宥める。

「だいじょうぶ、だいじょうぶよ、イザヤ」

「ひよ……でも」

「だいじょうぶ」

流れている涙を拭ってやりながら、だいじょうぶ、と繰り返す。涙腺が壊れてしまったのか、イザヤの涙はそれでも止まらなくて、ぼろぼろと流れ続けた。

「なんか、あてられますねえ」

肩を竦める侍従が、人好きする笑みでにこにこ話しかけてくる。それはイザヤを警戒させたけれども、腰にある双剣を抜かせることはなかった。

だから。

「逃げますよ、おふたりさん」

そう告げた侍従に、ヒョウジユもイザヤも目を丸くした。

「え？」

「いえ、こっちの都合なんですけどね。もうちょっと静かに登場してくれたらよかったですけど、ここまで派手にされては事態の收拾が面倒ですから、隠れてもらいます」

侍従は、はらはらと見守っていた侍女アビのこともそばに寄せると、皇帝を振り返ってにこりと笑う。

「じゃ、先に行きますよ」

「ああ」

軽い挨拶が交わされたと思った、次の瞬間。

ふわりと身体が浮いた。

それに驚いてイザヤにしがみつくと、イザヤもヒョウジユを強く抱き締めてくる。

なにが起こったのだ、と思ったときには、それはもう終わっていた。

浮遊感が消えたと思ってイザヤの胸から顔を上げたら、見知らぬ部屋にいたからだ。

「さすがに三人も運ぶと、座標が少しずれますねえ……ふむふむ」

その呟きは、もちろん侍従からこぼれた言葉だ。

「……あの？」

「ん？ ああ、いきなりすみません。おれの天恵で、移動させてもらいました。走っていたら間に合いませんし」

「天恵……？」

「空間移動の天恵ですよ。無属性ですから、見たことないと思いますけど」

聞いたことのない天恵だ。それでも、確かにその力は働いて、あの庭から見知らぬ部屋に一瞬にして移動しているのだから、その天恵は存在する。ヒョウジユの天恵も珍しい部類に入ることを考えれば、侍従の天恵だってあってもおかしくはない。

「さて、先に彼の手当てをしましょうか。だいぶ無茶をしているようですし」

そうだった、とヒョウジユはパツとイザヤから離れようとして、しかしイザヤが放してくれず、その胸に逆戻りしてしまう。

「イザヤ……っ」

「あ……ごめん。腕、動かねえ」

「え？」

「だって……ひよが、いるから」

イザヤは己れの身体に起きた現象に戸惑いながら、震えている両腕をどうにかしようと動いた。だがそれはヒョウジユも一緒に揺さぶることになって、けっきょくヒョウジユを抱きしめた腕は解けな

かった。

イザヤのそれを見ていた侍従が、あはは、と笑う。

「身体は素直ですねえ」

だいぶ緊張感のない笑い声に、警戒を露わにしていたイザヤも呆気にとられたのか、途方に暮れた顔をした。

「……笑いごとじゃねえんだけど」

「心配しないでいいですよ。ここは関知されない場所です。おふたりのことは、サリヴァンが責任を持ってお護りしますから」

「は？ 護る？ なんて？ おれ、ひよを攫いに来たんだけど」

ヒョウジュはイザヤの言葉にぎょつとした。まさか、迎えに来たと言っているのではなく、攫いに来たと言っているとは思わなかったのだ。

「おやおや、ヒョウジュ王女殿下を攫いに来たなら、ますます護る必要がありますねえ」

「はあ？ なんて？」

「王女殿下にはお伝えしたんですけどね、うちの皇帝陛下、お妃さまを娶るつもりはないんですよ。おれとしてはお嫁さんくらい欲しいなあと思うんですけど、なにぶん今は身体的にも精神的にも忙しいもので、今すぐ欲しいとは思っていません。なので、王女殿下を含めた候補の方々は、近日中にご実家へお返しする予定なんです」

「え……じゃあ」

「はい。王女殿下は、わが国のお客人です」

それは本当か、と侍従に確認したあと、イザヤはヒョウジュにも本当かとその瞳と揺らしながら訊いてくる。皇帝からその言葉を直接聞いていたヒョウジュは、ふつと微笑んで頷いた。

「ひよ……っ」

感極まったらしいイザヤに再度抱きしめられて、ヒョウジュの微笑みも深まる。

ほっと安堵したのと、イザヤがここにいてくれている現実と、それらを言葉にできない喜びに胸が詰まって、止まりかけていた涙が一筋頬を伝った。

「よかった……よかった、ひよ。ひいよ」

「イザヤ……」

「おれ、ばかだから、いつつも逃げて……ひよに、本当に逃げられたのかと思った」

「……本当、ばかね。わたしは一緒にいたいって、言っただけよ」

「うん、うん……ひいよ」

ぎゅうぎゅうと抱きしめられて、それは少し苦しいくらい強い抱擁であつたけれども、これまでの悲しさや寂しさを考えれば、この苦しさは心地よかった。

「よし、じゃあ手当てしますか。どうやったらそれだけ傷を作れるのか、不思議ですよ」

ぱんぱん、と両手を叩いた侍従にたびたびの喜びは中断されるも、確かにまずはイザヤの怪我だ。黒い服はいたるところに血を滲ませているし、ボロボロであるし、頬の傷はまだ血も止まっていない。腕にいたってはぐっしよりして、ヒョウジュの衣装を赤く染めているほどだ。

「アビ、ごめんなさい。許してくれる？」

咽喉もとで手のひらを組ませて見守ってくれていた侍女アビに謝ると、それまでイザヤにあまりいい顔をしていなかったアビが、涙目で幾度も頷く。

「じゃあ侍女さん、隣の部屋にある棚の一番上に道具があるので、お願いしていいですか？ おれは医師を呼んできますから」

「棚の一番上ですね」

「とりあえず止血すればいいと思います。腕、ちょっと危なそうですし」

「わかりました」

侍従に頼まれたアビは、一目散に隣室へと走っていく。侍従はそれを見送ってから、医師を呼んできますと、部屋を出て行った。

「イザヤ、とりあえず座りましょう。それからゆっくり、身体の緊張を解いてあげて」

イザヤを促して、どうにか近くの長椅子にふたりで腰かけると、イザヤが部屋を出て行った侍従を追いかけるかのように視線を流した。

「……なんで、護ってくれるんだ？ 医師まで呼ぶって」

「それは……わたしが、客人だから、かしら」

「おれは侵入者だぞ」

「自分で言わないで」

「……ごめん」

「でも、嬉しいわ」

「……ほんと？」

「だって、わたし、イザヤがいいもの」

「え……？」

きよとん、とイザヤが目丸くしたとき、身体の緊張が解れてきたのか、くつついていた身体に距離ができる。それを少し寂しく思いつながら顔を上げ、見つめてくる焦げ茶色の双眸に己れの姿を映した。

「姫さま、お持ちしましたっ」

「……ありがとう、アビ」

言おうと思った言葉はアビが戻ってきたことで遮られてしまったが、言う前にまずは治療だと自分に言い聞かせ直して、アビに道具を広げてもらう。

止血用の硬い大きな布を受け取ると、まずは腕の傷を見せてもらう。

「……なんてこと」

「あ……ごめん」

腕の傷は、今まで以上に深そうだ。巻かれていたのだろう包帯は真っ赤に染まっていて、包帯の意味すら成していない。

「ギルは……ギルはどうしたの？」

今までイザヤの怪我は最小限で済まされていたのだ、と気づいた。それはギルの存在があったからだろうと、姿を見せないギルのことを問う。

「すげえ疲れさせちゃったんだ……おれ、ひよが聖国に行っちゃって

聞かされたとき、腹に怪我してたから動けなくて、それで、出遅れて……ギルに無理させて、半句でここまで来たから」

一瞬、ギルが害獣かなにかに倒されてしまったのかと冷や冷やしたが、そうではないと知ってホッとする。無理をして疲れているだけなら、聖国のどこかで休んで待っているのだろう。

「ギルはだいじょうぶ？」

「呼べば来る。ここから逃げるときのために、城壁の上に待機させてるから」

「なら、呼んで。わたしとイザヤの無事を、教えてあげて」

「無事なことだけ知らせる。なんかのときのためにも、ギルの存在は知られたくねえし」

まだ逃げるつもりでいるらしいイザヤに少し笑って、古い包帯を取り去り止血し、汚れた血を拭う。剣で斬りつけられたらしい傷はやはり深く、上腕をきつく縛って漸くその流れを止めることができた。

ヒョウジュに治療されている間、イザヤはアビに頼んで窓を開けてもらうと、口笛を吹いた。音階をつけた口笛は音楽のようで、歌のようにも聞こえるそれは、ギルにさまざまな情報を伝える役割を担っているらしい。

「無茶をしたのね」

「だって……ひよが」

「わかってる。ありがとう、イザヤ」

「……ん」

ふんわりと微笑んだイザヤは、そのとき漸く流れっぱなしだった涙を止め、ヒョウジュの手のひらに拭われると猫のように擦り寄っ

てきた。

「こんなに仲がいいのに、なぜリヨクリヨウ王は聖国に姫を連れてきたんだろうな？」

という声は、皇帝のものだ。侍従と、侍従が呼んできたらしい医師だという青年も一緒に、それぞれが苦笑している。

「誰？」

「聖国の皇帝陛下よ」

「じゃあ……ひよが」

「もうその話は終わりよ、イザヤ」

「でも……」

ほんの少しだけ皇帝を警戒したイザヤは、けれども皇帝が医師の青年に声をかけて、強引に治療を始めさせたので、戸惑わせて警戒を薄れさせてしまう。

「国主のサリヴァンだ。そう呼んでくれ」

「サリ、ヴァン？」

「ああ。きみは？」

「……イザヤ」

「……きみがイーサか？」

「え、なんでその渾名……」

「実はリヨクリヨウ国の王太后から、少し前に親書が届いた。王にも伝えておいたぞ」

「王太后……ユキちゃんから？」

サリヴァンと呼べ、と言ってきた皇帝は、懐を探って親書とやらを出す。

「要約すると、わが国の姫には心に決めた人がいる、ゆえにその幸せを願いたい、どうかご協力を、と」

ふっと笑った皇帝サリヴァンは親書を広げて見せて、そのままそれを侍従に渡す。

「おれは王太后に協力することにした」

その楽しそうな言葉には、ヒョウジユもイザヤも呆気にとられてしまう。

ヒョウジユの輿入れは、王太后ユキイエによって上手く、駆け落ち設定にされたらしい。

「だから護るって……ああ、そういうことが」

「きみたちにはいいことだろう？ おれにもいいことだ。妃候補がひとり減ってくれただけでなく、その者は真にいとしく想う者と一緒になる。これほどいいことはない」

そこには打算のようなものが含まれているが、皇帝の言うことも確かだ。悪いことなどなにも一つなく聞こえる。

「でも、おれ……侵入者」

「それは気にするな。城の者たちの警戒心を煽るために、おれが芝居を打ったことにした。場内警備の訓練だな」

「へ……？」

「そばにいた騎士が証言するだろう。陛下と侍従だけは騒ぎの中にありながら冷静だった、と。もちろん王太后の親書の実を知っていたのは、おれとラクだけだからな。事実だ。だから、姫と謁見する今日に来てくれて、本当のところは助かった。どうやって誤魔化す

か、考えあぐねていたからな」

しっかりと、その策は練られていたらしい。今日という偶然が為したこともあるが、僅かな日数でその策を考えただけでもすごいことだとヒョウジュは思う。さすがは賢帝を期待される皇帝だ。

「内密なことになるが、おれは王太后に協力する。親書にある言葉が本物であるとわかったからな。ほとぼりが冷めるまで、ここにいろといい」

「……なんで、協力するんだ」

「言っただろう。これほどいいことはない、と」

「あんた皇サマだろ」

「だから？」

「国のためを考えれば、こんなことって思わないはずがねえ」

信じられない、とイザヤはその言葉をぶつける。悪い意味ではなく、なぜそこまでして考えてくれるのだと、そういう単純な疑問だ。ヒョウジュも、同じようにその疑問がある。

「国にはなに一つ問題が起きていないのに、か？」

「は？」

「きみたちのことで、わがヴァリアス帝国はなにか問題でも起きたか？」

そう問われると、先の言葉を考えれば、出てくる答えは一つだ。

「……起きてねえ、かも」

流され言い包められているだけかもしれないが、問題は起きていないように感じる。

「そういうことだ。国に害をなしたわけでもない者を、なぜ咎める必要がある。そんな無駄なことに割く労力は持ち合わせていない」
「でも、裏を考えりや……国って、国政って、そういうもんがある
だろ？」

「疑り深いな……おれは無駄が嫌いなんだ。それで納得しろ」

「納得しろって、無理だろ、それ。おれとあんた、初対面だぞ」

「それがどうした。おれなんか、外に出てまだ一句も経ってないんだぞ。逢う奴みんな初対面だ。どうしようもないじゃないか」

「……外に出て？ みんな初対面？」

「あー……いや、それはおれの都合だ。気にするな」

なにかを誤魔化した皇帝は、しかしまごついて、侍従のわざとらしい咳払いで助けられた。

「皇帝になるぞ、と推されて、まだ一句しか経っていないんですよ。それなのに今はもう皇帝ですし、先帝の崩御は急なことでしたから」

そうだ。聖国の先帝の崩御は、病に倒れてからすぐであった。それゆえに皇太子の戴冠が急がれ、ヒョウジュにも急な話が舞い込んだのだ。

「まあそういうことだ。王には伝えておくし、なにかあれば知らせる。きみたちのことはおれが責任を持つから、好きにするといい」

「……信じていいのか」

「信じなくてもかまわないが、そうなるとおれはきみたちを護つてやれない。城から出たとたんにきみたちは国の人間に捕まるだろう。それらを含めて、好きにするといい。ほとぼりが冷めるまで滞在するなら、それなりに面倒は看る」

どちらがいいかと訊かれたら、ヒョウジュは迷わずイザヤと一緒にいられる未来を選ぶ。だから、皇帝の提案には縦に頷いた。だがイザヤは、皇帝の言葉を最後まで信用し切れないらしい。

「本当に、おれとひよを護るのか」

「……これだけおれの本心を曝したんだから、もういいだろ」

しつこいくらい疑うイザヤに、皇帝は苦笑をこぼして背を向けると、扉のほうへと歩いて行く。その後ろ姿を、イザヤが呼びとめた。

「最後に一つ」

「……なんだ？」

「国と国が……戦争、なんてことには」

自分の行動がどれくらいのものであるか、イザヤはわかっていたのだろう。その不安と心配を抱えていたのだろう。それゆえに、しつこいくらいに疑っていたのかもしれない。

「きみたちの出方によっては、起きるかもしれないな」

「え……」

「おれの面目が潰される。つまり、聖国を踏み潰すということになる。生憎だが、そうされてしまったら最後、おれはわが国の者たちを抑えることなどできないぞ」

皇帝にそう言われては、さすがのイザヤも疑い続けるわけにはいかなかったようで、ふっと息をついて肩を竦めた。

「ほとぼりが冷めるまで、ここに隠れてていい？」

にっこり笑ったイザヤに、皇帝はやはり苦笑しただけだ。

「もう派手に動くなよ」

そう言つて、皇帝は部屋を出て行つた。侍従も、あはは、と緊張感なく笑つてから、「じゃあまたあとで」と皇帝を追いかけて部屋を出て行つた。

ヒョウジユはほつと息をつくつと、同じようにほつと息をついているイザヤを見つめて、微笑んだ。

12 : 偽りだらけの世界のなかで 3 (前書き)

* R 指定っぽい……かもしれませんが、ご注意ください。

イザヤ視点です。

12 : 偽りだらけの世界のなかで 3

ヒョウジュの隣で眠っていたけれども、どうしても腕の痛みが引かなくて、それで起きた。

ぐるぐると包帯に巻かれている腕は、見たところ血も滲んでいない。気のせいだと思い直してまた眠ってみるけれども、やはりじくじくという痛みで目が覚める。

「……骨にいつてたからな」

ざっくりと剣で斬られた腕は、指を動かせることすら奇跡だと、治療してくれた医師が言っていた。それでも、ちょっとした衝撃を加えると動かなくなるかもしれないから、直ったら指の運動をさせたほうがいいという助言をもらっている。

ヒョウジュに、どうして剣の傷があるの、と訊かれた。

皇城に侵入したとき、出逢い頭に騎士に斬られたと素直に答えたら、ヒョウジュは真っ蒼になって唇を震わせた。

その色っぱさに誘惑されて唇を掠め取ったら、赤くなる前に怒られたけれども。

だから、怪我をしている今だと怒られるから、ヒョウジュが眠ってからこっそり、色っぱい唇を舐めた。ついでに色んなところを舐めて、ひっそりと印をつけてみる。

ヒョウジュの白い肌に、その赤いものは目立った。

満足して眺めていたら、もっと誘惑されて。
胸許の服を引っ張って、肌着をずらして、白い肌をじっと見つめた。

「おいしそう……」

舐めたいし、吸いたいし、触りたいし。
色っぽい顔はもっと見てみたいし。

「……どうしようか」

本気で迷って、しばらく見つめながら考え込む。
とりあえず舐めつつ吸って、印をつけておこうか。触った、ことにはなると思っけれども、そこまでしておこうか。
痛む腕を庇いながら身を屈めて、ぺろりとまるみを舐める。ちゅ
っと口づけて、舐めたところを吸う。

「ん……っ」

ふるりと震えたヒョウジュににんまりと笑って、起きないことに
気をよくして違う場所も舐めて吸った。

数度繰り返して、ふふん、と満足する。
いっぱい印がついた。

「んー……もうちょっと？」

まだ白いところがたくさんある。そう思っともっとたくさん印を
つけたくなるものだ。

「やめろ変態」

と、頭をゴンと叩かれて、挫折した。

「なにすんだ、ギル」

人型のギルが寝台の脇にいて、同じ顔を引き攣らせながら仁王立ちしていた。

「ひよの意識ないじゃないか。なにやってるんだ、イーサ」

「いいだろ、べつに……起きてるときだと舐めさせてくんねえし」

「イーサは怪我人だろ。当たり前だろ」

「ひよはおれのだ」

「だからって眠っているときにやるな」

「ごん、とまた叩かれた。」

「なにすんだ。邪魔すんな。もっと舐めらせろ」

「だからやめろ」

「ごん、と三度めに叩かれたときは、さすがに痛む腕に響いて、声もなく腕を抱えて身を丸めた。」

「痛むくせにひよに手え出すからだ」

「おまえが殴らなけりやいいだけのことだろ、あほ」

「あとでひよに怒られるぞ」

「……、あ」

「は？ 気づかなかったとか言うつもりか？ どれだけバカになったんだ、イーサ？」

すっかり忘れていた。舐めたくて吸いたくて触りたくて、それだけだったから、起きたあとのヒョウジュの反応なんて考えてなかった。

「……怒る、かな」

「怒るだろうな」

「ひよはおれのだ」

「イーサは？」

「おれは……ひよのだよ」

「怒られるしかないな」

「なんでそうなる」

怒られることが確定なんて、どういうことだ。

ヒョウジュはイザヤのもので、イザヤはヒョウジュのものなのに。

「ひよに言うことがあるんだろ。伝えたのか？」

「……まだ」

「言うこと言うてからにしろよ、イーサ」

「う……」

確かに、ギルの言うとおりだ。

ヒョウジュがこの手に、当たり前のようにそばにいたときと同じように、戻って来てくれたから、それが嬉しくてまだ言っていない。

ヒョウジュが好きだ。

という、言葉を。

「はああ……だめだ。ひよのそばなのに眠れなくなっちゃった」
「だろうな」

寝台を離れて、布団をヒョウジュにかけ直すと、とぼとぼと長椅子のほうに移動する。どっさりと転がってから、長くため息をついた。

「せっかくひよが無防備なのに……もつと舐めてえなあ」

「言うこと言ってからにしろ」

「おまえ、獣のくせに、なんで人間の理性に味方するんだよ」

「人間は万年発情期だ。その知識はある」

「身も蓋もないな、おい……」

「違うか？」

そのとおりだよ、顔を引き攣らせつつ、ギルがどこからか持ってきてくれた毛布に身体を埋める。

ヒョウジュがそばにいてくれるなら眠れるけれども、今日はちょっと、もう眠れそうにない。

「腕、痛えなあー……」

ヒョウジュに触れていたら、この痛みも消えるだろうか。

ヒョウジュはいつも痛いところを治してくれる。癒してくれる。

だからどこかが痛むと、ヒョウジュのそばにいれば治った。

今回は、どうしても痛むけれども。

「相変わらず痛そうに見えないんだが……頭はだいじょうぶか？」

「ひよを抱きたくしょうがねえ」

「もう少し殴っておけばよかったか……」

真面目に言うギルに、ははっと笑う。

「殴るなら、気絶させてくれ。痛くて眠れねえんだ」

毛布のぬくみを頼に感じながら、はあ、と息を吐き出す。その熱さに、ギルの言うとおり頭が危なくなってきたかもしれないと思った。こうして理性が働いているうちにヒョウジュのそばを離れていないと、なにをするかわからない。

そんな自分に、イザヤはくすりと笑った。

「なんだ？」

「いや……おれも、男だっただなあと思って」

「……今まで女だったのか」

「いや違いよ」

なにか衝撃を受けたような反応をしてくれたギルに、あほかと突っ込んでおいて、また笑う。

「ひよが、好きだ」

「ああ」

「すごく、好きだ」

「見ていればわかる」

「ひよがおれ以外のものにならなくて、よかった」

「そうだな」

「おれ、ひよの家族になりてえ」

「……おれはイーサとひよがふたり一緒にいる姿が、すごく好きだぞ」

「そこにおまえの家族もいたら、最高だな」

以前なら家族に、夢なんて持たなかった。祖父母がいればそれでよかった。それだけで満足していた。それ以外を望みもしなかった。

けれども、今は違う。

ヒヨウジユが自分以外の誰かのところへ嫁ぐと、聞いたその瞬間に襲われた恐怖。

自分以外の男の腕にいるヒヨウジユを想像して、息が止まった。手足の感覚が薄れた。目の前が、真っ暗になって、真っ白になった。呼吸を思い出してから知ったのは、自分が恐ろしいほどヒヨウジユに囚われているという、想いだった。

今も、それは変わらない。

ヒヨウジユを娶るつもりはないと言ったあの皇帝の言葉を、未だ消化しきれていないのは、狂いそうなほどヒヨウジユをいとしく想う己れを御し切れないからだ。

だから、考える。

どうすればヒヨウジユを、誰にも奪われずに済むのかを。

「なあ、ギル」

「ん？」

いつのまにか黒犬の姿に戻ったギルを、そばに寄せて長椅子にさせる。寄りかかって枕にすると、ふわふわとした黒毛に頬をくすぐられた。

「この世界でも、純潔は重んじられるのか？」

「まあ……たぶんな」

「そうか……なら、いいかな」

「？なにを考えている」

「おまえが怒ることを」

「なんだそれ」

決めた。

そうしよう。

だってヒョウジユは自分のものだ。もう誰にも渡せない。

熱のせいで考えが危うい自覚はあるが、そんな今でなければそれ
もできない。

だから許してもらおう。

ごろりと反対側に転がって、寝台で眠るヒョウジユを見つめる。

「好きだよ、ひよ」

につこりと笑うと、イザヤはふわふわする頭で、ヒョウジユが目
覚めるその時間までしっかりと眺め続けた。

13 : 偽りだらけの世界のなかで 4

朝目覚めて、驚いたのは、隣で眠っているはずのイザヤの姿が消えていたことだった。

「イザヤ……っ？」

慌てて起きて、そうしてヒョウジュの声に気づいたイザヤの、のんびりとした声を聞く。

「なにい？」

その間延びした声はあまりにものんびりとしていて、見ると長椅子で毛布に包まったイザヤが、にこにこ笑っていた。

「……どうして寝台にいないの」

イザヤがいなくなってしまうたのではないことにほっと安堵したヒョウジュだったけれども、いるのに寝台を離れているのは許しがたい。

イザヤの怪我は、けっこう深刻だ。もしかすると指が動かなくなるかもしれない、医師は真面目な顔で言っていた。どうやら斬られ方が悪かったらしい。すっぱりと綺麗に斬られたのではなく、引つかかるかなにかして決るように斬られていたことで、身体に異常をきたす可能性が高いのだとその医師は説明してくれた。

だから、ふらふらと動ける怪我ではない。高熱が長く続き、起き上がることさえしばらくは難しいだろうと、医師に診断されていた。それなのに、イザヤは寝台を抜け出して、長椅子にいる。

「眠れねえから、起きてた」

「起きてつて……ずっと？」

「うん」

にこ、とイザヤは笑う。笑い続けるイザヤに不気味さを感じたのは、これが初めてだ。

「ここに来て」

「やだ」

「イザヤ」

「腕、痛くて眠れねえもの。そこ、行きたくねえ」

「我儘言わないで」

「やだ」

ふふ、と笑いながら寝台に戻ることを拒絶するイザヤに、仕方ないのでヒョウジュは自分が寝台を離れた。

そばに行こうとしたら、なぜかイザヤに逃げられる。

「動かないで、イザヤ」

「着替えておいで、ひよ」

ずっと、イザヤは後ろを指差す。

扉が叩かれて、アビが朝の挨拶をしながら入ってくるところだった。

意外と頑固なイザヤの説得には、まず自分のことをやってしまっ
てからにしたほうがいいのかもしれない。

仕方ない、とヒョウジュは動いた。

「おはよう、アビ。急いで」

「は、急ぐ？」

「イザヤを捕まえないければならないの」

「はい？ ……、まあ！」

寢台を抜け出しているイザヤに気づいたアビも、まずはなにをしなければならぬか、わかっただろう。捲くし立てるヒョウジュに倣って、素早く朝の支度を整えてくれる。

「姫さま、これ……を……」

顔を洗って髪を整えて、衝立の向こうで寝間着からドレスに袖を通そうとしたところで、アビが真っ赤な顔をして視線を逸らした。どうしたのだろうと首を傾げて、ふと、虫刺されのような発疹があることに気づいた。

「これ……」

なにかしら、と視線を胸許に落とすと、その発疹はたくさんあった。どこまで広がっているのだろうというくらい、たくさんだ。しかし、痛みはないし痒みもない。

着替える手を止めてしばらく考えて、そういえば昨夜、やけにくすぐったい感覚がしたことを思い出し、ハツとなる。

ぼつと頬に、熱が集中する。

「ま……さか」

怪我人だから動けない、というか数日は動くこともままならない

だろうと聞いていたから、その隣で休んだのに。

なにもされないだろうと、思っていたのに。

これまでだってそんなことはなかったから、あり得ないと思っていたのに。

けれども、眠らないで、あんなところで毛布に包まっていたのなら。

この発疹は、唇に吸われて作られたものだ。

「衣装を変えてちょうだい」

「首まで隠れるものをご用意します。少々お待ちください」

肌着を手繰り寄せて、両腕で胸許を隠すと、アビはヒョウジウの意を汲んでくれて素早く別の衣装を用意してくれる。首まですっぽりと隠れるドレスは一着しかないが、仕方ない。

着替えて衝立から出て、のほほんと長椅子に座っているイザヤを恨みがましく睨んだ。

「わたしになにしたの」

「んー？」

「なにしたの」

「ん」

にこ、とイザヤはなにこともなかったかのように笑う。

いつまでこの笑顔は続くのだろう。熱のせいで、思考回路がおかしくなってしまうのではないだろうか。

拍子抜けさせられるイザヤの笑みに、自分が怒っているのか恥ずかしがっているのか、わからなくなった。

「ひよ、ひよ」

おいでおいで、と手のひらで呼ばれて、素直に応じるのは少し癢に障ったけれども、イザヤのこの笑顔を前に怒っているだけ無駄だとヒョウジュは覚る。

はあ、とため息をつくとき、イザヤの隣に腰かけた。

そのとたんに、イザヤはヒョウジュのほうに身体を倒してきて、膝を枕にすると長椅子の上で丸くなった。

「……眠るの？」

「うん」

「なら寝台に」

「やだ」

「イザヤ……」

「ここがいい。ここがいい」

やはりどうしても寝台では眠ってくれないイザヤに、ヒョウジュは苦笑をこぼした。

イザヤの額に手のひらを当て、その体温を調べれば、やはりひどい高熱だ。こんな状態でよく起きていられるものだと、逆に感心させられてしまう。アビに冷水は頼みであるが、大量に用意してもらったほうがよさそうだ。

「どうして、こんなに無茶をするの……」

「……ん」

「熱が高いわ」

「ん」

「少しでも眠らないと、楽にならないのよ」

「んん」

「……んもっ、頑固者」

「ふはっ」

「笑いごとではないわ」

「ひよ、可愛い」

「かわ……っ、イザヤ」

怒っても呆れてもふわふわと笑って嬉しそうにするイザヤには、さすがのヒョウジュもお手上げた。寝台に移動してくれないなら、仕方ない、ここで休んでもらうほかないだろう。

ふつと息をつくとき、イザヤの頭を撫でた。

「ねえ、イザヤ。わたしね……あなたのそばにいたいわ」

「……うん、いて」

「ずっと、ずっと一緒にいたい」

「うん……いたらいい」

「イザヤは？ イザヤも、そう思ってくれる？」

「おれもひよと一緒にいたいよ」

本当に、イザヤも同じように思ってくれているのか。

ただただ笑っているイザヤから、その本心を感じることはできない。ましてこんな、熱に浮かされている状態では、それが本音とも言い難い。

それでも、自分と同じように想ってくれている言葉を聞くと、とても安心できた。

だから。

イザヤがふと動いて、その柔らかい微笑みが迫ってきても、ヒョウジュは逃げなかった。

「イザ、ヤ……ん」

服の上からでも感じるイザヤの唇が、胸許から首筋を辿って耳朶をくすぐる。ぎゅっと抱き込まれると、ただもうほっとして、自分からすり寄った。

なんで涙が出そうになっているのだろうと思ったとき、感じていたぬくもりが唐突に去った。

「怪我人が姫さまになにをしているっ！」

出ていたアビが、イザヤを引っ張って、その行動を諫めようとしていた。

「ああ……なにするんだよ、アビ」

「あんた、怪我人でしょう！」

「おれはひよに触りたいんだよ」

「自分の状態をまず把握なさい！」

「ひよに触りたい」

「そうじゃないでしょうっ！　んもっ！」

アビのそれはヒョウジュが呆氣に取られるほどで、ヒョウジュから引き剥がされたイザヤは長椅子を転がり落ちて不満そうにしていた。

しかし、アビに叱られても、それでもめげないのがイザヤである。長椅子をよじ登ってくると再度ヒョウジュの膝を枕にして、両腕でヒョウジュにしがみついてぴったりとくっつく。と今度こそ顔を閉じ、動かなくなった。

「油断も隙もあつたものじゃない……昨夜はギルさまが諫められていたからよかつたものの」

「え？」

「ああいえ、こちらの話です。さあ姫さま、朝食ですよ。昨日お世話いただいたお方はラクウィルどのと言つて、皇帝陛下の侍従長だそうです。その侍従長どのが、滞在期間中は責任を持ちますと、いろいろと整えてくださつたんですよ」

アビは手際よく、動かなくなったイザヤをよしとして、朝食の準備をしてくれる。アビを手伝うのは見覚えのない女官で、彼女たちは侍従長だという人が寄こしてくれたらしい。

そこで気になったのは、父王のことだ。

「アビ、父上はどうしているかしら」

「侍従長どのお話ですと、とりあえず皇帝陛下のお言葉を待つておられるとか。姫さまにお逢いしたいと願ひ出てはいるようですが」
「そう……そうよね」

これからどうなるのだろう。

今さらだが、ヒョウジュは少しだけ不安になる。もちろんイザヤと離れるつもりなど二度とないが、このままでいられるわけがないというのは、よくわかつている。

国に帰るにしても、ヒョウジュはもう、王女ではいられない。いや、王女でいたくない。

「……アビ」

「はい？」

「ごめんなさい」

「……なにを謝られておいでなのですか？」

「わたし……イザヤと一緒にいるわ」

離れるつもりは、別々に生きるつもりはないと、そう伝えるときよんとしていたアビも神妙な顔つきになる。

「わたしは、姫さまについて行きます。それだけです。ですから、気になさらないでください」

「アビ……」

「正直、わたしはこの方が……イザヤさまが気に入りません。ただそれは、その態度が煮え切らないからです。姫さまを想う気持ちが本物であることはわかっています。だから、それでいいんです。無茶ばかりして姫さまを心配させるこの方を、わたしは敵視しなければならいだけですから」

初めて聞くアビのふとした本音は、今までイザヤに対して取っていた行動の理由だ。そんなふうに自分を想ってくれていたとは知らず、ヒョウジュは苦笑した。

「許してくれていたのね、アビ」

「わたしは姫さま至上主義ですから」

ふふ、と笑うアビに、ほっとする。

イザヤとのことは反対されてばかりで、誰もいい顔をしなかったけれども、いつも身近で世話をしてくれているアビが認めてくれたのは、思った以上に嬉しいことだ。

「ありがとう、アビ」

「どういたしまして。さあ姫さま、食べてしまいましょ。そのぐうたら狩人の治療は、姫さまがやらなければなりませんからね」

下からイザヤの、誰がぐうたら狩人だ、という声がして、ヒョウジュはアビと笑った。

それから朝食を摂ったあとは、なぜかそのときになって動き始めて逃げ回ったイザヤをアビと捕まえ、様子を見に来てくれた昨日の医師に手伝ってもらって怪我の状態を確認すると、服用したほうがいいという薬をもらった。頑として薬は飲もうとしなかったイザヤだが、さすがに逃げ回って疲れたのか、やはり寝台には移動しなかったが長椅子で丸くなり、おとなしくしていた。

眠ったのはヒョウジュが部屋にひとり残ってからのことで、人目を掻い潜ってギルが姿を見せたときだ。

「久しぶり、ひよ」

「ええ。とても疲れていたそうだけれど、もう？」

「平気だ。もともと造りが人間と違うからな。ちょっと疲れただけで、動けないほどじゃなかったんだ。それより……ひよ、なにもなかったか？」

「わたしはだいじょうぶ。ただイザヤの怪我が……けっこうひどいの」

柔らかいギルの黒毛を撫でながら、寝苦しくないのかと思う恰好で眠っているイザヤを見つめる。包まった毛布に顔は埋まって見えないが、ちらりと見える額には汗が滲んでいた。

「痩せ我慢も限界だな……ひよ、イーサが起きたら、腹も見ろ。たぶん治ってないから」

「腹？ そういえば……」

「いい腕の医師だ。言えばわかるだろ。ついでだから、治してやつてくれ」

「わかったわ。でも、だいじょうぶかしら」

「今まで動いてたんだろ？　なら平気だ。ただもう痩せ我慢はできないだろうから、できるだけ鎮痛薬とか、そういう薬は飲ませたほうがいい。苦しむイーサなんて、見たくないだろ」

笑顔を見続けられるのはいいが、それが痛みを我慢しているうえでのものなら、つらいものだ。

神妙に頷くと、ギルのそばを離れ、冷やした濡れ布を絞ってイザヤの額にある汗を拭う。数度繰り返しても、その熱が引けることはない。

「ひよ、おれは近くにいます。なにかあったら名を呼んでくれ」

「一緒にいてくれないの？」

「まだ油断できないから」

イザヤはまだ逃げる算段でいるが、どうやらそれはギルも同じらしい。どうにかそういう手段を取らずに無事帰国したいものだと思いつながら、ヒョウジュは露台から出て行ったギルを見送った。

「……ギル、来た？」

毛布から顔を覗かせたイザヤが、眠そうなというよりも具合の悪そうな顔をしながら、起きていた。

「来たのはギルよ。だいじょうぶ。もう少し眠って」

「ん……ひいよ」

ぼんぼん、と長椅子を叩くので、ふっと微笑んで座ると膝にイザヤの頭が乗る。

「疲れた」

「でしょうね。あれだけ逃げ回るのも。カリストル医師が驚いて呆れていたわ」

「男に触られたくねえもの」

「怪我を診てくれた医師よ。我儘言わないで」

「ん……」

ゆっくりと頭を撫でれば、瞼を閉じてくれたイザヤの、少し乱れた呼吸が伝わってくる。

早くよくなって、と祈りながら、まもなくして眠り始めたイザヤを、ヒヨウジュは撫で続けた。

14 : 偽りだらけの世界のなかで 5 (前書き)

イザヤ視点です。

14 : 偽りだらけの世界のなかで 5

『世界は嘘だらけなんだよ。真実なんて、どこにあるかわからない。だから、すべてを信じる必要はないんだ』

誰かの言葉に、イザヤは耳を傾ける。閉じていた瞼をゆつくりと開けば、目の前にほんわかと微笑んだ青年がいた。

『それならなにを信じればよかった？ 簡単だよ。自分が決めたことは、信じないと。信念だね。こうと決めたら、それを貫く。たまに挫けるけど、それはそれで、人生だからね。気長に考えたらいい』

青年は微笑みながら、足許に絡みついてくる子どもたちに話して聞かせ、強請れて一緒に遊んで笑って、また語りかける。ときには伝説を聞かせ、その真似ごとを身ぶり手ぶりでやって見せ、子どもたちを笑わせていた。

温かな光景だなあと、イザヤは眺めていた。
それで気づいた。

これは、夢だ。

自分は眠って、夢を見ている。なんの夢かはわからない。目覚めたら忘れてしまいそうな、そんな夢だ。

『またおれと一緒に遊んでくれる？ そう、ありがとう。またね』

太陽が傾き、闇色に空が染まってくると、青年は遊んでいた子どもたちを帰し、全員の姿が見えなくなるまでばいばいと手を振り続けていた。

すたん、と手のひらが落ちたとき、場面が変わる。

青年の手には、片刃の双剣が握られていた。その瞳は、穏やかに微笑んでいたものから一変し、険しく、そして悲しそうに、それらを見つめていた。

『なんてことを……世界の調和を、たったひとりの人間が崩すなんて』

子どもたちと笑い合っていた青年は、真っ赤に燃え上がる平原を見据え、今にも泣き出しそうなほど顔を歪める。

よく見ると、青年が見据えているのは害獣の群れだった。

共喰いまで始めたほど数が膨れ上がった害獣に、イザヤは慄く。

なんて数だ、なんて恐ろしさだ、なんて悲しい光景だ。

『穢れが、国を呑み込む……ああ駄目だ、駄目だよ。もう見ていられない。見たくない。見たくないんだよ、こんな世界』

青年は双剣を握り直すと、駆け出して単身で害獣の群れに突っ込んでいく。やめろ、と思わず声を張り上げたけれども、イザヤの声に青年が振り向くことはない。

ああ、これも夢なんだ。

青年を引き留めようとした手は空振り、宙を彷徨う。

イザヤがそうしているうちに、青年は害獣を一体ずつ確実に、恐ろしいほどの強さで倒していく。斬られた害獣から黒い泥のようなものが飛び散り、青年を黒く染めていった。

『こんな……こんな世界だから、嘘と偽りだらけになってしまったんだ』

害獣に囲まれてもなお、青年は怯まない。悲しそうな瞳で害獣を見つめ、剣を握り、操り、倒していく。その腕に迷いはなく、確かな力で害獣を斬り、穢れを浴び、薄蒼の瞳に悲しみを深める。

素直に泣けばいいのに、と思った。

青年は、一帯の害獣をすべて斬り伏せると、がっくりと膝をついて天を仰ぐ。

『おれの世界を、壊さないで』

青年は泣かない。

けれども、その心は泣いていた。

悲しくて、寂しくて、切なくて。

どうすればそれらが消えてなくなるのか、懸命に考えている。

その想いが、伝わってきた。

『偽りだらけの世界のなかで……ユキサマだけが、おれの世界なんだ』

恋しい、いとしい、失いたくない。

笑っていてほしい、笑いかけてほしい、泣かないでほしい。

そんな想いが、イザヤの胸を締めつける。

『奪わないで……っ』

青年は双剣を地面に突き刺し、頂垂れる。

溢れた感情に、イザヤのほうがり泣きたくなった。泣いて楽になりたかった。

けれども。

泣いてもどうにもならないと、わかっていた。

だから青年は泣かない。

イザヤも泣かない。

泣くのは、救いがあったあとでも、できることだ。

『神よ……偉大なる天上の王、聖王よ……疲弊するわがいとしき大地を、いとしき世界を、優しき慈雨のなかに閉じ込めてくれ』

青年は乞う。

温かく、優しく、穏やかな雨を。

それは心が流す涙の代わりなのか、それとも世界の涙なのか。すべてを洗い流す、天上の涙なのか。

『天上の王よ……っ』

青年がいつそう強く、願ったとき。

ぽつり、ぽつりと。

青年の上に、ゆっくりと水滴が落ちた。

15 : ゆめにみた。 1 (前書き)

* R 指定っぽい……ので、ご注意ください。

まともに眠っているイザヤを見るのは初めてだった。声をかけたり、ほんの僅かな物音でもすぐに起きていたから、なにをしても起きないイザヤというのは初めてだ。

「本気で眠っているわ……」

頬を抓つても、近くで会話を交わしていても、イザヤは身動き一つせず、ヒョウジュの膝を枕にして眠り続けている。

額に滲んでいる汗を拭ってやって、それで気づいたことだった。すぴすぴと、可愛らしい寝息が聞こえたから。

「珍しいことなのですか？」

「ええ。わたしのそばでは眠るけれど、熟睡しているわけではないのよ。少しでも音がすると、すぐに目を開けていたわ」

「……珍しいですね」

アビは好奇心な視線でイザヤを眺めたあと、水を取り替えてきますと、部屋を出て行く。

アビを見送ってから、少しだけ痺れてきた膝をどうしようかと考え、しかしイザヤと離れたくなくて、ヒョウジュはじつとその寝顔を見つめ続ける。

苦しそうに見えるのは、高熱のせいだろう。まるで自分を護るかのように身体を丸めているのも、傷が痛むせいに違いない。イザヤ

はいつも傷だらけで怪我だらけだ。痛まない部位のほうが少ないだろう。

穢れに侵されているわけではなさそうだけれども、とヒヨウジユはイザヤの頭を撫でながら、ふと、頬を伝ったものを見た。

「……泣いているの？」

夢でも見ているのだろうか。

悲しい夢を。

怖い夢を。

悪い夢を。

「だいじょうぶ……だいじょうぶよ、イザヤ。わたしがいるわ」

頬を伝った涙をそっと拭った、そのときだった。

「おれのせかいは……」

眩きながら、イザヤが目を開けた。

「イザヤ？」

だいじょうぶかと、その顔を覗き込めば、ぼんやりとヒヨウジユを見つめたイザヤがふんわりと微笑んだ。

「ひよ」

とたんに、胸がきゅっとなる。

切ない想いに、ヒヨウジユも微笑んだ。

「まだ痛い？ 薬、飲む？」

「ひよがいるから、いい」

相変わらずの痩せ我慢には、苦笑がこぼれる。食事に薬を混ぜておいたほうがよさそうだ。

「夢……見てた」

「ゆめ？」

ぴつたりとヒョウジュにくっついてきたイザヤは、ぽつり、ぽつりと、眠りながら見ていた夢のことを聞かせてくれる。大雑把な説明ではあったが、それは確実に、イザヤがイザヨイと呼ばれていた頃の記憶で、現実にあったことだとすぐにわかった。

「黒に近い赤髪って、リョクリヨウ国にはいねえよな……誰だったんだろ」

「黒に近い赤髪の部族なら、もう滅んでしまったわ。コウガ族というの」

「こうがぞく？」

「身体能力の高い部族で、彼らの特徴がそうだった。けれどとても短命な部族で、害獣被害が多かった時代に滅んでしまったの。彼らの能力は重宝されていたけれど、寿命には勝てなくて、害獣の数も多かったから。二十年くらい前のことね」

「ふうん……なんで、そんな奴の夢なんて、見たのかな」

それは、イザヨイがコウガ族であったからだ。コウガ族の、最後の生き残りだったからだ。

コウガ族の混血なら今でも子孫はいるが、純血のコウガ族はイザヨイで最後だった。イザヨイが生きていた時代でも、その特徴的な黒に近い赤髪は珍しがられていたと聞く。またイザヨイ自身、自分

以外のコウガ族を見たことがないと、言っていたらしい。

今リヨクリヨウ国で、イザヨイと同じ部族の純血を見かけることは、なくなっていた。

「おれになにか、訴えたかったのかな……なんもしてやれねえんだけど」

「イザヤに、憶えていてほしかったのかもしれないわね」

「憶える？」

「世界は悲しいことばかりで、偽りだらけ……けれど、それだけではないということ、見つけて欲しいのかもしれないわ」

ヒョウジュが聞いた話では、イザヨイの死に顔は安らかなものだったという。眠るようにして亡くなっていたと、史実にも残されている。

だからきつと、イザヨイは後悔なく、命を削ったのだろう。

だからこうして、イザヤとして転生ができたのだろう。

イザヨイの死は、当時の国には大打撃であっただろうが、無駄なことではないのだ。彼が命をかけたからこそ、国は護られ、王族は護られ、民は護られた。

イザヤに出逢えたことは幸福なことだと、ヒョウジュは思う。

イザヨイがいてくれなかったら国は護られず、またヒョウジュがイザヤに出逢うことも、なかったのだから。

膨らむ想いにほうつと息をつくと、身体を起こしたイザヤが体勢を変え、ヒョウジュに顔を近づけてきた。

「ひよ」

「なあに？」

熱に浮かされて潤んだイザヤの双眸が、じっとヒョウジュを見つ

める。

どうしたのだろうと、思ったその瞬間、ヒョウジュは押しつけられた強さに息を詰め瞠目した。

「んん……っ」

唇を塞がれている。

熱い体温を、唇に感じる。

そう理解したときには、ぬるりと舌が、歯列を割って入ってきた。

「イ、ザヤ……っ」

ボツと頬に熱が集中する。

嬉しいけれども恥ずかしくて、幸せだけでも怖くて、胸がどきどきと煩いくらい跳ね上がった。

その胸を、下から掬い上げられるように揉み込まれる。

「んあむ……っ」

胸を締め上げる衣装ではないせいで、護られていない胸はイザヤの手のひらの感触を直に受けてしまう。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

頭がそう混乱して、手足をバタつかせることもできず、ヒョウジュは小さな悲鳴を上げては唇を吸われた。

「ひ……よ」

絡められ続けていた唇が離れたときには、もうヒョウジュは息も絶え絶えで、なにをされてそうになったのかもわからないほどぼんやりとしてしまっていた。

「ひよ……やわ、ら、かい」

はふ、と微笑んだイザヤが、首筋に顔を埋めてきて耳後ろをくすぐる。びくつと震えて肩を竦めたヒヨウジュだったが、やわやわと胸を弄られているせいで逃げることができず、むしろ徐々に力が抜けていつて動けなかった。

「たべ、たい……ひよ、たべたい。いい？」

「イザ……っ……ヤ」

「これ、たべてい？ やわらかくて、おいしそう。たべたい」

すんすんと鼻を鳴らしたイザヤが、背中に腕を回して衣装の留め具を外そうとする。

そうなつて漸くハツと思考回路が再始動したヒヨウジュは、イザヤがなにをしようとしているのかもやっと理解して、慌ててイザヤの胸を押し返して止めようとした。

「だめ、イザヤ……っ……怪我が」

「たべたい」

「イザヤっ」

今は怪我の治癒を優先して欲しい。触れられて、いやなわけではないのだ。

だからと思って止めようとしているのに、イザヤはどこにそんな力があるのか、ヒヨウジュがもがいてもまったく動かない。そうこうしているうちに、背中の留め具は外され、現われた肩に噛みつかれた。

「イザヤ！」

振り絞ったヒョウジュの声に、漸くイザヤがぴたりと動きを止め、潤んだ瞳でじっと見上げてくる。

こんな状態なのに、好きだと思ってしまっ、イザヤの優しい瞳。自分を欲してくれている、直情な眼差し。くらくると眩暈がした。

「ひどい、怪我なの…っ…熱が、高いの…っ…だからお願い」

ヒョウジュの切な願いに、イザヤはただじっと、見つめてくるだけだ。

その顔が、幸せそうな微笑みに包まれたとき。

「たべさせて」

願いもむなしく、ヒョウジュは再びイザヤに肩を噛まれた。

16 : ゆめにみた。 2 (前書き)

イザヤ視点です。

戸惑うヒョウジュを押さえつけ、泣き叫ぶヒョウジュに己れを穿つ。

こんな顔をさせたいわけじゃない。

こんな悲しくなるようなことをしたいんじゃない。
泣かせたいんじゃない。

そう思うのに、身体がそう動いてくれない。言うことを聞いてくれない。

どうして、どうして、どうして。

苛立ちが募る。

自分を殺したくなる。

そうしているうちに、泣き叫んでいたヒョウジュの瞳から、光りが失われてしまった。

「ひよ……っ」

違うんだ。

こんなこと、したいんじゃない。

もっと幸せを感じられる、そんなことをしたいんだ。

「び、びつくりさせるなよ、イーサ」
「……、へ？」

聞こえたギルの声に、イザヤは幾度か瞬きをする。
真っ暗な視界は、しかし端のほうが明るく、また己れは寝台に横
になっていた。

「……、あれ？」

ヒョウジユを組み敷いて、泣き叫ばせていた気がするのだが。
どう見ても、そんな状況に自分はいない。

「どうした？」

「……ギル？」

「ああ。なんだ、寝ぼけてるのか？」

首を動かし、明るいほうを見ると、人型となっているギルが寝台
に腰かけ、蠟燭の明かりで本を読んでいた。

「……あれ？」

どういうことだろう。

首を傾げたら、自分と同じ顔をしているギルもまた、同じように
首を傾げた。

「なんだよ？」

「え……ええ？ ひよ、ひよは？」

「隣の部屋で眠ってる。イーサが無茶するから、侍女が怒って寝室
を別にしたんだ」

憶えてないのか、と訊かれて、さっきまでのことを鮮明に思い出す。

「お、おれ！」

勢いよく寝台から半身を起こすと、ギルは大きく身体を揺らして驚いていた。

「だ、だから、びつくりさせるなよ！　なんだよ、イーサ！」

「……おれ、ひよを」

「ひよがどうした。押し倒そうとして、侍女に殴られたばかりだろ、イーサ」

「え……？」

「憶えてないのか？」

怪訝そうにしたギルが、事細かに、それを教えてくれる。ヒョウジユを押し倒したのは、一度目を覚ましたときで、しかしそれをアビが殴って止めたとのことだ。

それから三日が経過しているという。

「じゃあ、夢……？」

「は？　夢？」

ヒョウジユに乱暴をして、泣かせていたのは、夢だということだ。ほっと、身体力が抜ける。

「おい、イーサ？」

ぱたりと寝台に倒れ込んで、長く息を吐き出した。

ヒョウジユを泣かせていない。悲しませていない。
よかったと、心から安堵した。

「……イーサ、頭だいじょうぶか？」

「だいじょぶじゃねえ」

熱のせいでいかれている。その自覚がある。さすがにこれは不味
いと、イザヤは頭を抱えた。

「やべえ、おれやべえよ」

「……そう言えるなら、もうだいじょうぶだな」

「だいじょぶじゃねえって！」

ヒョウジユを組み敷いて、無理やり抱こうとした。いや、抱いて
いた。そんな夢を、眠りながら見ていたのだ。
さすがにやばい。

「ん、熱も下がってきたな。そろそろ痩せ我慢もできるだろ」

イザヤの頭を無造作に撫でたギルが、そんな適当な診断を下す。
それを払いのけて、イザヤはギルを睨んだ。

「もう我慢なんかきくかよっ」

「ん。いつものイーサだ」

「はあっ？ 意味わかんねえし！」

「怪我続きで、ちよつとどころかかなり頭おかしかったからな。そ
れだけ元気ならもうだいじょうぶだろ」

「だから、だいじょぶじゃねえって言っただろ！」

勝手に納得しているギルに、いくら「だいじょうぶじゃない」と

言っても、けつきよく聞いてくれなかった。「いつものイーサだ」と、満足そうに頷かれて、意味がわからなくてイザヤが憤慨しても、ギルの態度は変わらない。

怒鳴り過ぎて疲れてきた頃、腹部と腕に激痛が走った。

「いて……てて」

「あ、まだ動かないほうがいいぞ。怪我の治り、ちょっと遅いらしい」

あれから数日が経過しているのに、傷はまだ塞がっていないらしい。かなりひどい傷だったようだし、痛みで眠れそうになかった意識が、強制的に眠らせられていたくらいだ。そう簡単には治らないだろう。

そういえば指の動きが鈍い。

「……ギル」

「うん？」

「指が……」

「……そうか」

すべて言わなくても、ギルにそれは伝わった。

ほっと息をついて、動きの鈍い右手を握ったり開いたりしてみる。左手の動きも鈍くなっているが、これは右手の分の力を使って疲れているだけか、或いは数日も剣を握らずにいるから鈍っているのだろう。

ふと、このまま手が動かなくなれば、狩人で在り続けられなくなるのかもしれない、思った。

そうすれば、このどこから湧いてくるのかわからない激しい憎悪も、消え失せてくれるだろうかと思った。

人間に憎悪を向けている自分に、苦笑がこぼれた。

「どうした」

「ん……いや、こんなに人間が嫌いで、憎いとか思ってるわりに、ひよとか、ばあちゃんとかじいちゃんとか、好きな自分がいて……おかしいなと思って」

「心を許してる人間を、殺したいとか思うのか」

直接的なギルの言葉に、唇が歪む。

いとしい人を殺したいだなんて、思わない。

だのに、人間を憎く思う。

どうしてこんなに人間が嫌いで、憎いのか、イザヤはわからない。

ただ、失望している自覚はある。

だから嫌いで、憎いのかもしれない。

好きでいたいのに。

好きになりたいのに。

ヒヨウジュや、祖父母と慕っているふたりのように、好きでありたいのに。

「おれは、たぶん、壊れてるんだ」

ぎゅっと、拳を握る。力を込めると、傷がある右腕が痛んだ。

「人間を好きでいることに、疲れたのかもしんねえな」

「……おれは、どうしてそこまでイーサが人間を護ろうとするのか、わからない。嫌いなら、護る必要なんてないだろ」

「諦められねえんだ」

「人間を？」

「好きになりたいから」

「……無意味だな」

イザヤの想いを、ギルはあっさりと切って捨てる。それはギルが人間ではなく魔という獣だから、というわけでなく、ギルの性格だ。

「そんなに、頑張る必要はないと思うんだけど」

「頑張る？」

「嫌いなら、嫌い。それでいいだろ。それ以上は、疲れるだけだ」

今、イザヤがそうであるように。

ギルは肩を竦めてそう言つと、イザヤが瞬きをしたその一時の間に、黒犬の姿に戻った。

「ほら、もう少し休め。熱は下がってきたけど、油断できないんだから」

ぐいぐいと巨軀をイザヤに押しつけてきたギルは、寝台の中に潜つてくると、柔らかな黒毛をイザヤに提供してくれる。温かなぬくもりに、イザヤはすり寄った。

「眠れそうにねえんだけど」

「なら、目だけでも閉じておけ。身体を動かすな」

「退屈だ」

「そうでもない。この城には……得体の知らない人間がいる」

「え……？」

「わりと近くに……でも気配が掴めない。ふらふら動いてる」

危険人物がヒョウジュの近くにいる。
そう思うと、ぞわりと全身が慄いた。

「害があるようには思えないけど……注意は必要だ。だから身体を
休めて、いざというときに動けるようにしておけ」
「……ああ」

やはり、ここから逃げたほうがよさそうだ。
眠れなくなったイザヤは、だがその警戒に、身体を休めようとギ
ルの言うとおりに瞼を閉じた。

16 : ゆめにみた。 2 (後書き)

夢才チ……ゴメンナサイ。

朝食の時間、寢室を分けられたイザヤの許を訪れると、彼はすでに起きていた。寢台の端に腰かけて、どこか遠くを見るような双眸でヒョウジユを見る。

その不思議な双眸にヒョウジユは軽く不安を覚えたが、すぐにふんわりといつものように微笑まれて、なんだかわけのわからない感情に胸を締めつけられた。

「ん、おはよ」

「……おはよう。まだ眠っていたほうがいいわ」

「もういいや。ずっと横になってんのも疲れるし、退屈だから」

緩慢とした動作は、やはり高熱が続いていたことと、未だ塞がらない傷の影を引きずっている。油断しないようにと気を引き締めて、ヒョウジユはアビに朝食を運んでくれるよう頼むと、イザヤのそばに歩み寄った。

「どうしても横になるのはいや？」

「やだ。つまんねえもん」

イザヤは、こと寢台で眠ることに関しては、頑固だ。怪我をしたときだけ身体を横にする場所だ、という認識しかないのではないかと、そう思っほかに拒絶する。

眠ることが嫌いなのだろうか。

眠ることはイザヤにとって、恐怖なのだろうか。
戦うことを恐れ、怯えるのと同じくらいに。

ヒョウジュはたまに、そう感じるがあった。

「怖いのか？」

「え？」

「眠るのが、意識を手放すことが、恐ろしいのか？」

問うと、イザヤは珍しく、少しだけ動揺したように瞳を揺らし、唇を震わせながら笑った。

「な、なんの、ことだよ」

あからさまとも言える動揺に、ヒョウジュはそっと息をつく。

「そう……怖いのかね」

どうして今まで気づけなかったのだろう。

戦いに恐れ、怯え、震える手のひらを見てきたのに。

怖いと素直に言うイザヤのそばに、誰よりも長くいたのに。

「なにをそんなに頑張るの」

ヒョウジュは腹部にあった手のひらをぎゅっと握り、イザヤを見つめる。

「なにをそんなに……我慢するの」

「……ひよ、なに言って」

「イザヤはもうひとりではないわ」

真っ直ぐ見つめたイザヤが、大きく目を見開く。

ああ彼は。

彼は、やはり孤独だったのだ。

「わたしにそばにいてとイザヤは言っで、わたしもそばにいてと言ったわ。ずっと一緒にいたいと言ったわ」

「ひよ……」

「ひとりではないのよ、イザヤ」

イザヤの恐れや怯えは、孤独だ。孤独を感じていたから、孤独を感じたなくて、孤独になるまいとして「怖い」と口にし、必死に抗っていたのかもしれない。

どうしてこんな簡単なことに、もっと早く気づかなかったのだろう。

孤独は、ヒョウジュも抱えているものだというのに。

「……ひよ」

ヒョウジュと同じようにじっと見つめてきていたイザヤが、両腕をヒョウジュに伸ばしてきた。

「ひよを、おれにくれるのか？」

その問いかけは不思議で、ヒョウジュは首を傾げた。

「わたしはイザヤのそばにいたいと言ったわ」

「だから。ひよは、ひよをおれにくれるのか？」

どういう意味だろう。

解釈に困ったヒヨウジュだったが、とりあえず頷いて、伸ばされている両腕に誘われて手のひらを添える。ぎゅっと握られた手のひらは、引っ張られることはなかった。

「ひよは、おれのなんだ……？」

「イザヤの？」

会話が噛み合わない。

そう思っているのはヒヨウジュだけだったようで、次の瞬間、いきなり握っていた手のひらを引っ張られてヒヨウジュは前のめりによりめいた。

「イザヤ……っ？」

危うく転びかけたところを、イザヤの胸がしっかりと抱きとめてくれる。しかし、そのままイザヤが寝台に倒れたので、けっきょくその衝撃をヒヨウジュは受けることとなった。幸いにも痛みはどこにも感じなかったが、問題はイザヤの身体である。

「イザヤ！」

イザヤの怪我は腕や腹だけではない。細かいところでは背中や脇、肩にだってある。つまりは全身怪我だらけで、怪我のない部分のほうが少ないのだ。

ヒヨウジュは慌ててイザヤの上から退こうとして、だが胴に絡んだイザヤの腕が離れることはなかった。どうにかこうにかその腕から逃れると、寝息が聞こえてくる。

「…………え？」

見ると、イザヤが眠っていた。
それは珍しくもない光景ではあるのだが、なにかが違う。

「…………イザヤ？」

呼びかけるが、もちろん眠ったイザヤが反応するわけもない。どうやら完全に眠っている。それを見るのはこれで二度めだ。
しかし、なにかが違う。

ヒョウジュは黙してじっと、イザヤの寝顔を見つめ続けた。

どれくらい見続けていたのか、ヒョウジュのその真剣な解析が、小さな声に破られる。

「ひょ…………ひょうじゅ」

情けないほど弱々しく聞こえた声に、ふと顔を上げる。

「…………、父上さま」

数日ぶりの父王が、泣きそうな顔をしながら、呆れたようにため息をついている宰相と並んで、開けられた扉の前にいた。

「そ…………そなたは、もう、その騎士と…………」

「はい？」

「！ は、早過ぎるであらう…………っ」

なんのことだか、さっぱりである。

急に慌て始めた父王にヒョウジュは小首を傾げつつ、そういえば

寝台に座り込んでいたと思い出してそこを降りると、眠っているイザヤに毛布をかぶせる。イザヤの怪我は油断ならないので、足許のほうに避けられている上掛けもかぶせて整えた。

「ヒョウジュ！」

と、大きな声で父王に呼ばれたときは、静かにして、と唇に人差し指を当てた。

「やっと眠ってくれたのです。起こさないでください」

軽く睨むと、それだけで、もともとヒョウジュには甘く弱い父王はぐっと押し黙った。

少しでもなにか喋らせると騒ぎかねない父王を隣室に押しやり、呆れている宰相と並べて座らせると、ヒョウジュもその向かいにある椅子に腰かける。

朝食をいただきながら話をしよう、ということになったので、宰相はともかく、父王の分の朝食も卓には並べられていた。だが、朝食に手を伸ばすのはヒョウジュだけで、父王はぎゅっと握った拳を震わせながら、ヒョウジュからの言葉を待っている状態だった。わが父ながらなんだか情けない、と思ってしまう。

「皇帝陛下から、なにか御達しがありましたか？ それとも、おばあさまからですか？」

そう切りだしたとき、父王はあからさまにびくついた。つまり、皇帝からも祖母からも、なにかしら言葉があったということだろう。

「そうですか。それで父上さまは、なにをおっしゃりにこちらへおいでなされたのでしょうか？」

「ヒョウジュ……父に向かって、それは」

「わたしは申し上げました。お忘れですか？」

父王の言いたいことを切り捨て、ヒョウジュは容赦なく睨みつける。父王は困惑したように顔を歪めたが、少しすると諦めたようにため息をついた。

「あの迷子……いや、狩人とのことは、本気なのか」

「わたしがおばあさまに振り回されているとでも？」

「母上ならやりかねん。おまえを丸め込むことなど、あの人には容易いことだ」

「それは失礼というものです。わたしは自分の目で確かなものを見て、感じて、判断しました。わたしはイザヤと共に在り続けます」

「……ヒヨウジユよ、考え直さぬか」

「いやです」

あんな、心がずたずたに引き裂かれるような想いは、もう二度と味わいたくない。今回のことで、ヒヨウジユはそれを思い知った。ここで父王が諦めてくれないのなら、本気で、一生の願いでもって聖国のあの皇帝陛下に助力を求めようと考えている。

ひとりでひっそりと生きよう、などと思っていた頃が懐かしい。ほんの少し前のことだというのに、今は、どうしてあんなことを考えられたのかがわからない。それくらい、ヒヨウジユの中でイザヤの存在は大きくなっていた。

「それほどまでに、おまえの決意は固いか」

「決意しているわけではありません。考え直すことなどできないだけです」

「ヒヨウジユ……」

わが父ながら、とても情けない顔だ。娘の強気に、どうしようもできなくて途方に暮れている。

少し、おかしい光景だった。

「逆にお訊ねしますが、なぜ父上さまはそれほどまでに、わたしを聖国へ嫁がせようとなさるのですか？ 迷子だったイザヤを保護し、

その後見まで用意してくださったのは、父上さまではありませんか。わたしがイザヤと共に在ることの、なにがいけないのですか？」

矢継ぎ早に訊ねると、父王は困惑顔のまま視線を泳がせ、そうして言葉を搜すように俯いた。

「イザヨイは、余にとって兄であつたのだ」

そんな言葉から始まつた父王の言葉に、ヒョウジュは口を閉じる。

「逢う機会はそれほど多くなかつたが、イザヨイは確かに、余にとって兄だつた。誰にでも優しく、穏やかに微笑み、狩人とは思えぬほど柔らかな人だつた。むろん剣を握らせれば、とたんに人が変わったように強かつた。そんなイザヨイが……余には誇りだつたのだ」

だがな、と父王は続けた。その行に、ヒョウジュは悪いものを感じる。

「イザヨイを快く思わない連中が、少なからずいたのも確かだつた。イザヨイはコウガ族だつたからな。その戦闘力に恐れを抱く者がいたのだ。その者らの手引きで、イザヨイは休む暇すら与えられることなく次から次へと害獣駆除に引つ張り回された。たまに帰つてきたかと思えば怪我だらけ、治り切らぬうちにまたすぐいなくなる。その繰り返しだ」

それは、とヒョウジュは眉間に皺を寄せる。

まるで、今のイザヤのようだ。

「イザヨイさまはおばあさまとおじいさまの義弟でしたのに、どう

して」

仮にも王族のひとり、そういう立場にあるはずのイザヨイがなぜ、とヒョウジュは思う。

「王族の系譜に、イザヨイの名はないのだ」

「え……？」

「イザヨイにあるのは騎士の謚。王族であるとされておらぬ」

「……どうして」

王族の系譜を見たことがあるわけではないが、祖父母が決め、言ったことに嘘はないはずだ。書き記されていないわけがない。

「イザヨイが断つたのだ」

「断つた？」

「自分という存在を見てくれるだけでいい、とな。それほどまでに優しい人だったのだ。コウガ族の生き残りであっても、血統を重んじられれば、出自もわからぬ己れがその立場にあるのは、そもそも似つかわしくないことだ、と」

ふと、思う。

誰もが一樣に、イザヨイは優しかったと言う。穏やかで、剣など似合わない人だったと言う。

それなら、祖父母の申し出を自ら断るのも、当然ではなかるうか。

「イザヨイの優しさに甘んじる、そんな日常が一変したのは、害獣の被害がもつとも多かった二十余年前、王都にまでその被害が及んだときだ。われらはもう国が終わるのだと覚悟した。世界の調和を司る聖国が傾き始めていたのだ、覚悟したのも当然のことだ。だが、イザヨイだけは諦めなかったのだ。その超人的な力で、王都を護り

続けた。休むことなく、眠ることすらなく、ひたすら戦い続けた」

今でも鮮明に思い出すことができる、と父王は言った。あの後ろ姿を、剣を構えた立ち姿を、忘れることなどできやしないと言った。

「余は、イザヨイの隣に並ぶことも、ましてその背を追いかけることもできなかった。王太子だったからな……皆に止められて、拳句閉じ込められた。漸く外に出たときには、すべてが終わったあとだった」

「終わった……というのは」

「ギルギディツツが、その背にイザヨイを乗せて、帰ってきたあのことだ……目覚めぬ人となっていた」

父王の言葉は、まるで懺悔だ。二十年前、王太子であつたからこそなにもできなかったがゆえの、悔しさと悲しさだ。

「だから余は決めたのだ。なににも屈せぬと。けして諦めぬと。そうやって紡いだ日々が、この二十年余りだ。余はイザヨイが犠牲者であつたと思いたくない」

「犠牲者……？」

「あの狩人は確かにイザヨイの魂を持つであろう。だから保護した。イザヨイはわが兄も同然、わが国にとっての恩人だ。しかし、それと聖国との問題は別なのだ」

父王が、それまでの表情を一変させ、ヒョウジュの父としてではなく、一国のあるじとしての顔で、ヒョウジュを見やってきた。

「国を秤にかけることなどできぬ。イザヨイが護り通したわが国を、聖国の揺らぎに潰されるわけにはゆかぬ。そのために、今回の縁談を持ち上げたのだ」

それはつまり、とヒヨウジュは考える。

父王は、ヒヨウジュの気持ちよりも、祖国を想う気持ちを優先させたのだ。きつとそれは、兄王子と同じものだ。

そして、なぜ急にそんなことになったのかといえば、先帝ヴェナートの崩御が世界に轟き、皇太子が戴冠すると決まったからだろう。皮肉にも、皇太子はヒヨウジュとそう歳も変わらない。偶然が重なったというよりも、二十年も前からそういう動きがあつて、計画が練られていたとは思えない。

「余はな、ヒヨウジュ、新たな皇帝を見極めるつもりで聖国へ来たのだ。もしもヴェナートと同じような人間であれば、わが国の滅びを以って弾劾せんと考えている」

父王の決意に、ヒヨウジュはハツとする。

「……戦争を仕掛けるおつもりで？」

「わが国は、これ以上の疲弊にはもう耐えられぬ。聖国を軸としたわが国、この大陸にとって、聖国の歪みは民を徒に苦しめるだけなのだ」

父王の祖国を想う気持ちは、痛いほどわかる。ヒヨウジュも王族の端くれだ。民を護りたいと思う。己れの気持ちと、祖国を秤にかけることは、難しいことだ。これが一国の王である父なら、祖国を秤にかけることなどできるわけがない。

「そのお考えは、今も？」

「変わらぬ。おそらく各国の王の思惟も、余と同じであろう。聖国に並ぶヴェルニカ帝国の出方によっては、世界規模の戦争にもなりえる」

父王の、王たる者の発言に、ヒョウジュは愕然とした。

「それほどまで……」

祖国の未来を、考えようとしていなかったわけではない。王女として、国の象徴たる王族のひとりとして、祖国に貢献できることをいつも考えてきた。

ただそこに、イザヤという、ヒョウジュを「ひよ」と呼ぶ人が現われただけで。

「おまえに無理強いをさせていることはわかっている。それでも、余は王だ。国を護らねばならぬ。戦争が無用のものであつて欲しいのは余とて同じことだ」

「……わたしを、皇帝陛下のそばに置くことで、戦争は回避されるところ？」

「されぬ場合もある。だが、情報は須らく各国へもたらされる」

所詮、自分は道具である。国政のために使われる、有力な駒である。

わかつていたことだった。

わかつているつもりでいた。

そのために生まれ、生かされているとわかっていた。けれども。

わかつていても、痛い。

許されない自由が、恋しい。

「やっぱり裏切るんだな、おまえたちの国は」

ふとそんな声が、露台のほうから聞こえてきて。

振り向いたそこには、イザヤが立っていた。否、イザヤと同じ顔に化ける魔犬ギルギディッツが、静かに立っていた。

「……ギル？」

「イーサが唯一欲したものを、おまえたちは奪う……イーサは強くないのに、どうしてわかってくれないんだろうな。どうしてそんな裏切りが、できるんだろうな」

はあ、と息をついたギルは、開けられた窓に背を預けて、空を見上げる。

「おれはどんなに時間をかけても、イーサをわかってくれないおまえたちを理解することは、できないな」

晴れていた空に、雲がかかったのか、部屋の明るさが落ちる。魔であるギルは身にまとうものまで黒いので、一気に暗闇が押し寄せてきたような錯覚を感じさせた。

「ギル……わたしは」

「いいよ、ひよ」

「え？」

「言わなくていい」

伝えたい言葉があつたのに、ギルにそう言われてしまうと、口を開くのも難しくなってしまう。

「たぶん、人間はそんなもんなんだ。おれは産まれたときからイーサのそばにいて、イーサと一緒にいたから、イーサのことならわかるけど……国とか政とか、よくわからないからな」

なにかを諦めてしまったような、考えることをやめてしまったようなギルの言葉に、ヒョウジュは唇を噛む。言い訳を考えようとしていた自分が、愚かしく情けない。

「ひよは悪くない。いや、なにかが悪いなんてことは、どこにもないんだ。おれが求め過ぎた。それだけのことだ」

ふう、と息をついたギルが、窓から離れてヒョウジュたちに背を向ける。立ち去ろうとしていたギルを呼び止めたのは、父王だった。

「ギルギディッツ……っ」

欄干の上に乗ったギルが、ちらりとその呼び声に振り向く。ひどく冷めた瞳に見えたのは、獣特有の細い瞳孔のせいだろうか。それとも、イザヤを理解しようとしないう人間への、諦めだろうか。

「余は、イザヨイへの恩を忘れてはおらぬ……っ」

「……だから、なんだ？」

「だ、だから……っ」

「裏切つてなどいない、とか……言つつもりか？　はん、ばかばかしい」

鼻で笑ったギルは、灰色の瞳を細め、嘲笑うかのように父王を見下ろす。

「おまえたちはイーサからひよを奪った。これ以上ない裏切りだ。国が滅ぶ？　滅ぶべくして滅ぶのなら、とうの昔に滅んでいる。そんなことにも気づけないのか」

「ほろぶ、べくして……？」

「国を見る。大地を見る。世界を見渡せ。天を仰げ。おまえたちの

脅威とはなんだ」

「……なんだと？」

ギルの言葉は、父王を、そして宰相をひどく動揺させた。それはヒョウジュにもわかる、動揺だ。

「ギル、なにを……」

言っているのか、と訊く前に、ギルは肩を竦めるやいなや、欄干の上から飛び去ってしまった。慌てて追いかけても、魔であるギルの姿を追いかけて見つけることはできず、ヒョウジュは露台から晴れ間の覗く曇り空を見上げる。

「滅ぶべくして滅ぶのなら、とうの昔に……？」

害獣の被害は、二十余年前を境に、増加傾向にある。聖国の歪みが、祖国に影響しているせいだ。だが、逆をいえば祖国は、増加した害獣の被害に二十余年も耐え続けていることになる。

それはつまり、とヒョウジュは視線を父王に戻した。眉間に皺を寄せ、握った拳で口許を覆う父王のその癖は、なにか重要なことを考え込んでいるときのものだ。

おそらく父王も、ヒョウジュと同じことを考えているだろう。

祖国が滅びそうになった二十余年前、イザヨイがいなければ確かに祖国は滅びていた、と。だが祖国は滅びなかった。

ギルの言葉を解釈するなら、二十余年前が、祖国の滅びのときだったのかもしれない。

それなら。

祖国の脅威とは、いったいなにか。
いったいどこに、あるのか。

ヒョウジュはその答えに、父王の反応から、確信を得た。

18 : 大地を踏む。2（後書き）

ゆっくり更新になってしまっておりませんが、どうかこれからも拙作をよろしく願います。

読んでくださり、ありがとうございます。

足早に父王が立ち去った部屋で、ヒョウジュは呆然としながらも考える。

頭はまだ混乱していた。

それでも、確かなことがあった。

祖国の脅威は、ここにはない。

祖国の脅威は、どこにもない。

それだけは確かなのだと、ヒョウジュは思った。

もしかしたら、脅威はすでに去っている可能性もある。

「あれえ？」

ふと、少し間抜けた感じの声が露台から聞こえて、ヒョウジュはびくりと肩を震わせた。

「変な気配がこっちからしたんですけど……間違えましたかねえ」

欄干に、見覚えのある青年が立っていた。思わずヒョウジュは瞠目する。

「陛下の、侍従長……？」

「へ？ あ……王女殿下のお部屋でしたか。これは失礼しました」

欄干から部屋側に降り、露台に立った聖国皇帝の侍従長は、丁寧にその頭を下げてにつこり笑った。

「このようなところから、申し訳ありません。ちょっと不思議な気配を感じたもので、さすがにこう何度も感じますと、確かめたくなくてしまいましたね。追いかけてみたらここに来てしまいました。お許してください」

一瞬、ぎくりとする。ギルの存在は知られていない。それなのに、侍従長はその気配を、それも最初から知っていたような様子だった。なんだか得体の知れない侍従だ。

「王女、ここになにか来ませんでしたか？」

「い、いいえ」

「……そうですか。どうしてそんな気配がここからしたんでしょうね。いえ、今もその気配はあるんですけどね。なんででしょうねえ」

どうしよう、と焦らなくてもいいのに焦ってしまう。このまま、ギルの存在は伏せておいたほうがいいのか、それとも知られてしまっているのだろうか黙っていたほうがいいのか、わからない。イザヤは逃げるための手段に、ギルの存在を隠しているのだ。

「王女殿下、そういうの、なにかご存知ありませんか？」

侍従長は笑みを崩すことなく、ヒョウジュになんらかの答えを迫ってくる。

「お答え、できかねます……わたくしには、わかりかねますゆえ」「へえ……なるほど。そういう答え方もありますね。上手いです」

両手を叩いた侍従長は、まるで遊んでいるかのような態度だった。すべて見透かしているようですらある。

この人は、本当に侍従なのだろうか。

「しかしですね」

と、侍従長が唐突に、笑みを深めた。

「隠しごとはいけませんよ、王女殿下」

ハッとしたときにはすでに遅く、ヒョウジュは唇を噛んだ。

「サリヴァンは言いましたよね。派手なことはするな、と。釘を刺したはずなのに、あなた方はなにをなさろうとしているのでしょうか？」

「……なにも」

「してませんか？ ならいいんですけどね。ただ、どんな目的があるのか、それくらいは教えて欲しいですね」

もしかすると、すべて、わかっているのではないだろうか。

この侍従長も、聖国の皇帝陛下も、なぜヒョウジュがここに来たのか、なぜ妃候補として連れて来られたのか、各国の王の思惑すらすべて承知しているのではなからうか。

侍従とは思えない侍従長の深い笑みに、ヒョウジュは息を飲む。

「……わたしに目的などありません。わたしは、イザヤと共に在りたいと望むだけの、ただの女です」

「つまりそれは、ご自身が国とは関係がないと、そういうことです

か？」

「わたしの心はすべて、イザヤにあります」

「……そうですか」

侍従長が笑い方を変えた。不気味にも思えた笑みから、人好きする優しい笑みに。

だから、わかった。

この侍従長は、すべてを知っている。
わかっている。

リヨクリヨウ国のみならず、各国の王の思惑をすべて、承知している。

「あなた方の近くに感じる気配に、伝えてください。ありがとうございます、と」

「え……？」

「あなたのような聡明な方と、そして無鉄砲だけど真つ直ぐな方に
出逢えたことは、わが国主にとって幸いなことです。とてもよい関
係が築けそうで、これからが楽しみですよ」

侍従長はギルの存在を不審には感じているようだが、それをヒヨ
ウジユやイザヤにこれ以上問い詰めるつもりはないらしい。むしろ、
安心して欲しい、と言っているような気さえする。

「では、このような場所から失礼してしまったので、帰りもこちら
から失礼しますね。淑女のお部屋にお邪魔して、申し訳ありません
でした」

きつちりと頭を下げた侍従長は、欄干に足をかけると、ひらりと

外へと姿を消した。その身のこなしは、どう見ても侍従とは思えない。

本当に彼は侍従なのだろうか。

首を傾げたところで、どうやらギルのことは見逃してもらえたらしいとわかって、ヒョウジュはほっと息をついた。

「ひよ！」

「……ギル？」

侍従長が消えたところから、ギルが再び姿を見せた。今度は人型ではなく、黒犬の姿だ。

「変な気配がした。ひよ、無事か？」

露台からこちらに駆け寄ってきたギルに両腕を広げ、その柔らかな黒毛に顔を埋める。

「変な気配って……侍従長も同じことを言っていたわ」

「じじゅうちょう？ おれが言ってるのは、人間だけど人間じゃない奴のことだ。この近くから感じた。だいじょうぶか？」

どうやら侍従長に対し、ヒョウジュが不思議に思ったように、ギルもなにかおかしい感覚がするようだ。

「あの人、ギルのことをわかってるわ」

「だろうな。ずっと探り合いだ」

「そうなの？」

「最初は気にならなかった。おれも疲れてたから」

「そう……でも、もうだいじょうぶ。あの人、言っていたわ。ありがとって」

「ありがとう？ なんのことだ」

「とてもよい関係が築けそうで、これからが楽しみだそうよ」

「……なんだそれ」

意味がわからない、とギルは首を傾げ、その顎をヒョウジュの肩口に乗せる。ヒョウジュも、あの侍従長がどんな意味を込めてそれを口にしたのか、それはわからない。けれども、彼が悪意あつていたわけではないというのは、わかる。彼はさまざまなことを心配しているのだろう。そんな気がした。

「ところでギル、あなたに訊きたいことがあるの」
「うん？」

ヒョウジュはその腕からギルを話すと、灰色の双眸をじっと見つめた。

「リョクリヨウ国は、滅ぶなら、もう二十年も前に、滅んでいるはずなのね？」

「イーサがいたからそうならなかっただろう」

「そう……やっぱり、そうなのね」

やはり祖国の脅威は、どこにもない。

「ねえギル、わたしたちは、なにを、怯えていたのかしら？」

「知らない。おれには理解できない」

「……そうよね。わたしたちは、なにもないのに、怯えていたのね」

ばかだ、と思った。

父王も、父王の考えに賛同した者たちも、みんなばかだ。

どうして、気づかなかったのだろう。

どうして気づけなかったのだろう。
脅威など、ないのに。

「だから言うんだ。どうしてイーサをわかってくれないんだって」
「ええ。みんなイザヨイを……イザヤを、わかってくれないわ」
「ひよはイーサと一緒にいるべきだ。イーサからひよを奪う奴は、
おれが噛み砕いてやる」

「……ありがとう、ギル」

おそらく父王は気づいた。ギルの言葉で、見過ごしてきたものに
気づいたはずだ。それをどう修正していくか、父王は見せつけなけ
ればならない。イザヨイの魂を持つイザヤに、イザヤにつき従うギ
ルに、そして利用しようとしたわが娘に、その結果を見せつける必
要がある。

父王は、イザヨイの行いのみならず、その想いを正しく理解でき
なかったのだから。

間違わないで、とヒョウジュは願う。

イザヨイが護った国は、今も、護られ続けている。

見誤らないで、と祈る。

滅んでもおかしくはなかった国が、今も苦しいながらも生き延び
ているその理由が、今ここに有るのだ。

20 : 大地を踏む。 4 (前書き)

イザヤ視点です。

目を開けると、そこにヒョウジユの姿はなく。

身体を包む浮遊感のようなものに、イザヤは首を傾げる。

支えの頼りない感覚に戸惑いながらも身体を起こすと、そこは、秋の気配が漂う草原だった。

ああ、夢を見ているのか。

直感のとおり、草原には以前の夢で見た、黒に近い赤毛の男がぼつんとひとり、空を見上げて座っていた。男が見上げている天は今にも雨が降り出しそうな曇り空で、眺めていて楽しそうには到底思えない。それなのに、口許には笑みがある。

ああ、目が笑っていないのか。

男の横顔から見える双眸は、ひどく虚ろだ。まるで、心がどこか遠くへ飛んでしまっているようだ。

「なあ、あんた……」

イザヤは男に声をかけようとして、しかし急に、目の前の光景が歪む。あまりの歪みに眩暈がして瞼を閉じ、眩暈が治まってから目を開けると、そこはこの数日で見慣れた部屋だった。

どうやら白昼夢を見ていたらしい。

「……ひょ？」

と、いるはずのヒョウジユを呼んで。

「なあに？」

と、返ってきた声にほっとする。

頬を抓って、これが現実であることを確認すると、イザヤは寝台から身体を起こした。

ヒョウジュは露台に近いところにある椅子に腰かけて、本を読んでいたようだった。イザヤが寝台から起きると、立ち上がった本を椅子に起き、そばに来てくれる。

腕を伸ばして、ヒョウジュを捕まえた。

「イザヤ？」

「……また、夢を見た」

「夢？」

「前にも見た。コウガ族の男の……なんか、楽しくなさそうに、曇った空を眺めてんの」

なぜあの男の夢を見るのだろう。逢ったことはもちろん、会話だつてしたことのない人間だ。

あれはいつたい、誰だろう。

「ねえ、イザヤ……もし、あなたに前世があるとしたら、どう思う？」

ふとヒョウジュに、そう問われた。

「前世、ね……あるとしたら、たぶんおれは、めちゃくちや人好きだろうな」

「どうして？」

問われて、にこりと、イザヤは笑う。

「好きになりたいって、よく、思うから」

ふとした瞬間に込み上げる、人間への憎しみがある。けれどもその裏には、揺るぎないとしさもある。だからきつと、前世があるとしたら、イザヤは人間が好きだったのだ。

とても、とても、人間が好きだった。

生きている今が、そうしようとすることに疲れてしまつくらいに。

「前世のおれは、獣だったのかもしれない」

「……ギルみたいに？」

「ギル？ ああ……うん、ギルっぽいかも。ギルと違つとすれば、不特定多数つてとこかな。ギルはおれとかひよ以外、あんまりよく思つてねえからさ」

ギルのような黒い犬だったかもしれない。いや、そうだっただろう。もし前世があるとしたら、イザヤは黒い犬だった。そんな気がする。

「逢つたことはないけれど、そういう人をひとり、知っているわ」

「え？」

「イザヨイというの」

ヒョウジュがふと教えてくれたその名に、イザヤはぴくりと眉を動かす。

どこかで聞いたような、いや、その人を知っているような気がしてならない。だのに、はつきりしない。朧がかって、頭がもやもやとする。

「そいつ、コウガ族の……おれの夢に出てきてる奴？」

「どうかしら……そう思うの？」

「そんな気がする。すげえ人好きそうな顔してたし、子どもが好きみたいだった。ただ、世界に泣いて……絶望もしてたな」

「絶望……？」

最初に見た夢を思い出して、イザヤは考える。

あのコウガ族の青年は、世界に嘆いていたのだ。

「おれの世界を壊さないで、奪わないでって……叫んだ」

素直に泣けばいいのに、泣くこともできず、心で泣いていた。思
い出すと、なぜだろう、胸が締めつけられる。

自分も同じようなことを、思ったからだろうか。

「ひよ……ひよは、おれのものだよね？」

「……イザヤ」

「おれだけの、ひよだよな？ おれのそばに、ずっといてくれるよ
な？」

イザヤの世界は、ヒョウジュで回っている。

あの頃、この世界に来るまでは、しがみつくようにしてそばにい
た祖父母と同じように、イザヤの世界はとても狭く、そして脆い。

だから、ヒョウジュがいるこの世界を、壊されたくないし奪われ
たくない。

失ったら、絶望する。

護りたい世界を、破壊したくなる。

夢の青年が護ろうとしていた世界でも。

「ひよ……ひよ、おれのひよ……ひいよ」

ぎゅっとヒョウジュに、しがみつく。

なんて情けないんだと、なんて恰好悪いんだと、思った。

それでも、縋らずにはおれない。

失うかと思ったその衝撃は、今も、イザヤの胸の裡で燻っているのだ。

「だいじょうぶ。だいじょうぶよ、イザヤ。わたしはイザヤのそばにいるわ。ずっと」

「おれをひとりにしないで」

「わかってる。だから、ね……イザヤも、わたしをひとりにしないで」

手を伸ばせば、空の瞳が優しくも切なくイザヤを見つめている。その瞳がいとしくてならない。ヒョウジュが好きだ、好きという言葉では収まりがきかなくなっている。

ああ、どうすればこの心を、彼女に見せてやれるだろう。

このいとしさは、言葉にならない。

「わたしを置いてかないで、イザヤ」

潤んだ空の瞳が、イザヤの頬にぽたりと、小さな雫を落とす。あまりにも綺麗で、あまりにも温かい。

「泣くな……泣くな、ひよ」

「イザヤも泣いているわ……泣かないで、イザヤ」

ぎゅっとしがみついていたのに、ぎゅっと強く、包みこまれた。柔らかな身体は、もうそれだけで、イザヤを安堵させる。

「ひよ……っ」

誰かをこんなにいいと思ったのは、初めてだ。

誰かをこんなに失いたくないと思ったのも、初めてだ。

ヒヨウジュに出逢うまでの自分は、ただひたすら生きていただけだったのと、今さらながらに思う。その日常を、当然としているだけだったのだと。

誰かをいとしく思うことが、日常の一つ一つに鮮やかな色をつけていくなんて、知らなかった。

だから。

「逃げよう、ひよ……ここから、国から、すべてから」

「え……？」

「おれがひよを護る。すべてから。だから、おれと逃げて、ひよ」

「イザヤ……」

逃げよう。

夢の青年が、泣けずにいた世界から。

ここから。

ヒヨウジュを奪おうとする、国から。

嘘と偽りだらけの、すべてから。

その大地を踏むために。

逃げよう。

そう言ったあとのイザヤの行動は、早かった。正確には早いのではなく、もともと手荷物がイザヤにはなく、ヒヨウジュもまたそれほど持っていなかったので、荷造りをする必要がなかっただけだ。イザヤは夜を待って、聖国の皇城を抜け出す算段を立てた。綿密ではなかったが、ギルがいればどうにかなるものだ。

だが。

「ああやっぱりねえ」

と、夜も遅くに現われたあの侍従長が、イザヤとヒヨウジュの前に立ちはだかった。

「そろそろ限界かなあとは思っていたんですけどね」

「……退け」

のんびり笑う侍従長に、イザヤは敵意も剥き出しに威嚇する。どこに持っていたのか、腰には双剣があつて、その柄も握っていた。しかし、侍従長は怯まない。ギルが警戒を露わにしたように、その笑みはどこまでも得体が知れなかった。

「そう警戒しないでください。べつに邪魔はしませんよ」

「？　なんだと？」

「隠れているのも疲れるし、つまらないでしょう？　だから、そろそろ外に出してあげようかなと、思いましたね」

「……協力するとか、ぬかしてんのか？」

「そうとも言いますね」

各国の思惑やリヨクリヨウ国王の考えも承知しているのだろう侍従長は、威嚇するイザヤを宥めるわけでもなく、淡々と「ついて来てください」と言った。

「どこに連れてく気だ」

「うちの皇帝陛下の面目が潰れないようにする場所へ」

「どこだって訊いてんだ」

「つまりサリヴァンのところですよ。なんでわかんないですかね」

おれは侍従ですよ、と言うと、苦笑した侍従長はこちらに背を向け、振り返ることなく歩いていく。ついて来ているか確認もしないその姿に、ヒョウジュはどうしたものかとイザヤを窺った。

「どうするの？」

逃げることに、反論はない。このまま隠れていても埒は明かず、また過ちに気づいた父王がこれ以上ヒョウジュを聖国へ嫁がせようと政略的になにかすることもないだろうから、侍女アビには申し訳ないが、ここでヒョウジュが消えても大きな問題にはならないはずだ。

「意図がわかんねえ……とにかく、ばれちまったし、ついてくしかねえんだろうけど」

「イザヤ、怪我のほうは？」

「なんともねえよ。頭やばくなるくらいの怪我は初めてだったけど、初めてだった分、かなり休んだし」

「平気？」

「ああ」

それなら、あの侍従長の言うとおりにしよう。そう言うと、イザヤは怪訝そうな顔をした。

「信じんの？」

「あの人はすべてを承知しているわ。だからたぶん、陛下もそう」

「……よくわかんねえ」

「説明は歩きながら。行きましょう、イザヤ」

首を傾げたイザヤを促して、暗闇に溶け込み始めた侍従長の後ろ背を追った。

「わたしが聖国に来たのは、その……嫁ぐためだったの」

「嫁がせねえよ？」

「わかってる。わたしも嫁ぐ気なんてないわ。そうじゃなくて、父上さまや兄さまがそうしようとした理由よ」

「政治的な……なんかだろ？」

「そのなにか、わかる？」

問いに、イザヤは顔をしかめた。そういうことは考えたことがないらしい。

「大陸の調和と均衡の問題、そう言えばわかるかしら？」

「……おれ、歴史の勉強はしてねえ」

こんなところで残念な生徒を感じたくないが、イザヤらしいとい

えばらしい姿だ。

「二十年くらい前の害獣被害のことは？」

「それは少し知ってるけど……その辺りから害獣被害が増えたって」

「聖国の先帝が帝位を継いだのが、その辺りのことよ。害獣の被害が増えたのは、先帝のせいだろうと、各国の王たちは考えているの」

「は？　なんで？」

「聖国の皇帝が、この大陸の調和と均衡を司るからよ」

「……なんかそれ、聞いたことが……天恵とかいう力だっけ？」

「そう。わたしに穢れを抜く浄化の天恵があるように、聖国の皇帝には調和と均衡の天恵があるの」

「その力があるなら、害獣の被害は増えるはずねえんじゃない？」

そのとおりだ。

リヨクリヨウ国に現われる害獣は、言わば世界の塵、澱みだ。そしてそれら塵や澱みは、聖国の均衡と調和のもとに、増えもしなければ減りもせず、ある一定の数で捕捉される。リヨクリヨウ国は、世界を掃除する国として、またその調和と均衡の狭間にある国として、存在しているのだ。

しかし、それが崩れた。

二十年ほど前のことである。

「先帝には、その天恵がなかったのではないかと、言われているわ」

「天恵がないと皇帝になれねえの？」

「ええ。その天恵は帝位を継ぐ絶対条件よ」

「……じゃ、なんで？」

「先帝は、実弟を弑しているの。皇弟が天恵受授者だったと、そういう説があるのよ」

大陸の調和と均衡が崩れたのは、そのせいだと言われている。噂されている程度では済まないほどに、そう密かに囁かれている。これが事実だろうというのは、聖国先帝ヴェナートの御世を鑑みれば、明らかだ。そもそもそうでもない限り、大陸の調和と均衡が崩れるわけもない。

「先帝が崩御したことで、その帝位はただひとりの皇太子殿下に……サライ皇帝陛下に継がれたわ。その人柄や優秀さは誰もが唸るほど敏腕ではあるのだけれど、それでも各国の王は、信じ切れていないのよ」

「だからひよが？ おかしくね？」

「わたしが嫁いだところで、聖国の天恵が戻るわけないわ。それはわかっていることなの。けれど、わたしが聖国に入ること、変えられるなにかはあると父上さまは考えたのよ」

「……反乱か、或いは革命か……そんなところ？」

「そうね……聖国を、弾劾するつもりだったのかもしれないわ。聖国は神の国だから」

「……神？」

「聖国にはいるの。だから、聖国と呼ばれるのよ」

「ふうん……神サマのいる国ね」

どこか信じられないような顔をするイザヤに、それも仕方ないと思う。ヒヨウジュも、聖国に神がおられると昔から教わってきたが、話に聞くだけで逢ったことはない。本当にいるのかと訊かれたら言葉に詰まってしまう。

「あの侍従長を信じてもいいと思うのは……陛下に、天恵があると思っただけだよ」

「……まあ、ねえと皇帝にはなれねえしな」

「嘘で塗り固めることだってできるのよ。天恵なんて、なんの印も

ないんだもの」

「それでも、ひよはへイカに天恵があると思うわけだ？」
「あるわ」

確信を持つて、言うことができる。それはギルが、滅ぶのならとうの昔に滅んでいたと、その言葉があつたからだ。

「リヨクリヨウ国は滅びなかった……生き延びた……皇帝の代が変わる、このときまで……それが証明だわ」

「ええと？」

「害獣が世界の塵や淀みだと、知っていて？」

「聞いたことある」

「聖国とリヨクリヨウ国は密接な関係にあるわ。世界の調和と均衡を司る国だもの、リヨクリヨウ国はよくも悪くも影響を受ける。それが、害獣の数と比例するのよ」

「害獣が聖国の……あー、なるほど、うん、意味わかった。おればかだから言葉にはできねえけど、ひよが言いたいことはわかる」

ヒヨウジュが説明したいことを、どうやらイザヤは理解できたようだ。

「つまり、天恵を持つてる弟を先帝が殺したから、二十年前の害獣被害がひどくなって……天恵もない先帝のせいで、害獣の被害は増加した、んだな？」

「そうよ」

「新しく皇帝になった奴が天恵を持てれば、害獣は減る？」

「ええ、確実に減るわ。二十年前の惨劇は繰り返されない」

「ふうん……そういうことか」

「なに？」

「いやさ、ばかなおれでも、けっこういい線いったなと思って」

「いい線？」

「けつきよくリヨクリヨウ国は、ひよを傀儡にしたんだよ。国のために」

はん、と嘲るように唇を歪めたイザヤは、随分といやそうにしていた。

「ひよが王女だから、なんだよ。その法則がわかりや、どうにでもできんじゃねえか。ひよを利用しなくても、滅ぶなら滅ぶし、滅ばねえなら前に進むしかねえだろうが」

ギルと同じようなことを、イザヤは言った。

「もっと早くに気づけよ……国の過ちに」

そう、イザヤが呟くように言ったときだった。

「それが過ちだと気づいていたら、なにが変わったと思う？」

廊下の窓際に、寄りかかるようにして腕を組み立っていたのは、聖国の皇帝だった。

碧い双眸が、なんの感情もなく、こちらを見ている。

「先帝は考えを改めたか？ 皇弟は生き返ったか？ 狂った国の天恵は正されたのか？」

矢継ぎ早にくる問いに、ヒョウジュもイザヤも答えられず立ち止まる。

皇帝は続けた。

「聖国にもはや望みはないと、多くの国が主上国たるわが聖国を見捨てた。捨てられたわが国で、欠片でしかない望みを持った者たちが、いなかったと思うか？」

唇を歪めた皇帝は、皮肉るように嗤う。

「たくさんの臣民が、皇帝を見放したよ」

え、と驚かせられる言葉を、皇帝は平然と口にした。

「かくいうおれも、父とも呼ばせてくれぬ皇帝には、見切りをつけていたがな」

「サリヴァン！」

「気にするな、ラク。さすがはリヨクリヨウ国の姫、そして狩人だ。いい読みだよ」

侍従長に制止を受けても、皇帝は平然としていた。

22 : それが真実で。 2

ついて来い、と皇帝が言った。またさらにどこへ移動するのかと思いきや、皇帝の足は外へと向かっているようで、気づけば深い緑に囲まれていた。

「フェンリスを呼んでやる。聖鳥が飛び立つ姿でもあれば、おまえたちがどこへ行こうとも、誰も咎めやしまい」

「フェンリス？ 聖鳥？」

「見ればわかる」

皇帝は天を仰ぎ、呟くように「フェンリス」とその名を呼ぶ。雲一つない夜空は、それだけではなんの変化も見られなかったが、しかし緩やかな風が吹いたと思ったとたんにそれは目の前に現われた。

『呼んだか』

まずはその姿に、そして言葉に、ヒョウジュもイザヤも驚いた。

「でかつ……なんでこの世界のイキモノってみんなでけえの？ おれ自分のちっこさに泣きたくなくてきたんだだけ……うわ、自分で自分のことちっこい言っちゃった」

「イザヤ、だいじょうぶよ。こんなに大きい鳥、わたしも初めて見たわ」

「ほ？ ひよも？ え、じゃあこいつが規格外？」

大木に並んでも劣らない大きな白い鳥は、動物にも等しく与えられる天恵を得て、巨大化したのだらう。言葉を解すということは、知力も備わっている。そんな動物は、魔と呼ばれているギル以外には、ヒヨウジュも初めて相見えた。

それにしても、フェンリスというらしいこの聖鳥は、大きい。ギルも随分と大きな犬だが、この聖鳥ほどではない。

『うむ？ 白の国の姫か？』

「え、ひよの知り合い？」

『そちらは赤の騎士じゃな』

「えっ？ おれも知り合いっ？」

『……いちいち忙しい奴じやの』

やたらと反応するイザヤは、その目はきらきらとしているから、おそろくきつと、フェンリスにものすごい興味がある。

「フェンリス。ふたりを乗せてくれるか。行き先はふたりが決めるが」

皇帝がフェンリスを撫でながら口を開くと、赤い瞳がじつとヒヨウジュを、そしてイザヤを見やってくる。

『……かまわぬ』

それは、その背に乘せてもいい、という意味なのだらう。フェンリスの答えに皇帝が頷き礼を言つと、皇帝もじつとこちらを見やってきた。

「行け。この選択がおまえたちをどう導くかは知らないが、貫き通す意志があるなら、これを利用しろ」

利用しろ、というのは、フェンリスを、だろうか。いや、そうだろう。逃げようとしていたのだ。先回りされるように、皇帝が下準備していただけだ。

「……なあ、あんた」

フェンリスに興味を惹かれていたイザヤが、当然だが、怪訝そうに皇帝を見る。

「あんたにとって、こんなことする意味、あんのか？」

皇帝に対し、それは無礼な口の効き方だ。けれども、注意するはずの侍従長はなにを言うこともなく、また皇帝も気にした様子がない。

「意味があるから、フェンリスを呼んだ」

「いいのかよ？ おれたちを逃がして」

「よくはない。だが、悪くもない。おれはリヨクリヨウ国の王太后の意見に、賛成しているからな」

「……ひよとおれのこと？」

「おまえたちの仲を引き裂けるほど、おれはおまえたちを知らない」

知らない者に対し、知ったようなことはできない。それはときには必要なことだが、今ほどこんな無駄なことはないと、皇帝は少し呆れたように言った。

「……おれ、あんたのことわりと好きかも」

「は？　なんだ、いきなり」

「おれとひよのこと、否定しねえもん」

「……だから、おれはおまえたたちのことを、それほど知っているわけではないだけだ」

「おれ、ミドリ・イザヤ。リヨクリヨウ国で狩人やってる。それで、ひよの彼氏。ひよはおれんだから、手え出すなよ」

にまっと笑いながらヒョウジュの腰を抱いたイザヤに、皇帝が首を傾げる。

「牽制する意味があるのか？」

ないけど、と珍しくイザヤは悪戯っぽい笑みを振りまく。

「なああんた、名前、サリヴァンだっけ？」

「ああ」

「王サマっぽくねえのな」

「……よく言われる」

「あんたがこの国……えと、聖国？　あ、ヴァリアス帝国だ。の、皇帝になったってことは、その天恵があるんだよね？」

はっと、ヒョウジュはその話題に瞠目する。まさかここでイザヤが直接訊いてしまうとは、思っていなかった。だが、その答えはヒョウジュも知りたいことだ。

「……なければと、思ったことは幾度もある」

皇帝の表情が陰る。しかしイザヤの問いには、是と答えたようなものだ。

「そう言っなよ。なけりゃよかった、なんてさ」

「……なぜ？」

「あんたがいれば、リヨクリヨウ国の害獣は、そのうち数を減らす。おれは……この剣で、ひよだけを護ることができるようになる」

ふと柔らかな笑みを浮かべたイザヤに、こんなとき、こんな場所なのに、ヒョウジユはどきっと胸を高鳴らせてしまった。その音がイザヤへと届いてしまったのか、イザヤはふわふわとした笑みを、ヒョウジユに向けた。

「護るよ、ひよ。なにからも、すべてから、ひよを護るよ」

「イザヤ……」

「だからおれを選べ、ひよ」

強い眼差しがそこにあった。護りたいと思うのはヒョウジユも同じなのに、その強さに心惹かれた。

「わたし、イザヤがいいの。イザヤのそばに、いたいだよ」

国を捨てたいわけではない。捨てようとは思わない。ヒョウジユは王族で、国の象徴たる存在だ。

けれども、ただひとりの、人間でもある。

狩人に恋した、ただの女でもある。

狩人を愛したのは、王女だからではない。

「サリヴァン！ ありがたく、このでかい鳥、利用させてもらっぞ」

「ん。ああ、好きにしろ」

「いつかあんたが困ったとき、助けてやる」

「今のところは必要ない。今はおまえたちだ。いいからさっさと行け。気づかれるぞ」

「サンキュ！」

「さんきゅ？」

「ありがとって意味！」

「……ああ。礼を言われるほどのことではない。おれの都合もある」

いいから行け、と皇帝に促されると、イザヤはヒョウジュの手を取り、ぐいと引つ張ってフェンリスに駆け寄った。準備が整ったのかと、フェンリスが姿勢を低くしてくれたので、身軽なイザヤが先に乗りあがり、ヒョウジュは衣装に邪魔されながらもイザヤに助けられてフェンリスの背に乗った。

『強くわれに掴まれ』

そう言われたが、柔らかな羽毛を握るのには気が引ける。

「ギルに乗ったときみたいに、とにかく全身でしがみつけばいい」

腰をイザヤに支えられて、気にするなと言ってくれたフェンリスにしがみつく。

フェンリスが、飛び立つ姿勢に入ったとき、はっと、ヒョウジュはそれを思い出した。

「陛下！」

「ん？」

「アビを……わたしの侍女を、お頼みしてもよろしいでしょうか」

これからは一緒にいることも、今連れていくこともできない侍女アビは、幼い頃からヒョウジュに仕えてくれた。朝になってヒョウジュがいないことを知り、父王にその積を問われるだろうことを考えると、胸が痛む。図々しいことだが、頼めるものなら、皇帝

にアビの今後を任せたい。

「侍女も近衛も、預かっておく。気に病むな」

「あ……ありがとうございます！」

快い返事がもらえるとすぐ、フェンリスが翼を大きく広げた。

『行くぞ』

ぱさりと、白い翼が羽ばたく。不快感のない重みが全身を襲ったが、まもなく緩やかになっていく。目を瞑って重力や風に耐えていたヒョウジュだったが、イザヤが奏でる口笛が聞こえて、そつと瞼を開けた。

「ギルを呼んだ。白い鳥を目印にしろって伝えたから、あとからついてくる」

口笛はギルを呼び寄せるものだったらしい。

「見ろよ、ひよ。もう、あんなに小さい」

上昇していくフェンリスの上から、聖国の城が見えた。どんどん小さくなって、もはや皇帝の姿もない。

「高いところ、平気なんだな？」

「え？」

そういえば、フェンリスは鳥なのだから、空を飛んでいるということになる。だが、大きな白い鳥は、その背も広く、そしてその大きさから安定感もあって、まず怖いとは思わなかった。

『われは落とさぬ。安心しろ』

「信じるぞ、鳥。ひよを落としたらただじゃおかねえからな」

『われはフェンリスだ。落とさぬと言った限りは、落とさぬ』

「それって、故意に落とすこともあるってことか？」

『さてな』

「落とすなよ！」

『任せよ』

楽しそうに笑ったフェンリスに、イザヤはしばし揶揄されていた。その光景をヒョウジュは微笑みながら見守っていたが、ふと、こんなに高く飛んでいるのに未だ届きそうもない夜空に、目が奪われた。

「久しぶりに見たわ……」

「え？ ああ、空？」

「こんなに穏やかな気持ちで空を見たのは、本当に、久しぶり」

「あー……ずっと、氣い張ってた？」

「ええ、そうね。聖国へ嫁げと言われたことから始まって……今日まで、空を見上げることもなかったわ」

風が気持ちいい。空が美しい。ふとした瞬間のその想いが、今はなんだかとてもいとおしい。

「……ひよ」

「ん、なあに？」

「ありがとう」

急に強く引き寄せられたと思えば、イザヤに礼を言われた。

「おれ、ずっと中途半端で……なんも、わかってなくて……けど、

ひよだけは、どうしても欲しくて……いろいろ迷惑かけたり、面倒かけたりするけど、でも、おれ、ひよが好きだから」

「……わたしも、イザヤが好きよ」

突然の告白は、けれどもするりと、ヒョウジュからもこぼれた。

「サリヴァンの言葉をぜんぶ信じるわけじゃねえけど、たぶんサリヴァンなら、いい王さまになると思う。だから、リヨクリヨウ国は平和になる。害獣の数が減って、狩人も、穏やかにはいられねえと思うけど、でも、今までより危険は少なくなると思う。おれ、狩人だけど……ひよ、一緒にいてくれるか？」

「わたしの心は、もうずっと、変わらないの。変わらないの。わたしこそ……わたしは王女だけれど、一緒にいてくれる？」

「おれはひよが好きだ」

「……わたしも、同じよ」

「ひよ、おれの家族に……なってくれる？」

「わたしはイザヤと家族になりたいの」

わかって、とヒョウジュは微笑み、イザヤの頬に手のひらを添える。擦り寄ってイザヤは、泣き笑いにも似た顔で、また「ありがとう」と礼を言ってきた。

「ありがとう、なんて……わたしにはそれが真実で、それ以外がないだけよ？」

「うん……うん、ひよ。おれ、すっげえ嬉しい」

「……わたしも、すごく嬉しいわ。イザヤに、好きと、言ってもらえたもの」

当たり前のように言ってくれたことが、こんなにも嬉しい。この喜びは、言葉に現わすことなどできない。

今さらだが、イザヤに「好きだ」と言われたことがとても嬉しくて、涙がこみ上げた。

「わたし……っ……すごく、嬉しいわ」

ヒョウジュが恋したのは、怖がりで臆病な狩人。強くて、とても弱い人。

「好き……っ……好きよ、イザヤ」

「な、泣くなよ、ひよっ」

「愛しているの……っ」

「あ、あい……っ、わっ……っ、嬉しいかも」

たまらず泣き出したヒョウジュを、イザヤは強く、抱きしめてくれた。

「おれも、ひよのこと、あ……愛してる、よ」

恥ずかしそうに、けれども確かな力が、ヒョウジュを包み込んだ。

白い聖鳥が皇城から飛び立つという僥倖を多くの人々が目にしたその夜、誰に知られることもなく、異界より現われた黒の狩人が北方国の白き姫を攫った。

22 : **それが真実で。2（後書き）**

終わりにかけていたのに放置してすみません。
楽しんでいただければ幸いです。

23 : 宴の夜に舞い降りる。 1 (前書き)

* 視点が視点だけに、会話だらけになっています。
視点が誰かは文末にて。

23 : 宴の夜に舞い降りる。 1

「おれが困っているとき、助けてくれるのではなかったのか」

と言ったのは、皇帝だった。
いや、皇弟だった。

「困ってんの？」

問うたのは、イザヤだった。

「もう終わった」

「じゃ、いいじゃん」

「……軽いな」

「だって、べつに助ける必要なかっただろ？ あんた、今めっちゃ
ちや幸せそうだし」

「まあ……幸せではあるが」

「おれも幸せ」

にか、とイザヤは笑い、皇弟の苦笑を誘う。

「にしても、あんた、皇弟だったんだな？ ちらつと見たけど、あ
んた、皇帝にすつげえ似てた。兄弟いたんだ？」

「病に臥せていたから、おれがしばらく玉座を預かっていた。お
まえが言うように、おれと兄上はよく似ているからな。入れ替わっ

「ていても、気づかれない」

「双子？」

「いや。二つ、兄と歳が離れている」

「あんた今いくつだよ」

「二十七だが？」

「え、マジ？ おれのほうが歳上だったの？ おれ、あんたの兄ちゃんと同じ歳だよ」

「二十九？ おれのほうが歳下だったのか」

「なんつだよ、その意外そうな顔は！」

「いやべつに」

「悪かったな、ばかっぽい顔で！」

「そうは言ってない」

久しぶりに逢ったというのに、つい昨日別れたばかりのようにふたりの会話は弾む。旧友なのでは、とちらりと思うが、イザヤと皇弟はたったの二度、逢って僅かな話をしただけの仲だ。

「え？ じゃあなにか？ あんとき、あんた十八だったわけ？ おれが二十歳で？」

「そうなるな」

「……凹む、マジ凹む」

「はあ？」

「おれ、すつげえガキだった……」

「おれもガキだったが」

「そのあんたより、めっちゃガキだったんだよ！」

「今とさして変わらないぞ」

「うわ凹んだ！ おれ凹むわそれ！」

頭を抱えて蹲ったイザヤに、皇弟はきょとんと目を丸くする。イザヤが問題にしたことを、まったく理解していない顔だ。

「おいサリヴァン、もうちょっとガキになれよ！ おれが可哀想だろっ？ おれ可哀想な子だよっ？」

「具体的に言うത്？」

「うわ凹む！」

イザヤが大袈裟な身振り手振りで転げ回り始めると、かまわないほうがいらしいと皇弟は覺つたらしく、卓に用意されているお茶のところへと移動し、ひとり椅子に腰かけた。

「無視すんなよ！」

「あ？ ああ悪い。どこを突っ込めばいいのかわからなくて」

「無視しないでくれたらそれでいいよっ？」

「難しいな……」

「簡単だよ！」

「咽喉乾かないか？」

「あ、いただきます」

転がった反動を生かして飛び起きたイザヤは、皇弟の向かいの椅子に腰かけ、もう冷めてしまったお茶に手を述べた。イザヤの素早い変わりように、皇弟は苦笑している。

「あのときはわからなかったが、けっこう騒がしい奴だったんだな」

「あー、あんときなあ、ひよの一大事で頭いっぱいだったからなあ。

怪我也ひどかったし」

もうほとんど指先には感覚がない、とイザヤは苦笑しながら右の手のひらをぶらぶらさせる。

「おまえも、動かないのか」

「いや、動くには動く。感覚が遠いだけ。って、おまえもって、あんたも？」

「おれは腕が全体的に……まあ、昔からだが」

「剣握れねえの？」

「ああ」

「……そっか。おれは両手つかえるから、そんな不自由もねえけど」「おれもべつに不自由はしていない」

左手ですべてできる、と言った皇弟は、そういえばずっと、動かしているのは左だけだ。右はほとんど動かしていない。

「そっぴやさ、あんた、昔から髪、白かったか？」

「自然とこうなった」

「ふうん……まあ、おれも気づいたら、目え蒼くなつてただけどさ。髪も、ちつと色が変わった」

「コウガ族、だったか」

「らしいな、この特徴を持つ種族は」

「らしい？」

「おれ、自分が誰から産まれたのかとか、知らねえもん」

「両親を知らないのか」

「そ。おれを拾って育ててくれたのは、ばあちゃんとじいちゃんよ。そのふたりも、知らねえらしい」

「……そっか。おれも、母親の顔は知らないな」

「へ？ そうなの？」

「別々に暮らしていた。そもそも、いることすら知らなかったからな」

「あー……訊き難いんだけど」

「ん？ ああ、亡くなっている」

「てことは、やっぱり正妃？」

「知っているのか」

「歴史の本は、少し前にひよに読ませられて」

少しだけ空気が重くなった。だが、皇弟のほうがまったく気にした様子がなく、イザヤひとりだけ申し訳なさそうにしている。しかしそれも数秒ばかりで、なにかを思い出すと、ぱんっ、と両手を合わせて叩いた。

「歴史で思い出した」

歴史で思い出すとは珍しいことだ。イザヤは本を読まない。強制的に読ませられてはいるが、自ら進んで本を読もうとする奴ではないのだ。ゆえに、歴史にはまったく興味がなく、強制されて監視がついて、初めて目にする。

「皇の剣つていう一族、まだいんの？」

「……メルエイラ家のことか？」

「そう、そのメなんとか家」

「メルエイラだ。メしか言えないってなんだそれ」

「すつげえ強いって、本に書いてあったんだけどさ。どんくらい強いのかなって。あと、片刃の剣士だって書いてあったからさ」

「なんの歴史書を読んだんだ……確かにメルエイラは強いし、剣は片刃を主流にしている。だが、もう皇の剣とは呼ばれていない」

「じゃあもういねえの？」

「なんで気にする」

「おれも片刃の剣士だから。ちょっと、剣を見せてもらいたくて」

「……呼ぶか？」

「おう呼んでく……、えっ？ 呼べんのっ？」

「というか、さっき逢ったと思うが」

「逢ったのかよ、おれっ？」

自らに逢ったかどうかを問うイザヤの姿に、さすがに皇弟も噴き出して笑った。

「やたらと笑う騎士がいただろう」

「あんたの周りは無暗に笑う奴が多い」

「ラクは違う」

「じゃあ……え、もしかしてあのブラックな笑み浮かべてた兄ちゃんとか、言わねえよな？」

「ぶらつく？」

「黒いつて意味。薄い紫色の目えした兄ちゃん」

「黒いというのは当たっているな……そうか、イーサが片刃の剣を腰に下げていたから、ツアインは笑っていたのか」

「え？」

「ツアイン・メルエイラ。メルエイラ家の当主だ」

「あのブラックな兄ちゃんが！ うわ……ちょっとやかも」

「強いぞ、確かに。天恵者だしな」

「おまけに天恵者かよ。ああでも、剣は見せて欲しいなあ……エンバルで腕のいい鍛冶師、紹介して欲しいし」

「ああ、片刃の剣を打てる鍛冶師はここでは少ないからな」

「サリヴァンは知らねえ？」

「ひとり知っている。だが場所までは……ツアインに訊いたほうが早いな」

「ちょっと待て、と言った皇弟が椅子を離れようとしたが、イザヤは「いやいやいや」と首を左右に振り、皇弟を呼び留めた。黒い笑みを浮かべていた騎士は怖いらしい。

「おれの剣見て笑ってたなら、すっげ怖い！」

「……手合わせくらいしないと教えてくれないだろうな」

「やだ！ おれ弱いもん！」

「なら……ツイに訊いてみるか」

「つえい？ 誰それ」

「妻だ。妻もメルエイラの剣士なんだ」

「女の子なのに剣士っ？」

「強いぞ」

「おれ男の子なのに……」

しょぼん、と凹んだイザヤは、いい歳の男なのだが、皇弟は気持ちがかかるのか遠い目をして唇を歪めていた。

「おれは体力皆無とよく言われるんだがな……」

「あ、うん、そう見える。おれより弱そう。てか、弱いだろ、あははは」

弱いと決めつけられた皇弟は、目を据わらせた。

「ラク、ツアインを呼んでこい」

「うわちよおっ？ 待てまて待て！ 黒い兄ちゃんは怖いって！

つかどこに侍従の兄ちゃんがいるんだよっ？」

「呼べばくる」

「ああ！ そうだった、あの侍従の兄ちゃん変な天恵者だった！」

「ラ」

「呼ぶな！」

頼むから呼ばないでくれ、と反対側にいる皇弟に伸びたイザヤの、なんと恰好の悪い姿か。

ぶはっ、とついに耐えきれず笑った。

「ギル！ おまえもうさつきからなんだよ！ 寝てたんじゃねえの

かよ！」

「ぶふっ……う、悪い。だってイーサ、うるさいし恰好悪いし間抜けだし、ばかだし」

「うるさい！」

眠れたものではない。実に十年近い再会、おまけにそれが偶然だったせいか、珍しくイザヤが興奮気味で、ぎゃんぎゃん煩いのだ。仲のいい友だちも少ないイザヤだから、もしかしたら歳の近い皇弟には友情を感じていて、いやもしかなくても友情を感じていて、再会がたまらなくなったのだろう。

大声を出すイザヤなど、師匠であるシスイ以外を相手に、初めてだ。

今日はいいいものを見た。

きっとイザヤも、今日はいいい日だと思っているに違いない。

あれから九年が経った。

あと少して十年になる。

23 : 宴の夜に舞い降りる。 1 (後書き)

ギル視点でした。

次話で終幕の予定です。

読んでくださりありがとうございます。

24 : 宴の夜に舞い降りる。2

宴の夜に、狩人は異界より舞い降りた。彼は迷子だった。帰る場所を求めていた。王女が出逢ったのは、狩人が黒犬と共に再び大地に立とうとしたときだ。そしてさまざまな壁を乗り越えて、王女と結ばれた。

「聞こえはいいけど、実際はそんなに多くの壁、乗り越えてねえよな」

達観するには少々年端の足りない少年が、母親から渡された書物を読みながらため息をつく。少年の傍らには、少年より幾ばくか若い少女が、少年が呼んでくれる本の内容に目を輝かせていた。

「そんなことないよ。王女さまは、王女さまだったんだよ？　すごく大変だったんだよ」

「夢見がちな少女のそれを壊すようで悪いけど、だってこの黒犬つれた狩人って、たぶん父さんのことだぞ？　王女さまって、たぶん母さんのことだぞ？」

「お母さんって王女さまだったのっ？」

「あちゃー……夢え膨らませるだけだったか。てか、あのでかい城をなんだと思ってたんだろっね、この子。あれ母さんの実家だよ？

お城だよ？」

「お母さん、王女さまだったんだあ」

「ああだめだこの子、あっち行っちゃったよ」

少年は短くため息をつき、書物を閉じる。少女が、もつと読んで聞かせて、とねだってきたが、少年は自分で読めと押しつけた。

「ルナ、まだ読めない文字があるの！」

「おれも読めねえよ」

「お兄ちゃんも読めない文字があるのっ？」

「誰が自分の両親の恋話なんぞ読みたいものか。書いた奴あほだな」

作者は誰だろうと、少女の渡した書物の背表紙をちらりと見て、その名にがくりと肩を落とす。夢見がちな少女を育てた父の名、つまり己れの父でもある人物の名が書かれていた。

「自分で作ったのかよ！ あの人あほだな！」

おそらくは母も携わっているのだろうが、こんなものを書いている暇があったとは驚きだ。しかもこの書物が店先に並んでいたところを見たことがないことから、この書物は世界に一つしかない。自分たちで作ったのだろう。どこにそんな暇があったのだと、少年はたびたびため息をついた。

「あ、お母さんだ！ おかえり、お母さん！」

人通りの少ない木陰で少女、妹ルナと留守番をしていた少年、キサハ、漸く戻ってきた母ヒョウジュの姿を見やった。ちょうどルナが、母の懷に飛び込んでいくところだった。

「ただいま、ルナ。キサハも、待たせてごめんね」

「それはいいけど」

「あら……イザヤとギルはどうしたの？」

「宿探しに行くつてさ」

「ルナとキサを置いていくなんて……困った人ね」

「いや、おれはだいじょうぶだよ。むしろ父さんのほうが危険だ」

警戒心の強さでいくなら、父イザヤより自分のほうが強い、とキサは常から思っている。実際にそうなのだ。剣の腕は未だイザヤを越せないキサだが、それ以外ではキサのほうが勝っている。だから黒犬、ギルも真っ先にイザヤを追いかけて、キサはルナとふたりで留守番をしていたのだ。

「母さんが戻ってきたことだし、父さんを探しに行くか」

「どこまで行ったかしら」

「見つからなかったら父さんに探させればいいよ。ギルがついてんだし」

「そうね……じゃあ、街に入りましょうか」

「地図は手に入った？」

「ええ、だいじょうぶよ」

ヒョウジュは幾分かおつとりしたところがあるから、店先での交渉などは心配するところだが、そのおつとりとしたところを武器にする人だから、買い物をするときはヒョウジュに任せたほうがいい。今回も、聖国であるヴァリアス帝国に入国する際、ヒョウジュの話し方が多いに役に立った。地図も、ヒョウジュに頼めばこの通り、最新版を安価で手に入れられる。ついで新聞も手に入れてきたようだ。さすがは母である。

「へえ、聖国の世継ぎ、皇女誕生だつて。うわ、もう婚約？産まれたばかりなのに、もう婚約者。お姫さまは大変だねえ」

「そんな話が載っているの？」

「読んでねえの？」

新聞をヒョウジュに渡すと、キサが読み上げた部分を熱心に読み始める。さすがは元王女、こういうことには少しでも興味があるらしい。

「ねえねえ、お母さん。お母さん、お姫さまだったんでしょ？」
「あらあら、ルナったら。女の子はみんなお姫さまよ？」

熱心に新聞を読んでいたヒョウジュだったが、ルナに話しかけられると、ぽいつと呆気なく新聞を道端に放り投げた。本当に少ししか興味がなかったらしい。

「だからって捨てるなよ……」

まだ読みたいので、キサは新聞を拾うべく腰を曲げた。しかし、自分で拾う前に、誰かに拾われた。

「あれ……、ギル？」

新聞を拾ったのは、人型になるとイザヤそっくりの顔になる、黒犬のギルだった。

「父さんを追いかけてったんじゃないの？ まさか見失ったとか？」
「いや、途中で知り合いに逢ったから話し込んで。おれはおまえたちを迎えにきた」

「父さんに知り合い？ 話し込むほどの人っていたかなあ」
「ひよも知ってる奴だ」
「母さんも？ 母さん？」

振り返るとヒョウジュはルナを抱っこしたところだった。

「あらギル？ イザヤは？」

「知り合いのところに置いてきた。そいつが宿も提供してくれるらしい。迎えに来た」

「そうなの？ 探す手間が省けたのはいいけれど……どなたのところかしら？」

「あの奇妙な気配のあるじ」

誰だよそれは、という突っ込みは、しかしヒョウジュのちよつと吃驚した顔に阻まれた。

「いらしているの？」

どうやらギルが表現した人物に見当がつくようだ。そんな知り合いがいるなんて、正直驚きだ。そもそも、ギルのその表現を理解できることすら、驚きである。

「誰かわかるのかよ？」

「え？ ええ、なんとなく……そう、あの方が……九年、いえ、もう十年ぶりになるのかしら」

思い出を語るように懐かしそうな顔をしたヒョウジュは、訝しむキサに微笑んだ。

「だいじょうぶよ、わたしも知っている人だわ。というより、お世話になったお方、ね」

「世話になった人？」

「昔、聖国で人生に関わる経験をしたの。それを助けてくれた人よ」

それはまさか、あの書物に書かれているようなことだろうか。あ

れは真実だというのだろうか。

「母さん、あの話……本当なの？」

書物はルナが大事に抱えている。脚色が多いだろうと勝手に思っていたのだが、そこには真実も埋もれているのかもしれない。

「そうよ。わたしは……宴の夜に舞い降りた狩人に、攫われたの」

微笑む母は、とても懐かしそうにしていた。そしてそこには嘘なんてものもなく、どこか嬉しそうだった。

「……どうりで伯父さんたちの父さんに対する反応がひどいわけだ」

「そうね。わたしたちは、反対されてばかりだったから」

「おれでも反対するよ。だって父さん、ばかだし？」

「わたしには可愛い人なのよ」

ころころと笑う母は、心底、父に惚れている。また父も、心底、母に惚れている。それがわかるから、いつも口先だけで父を貶していた。

「あの父さんがねえ……」

剣の腕だけは信頼しているし尊敬もしているが、それ以外はで、父を父とは思えない。それでも、王女だった母を攫うくらいの度量を、父は持っていた。その勇氣だけは忘れずに憶えておこう。そして母を想うその心も、疑うことなく信じ続けよう。

「お母さんはやっぱり王女さまなのね！」

「あらルナ、あなたも王女さまよ？ わたしはイザヤの王女さまだ

から、いつかルナもそうなる日がくるわ」

「ルナも王女さまっ？」

「ええ、そうよ」

「お兄ちゃん、ルナも王女さまだって！ お兄ちゃんは王子さまだね！」

いやおれは王子なんて柄じゃないけど、とキサはルナの言葉に半ば呆れたが、まあ楽しそうだからいい。

「ルナにとってお兄さまは王子さまなの？」

「そう！ お兄ちゃんはルナの王子さま！」

「よかったわね、キサ。ルナはあなたの王女さまよ」

なに言っているのだから、と母にも呆れたが、それもいいか、と思う。

キサはルナの、実の兄ではない。だからルナは、キサにとって実の妹でもない。

けれども。

未来を望んでいいのなら、許されるのなら、この手で永遠にルナを護りたいと思うくらいには、ルナを可愛いと思っている。

「まあ、ルナがおれを王子さまだって言ってくれるなら、それもいいかもしれないねえな」

「お兄ちゃんはルナの王子さまよっ」

「はいはい。とりあえず、父さんのところに行こうぜ？」

書物に真実が埋もれているのなら、あんな経験をしたと思わなくもない。だが、あれは父の物語で、母の物語で、自分のものではない。今ここにある物語が、キサにとってはいいものだ。

ああもしかしたら、だから父は、自分の物語を書物にしたのだろ

うか。いとしく想う日々が、器からこぼれ落ちてしまつのがいやで、形に残したのだらうか。

「キーサ、行くぞ。荷物を持て」

「ん、ああ。……なあギル」

「なんだ」

「おれは父さんが羨ましいかもしれねえ」

「なんだそれ」

「母さんに、毎日、好きだって言ってる」

「……いつまでも恥ずかしい奴だ」

「はは。ギルって、魔のくせに、たまにすげえ人間っぽいよな」

「おまえはイーサに似過ぎだ」

「育ててもらってるからなあ」

ははは、と笑いながら、置いていた荷物を肩に背負った。半分はギルに持ってもらうと、先を歩き始めている母とルナを、追いかけた。

24 : 宴の夜に舞い降りる。2（後書き）

これにて【宴の夜に舞い降りる。】は終幕となります。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

お気に入り登録してくださった皆さま、ありがとうございます。

番外編は……キサとルナのことを、少し描きたいなと思っています。
経緯ですとか。

その際はどうぞよろしくおつき合いのほど、よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2236o/>

宴の夜に舞い降りる。

2011年10月19日22時38分発行